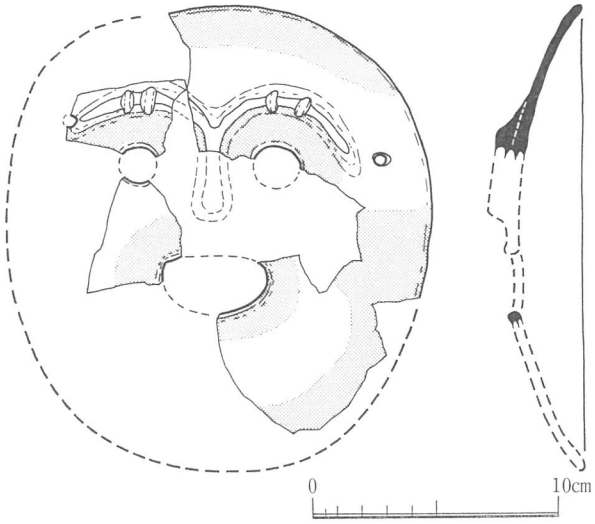
く。⑲は口縁部を内側に肥厚させ、そこに2条の沈線をめぐらし、沈線間に縄文を施す。⑳㉑は口縁部に突起をつくるもので、⑳は口縁部外側の粘土をねじらせて、突起をつくる。突起部の粘土紐には連続刺突文が描かれる。体部には口縁部の粘土紐直下に沈線をめぐらす。またその下位にも横位の沈線を描き、その間にはLRの縄文を粗く充填する。㉑は環状の突起で、内側には円形の穿孔をもつ。口縁部は内側に粘土を貼付け拡張する。㉒は口縁部上端を平坦にする土器で、そこにLRの縄文を施す。器面には口縁部直下に1条の沈線をめぐらし、その下位には沈線と縄文で曲線的な縄文帯を構成する。㉓～㉚は有文土器の胴部である。㉓は胴部に垂下する集合沈線文を描き、そのあとRLの縄文を施す。集合沈線は底部付近まで描かれる。底部は粘土紐を貼付けて、輪台状にする。㉔頸部と胴部に平行沈線文を描く。㉕は胴部が強く屈曲する器形で、胴部下半に横位の沈線を描き、その間にRLの縄文を充填する。外面の調整は磨き調整である。㉖は器面に曲線的な沈線文を描く。㉗㉘は胴部に縄文を施すもので、㉗はRL、㉘はLRの縄文である。㉙は頸部と胴部の境に沈線をめぐらす。㉚は垂下条線文を斜格子状に描く。㉛～㊱は無文の土器で、器面を条痕調整するものとナデ調整するものがある。㊲は口頸部が内傾する器形を呈する。口縁部には3条の沈線をめぐらし、LRの縄文を施す。㊳～㊵は口頸部が外上方に直線的に開く器形を呈するものである。㊳は波状口縁を呈し、波頂部には円形刺突を施す。口縁部直下に1条の沈線をめぐらし、波頂部下には縦位の区画文を描き、その中に刺突文を並べる。波頂部と波頂部の間の胴部にはLRの縄文を施す。㊴は口縁端部が内傾する。器面には曲線的な沈線文を描き、縄文を施す。㊵は口縁部直下に3条の沈線をめぐらし、沈線間に縄文を施す。

㊶～㊼は縄文時代中期末葉の土器である。㊶は台形状の波頂部で、口縁部に沿って2条の太い沈線を描き、その上からLRの縄文を施す。口縁部上端は平坦面をつくり、縄文を施している。㊷も波頂部の破片である。波頂部から沈線による方形区画文が左右に描かれる。波頂部下にも沈線文がみられる。口縁部内面および区画文の外にはLRの縄文が施される。㊸㊹は円形の波頂部で、㊸は口縁部に沿って太い沈線がめぐり、その下位には竹管刺突文が描かれる。波頂部中央には焼成前の穿孔がある。口縁部上端面と沈線より上位にはLRの縄文が施される。㊹は波頂部に円形の沈線文が描かれる。口縁部上端の内外面にはLRの縄文を施す。㊺は口縁部が肥厚し、口縁部文様帯を区画するもので、ゆるやかな波状口縁を呈する。渦状の沈線文と縦位の弧状沈線文で口縁部文様帯を構成するが、渦状沈線文と弧状沈線文との間に粘土を貼付けて渦状沈線文を区画する。渦状沈線文の部分にはLRの縄文を施す。内面には垂下条線を施す。㊻も口縁部を肥厚させて口縁部文様帯を区切る。そ

こに太い沈線で曲線的な文様を描く。口縁部上端面および口縁部文様帯にはLRの無節の縄文を施す。㊼は口縁部文様帯に1条の沈線をめぐらす。口縁部上端面と口縁部にはLRの縄文を施す。

浅鉢（㊽～㊾）　㊽は丁寧に研磨された浅鉢である。口縁部は上方に拡張され、上端面に沈線をめぐらす。内面には屈曲がみられる。外面には口縁部直下に1条の沈線をめぐらし、体部には幅の狭い縄文帯を描く。㊾は口縁部が内傾する浅鉢の把手部分と考える。把手と考えられる部分の中央に径1cmの焼成前の穿孔がある。内面と把手の上面は丁寧にナデ調整をおこなう。把手下面は粗いナデ調整である。

底部（㊿）　外面をミガキ調整するもので、㉕の土器と胎土・色調等が酷似する。



第54図　374—OD出土土面

土製仮面（第54図）

頭・額の左半分、眉毛・両眼の上半部、口の下半部が出土した。鼻や顎はみつかっていない。形状は前面にむかって弯曲しており、皿を伏せた格好をしている。上下の長さ18.5cm以上、左右の幅17cm程度を測り楕円形を呈するものと考える。眼は径約1.5cmの円孔を穿って表現し、口も横4.5cm、縦2.5cm程度の長方形の孔を穿って表現している。眉毛は粘土紐を眼孔の上部に貼付けて表現する。その一部には刻み目を施す。鼻は上部のつけね部分が残存するが、眉毛からつながるように粘土を貼付けている。眉毛の両脇には径5mmの円孔があり、紐を通すための孔と考えられる。紐ずれの痕跡は観察できない。また頭部上端、眉毛と眼孔との間、ほほ、口の周囲、顎には赤色顔料を塗布している。

この遺構より出土した遺物は中期末葉に属するものと後期前半に属するものがある。遺構の項で述べたようにこの遺構は二つの遺構が重複したものと考えられるが、遺物の分布

に関しては全体にわたって中期末葉の土器と後期前半の土器が出土しており、出土遺物からも重複関係は判然としない。㊶～㊼の土器はその文様から中期末葉に属するものと考える。この遺構付近には中期末葉に属する土器が多く出土しており、周囲に群集するピット群が中期末葉に比定しうる遺構の可能性もある。この遺構から出土した中期末葉の土器も先行する遺構を削平した際に混入したことも考えられる。他の土器は後期前半に属するもので、北白川上層式土器の範疇に含まれるものである。その中で⑳は口縁部を形成する粘土紐を「8」字状に巻いて口縁突起をつくる。このような口縁部突起は北白川上層式土器の突起にはなく、粘土を「8」字状に巻く例としては、関東地方で後期初頭に位置づけられている称名寺式土器の一部に存在するようである。[6] ただ、それらには、この土器のように上から見て「8」字状になるのではなく、正面から見て「8」字状になっている。上記以外の後期の土器は北白川上層式土器であるが、細かく観察すると、新旧の土器が混在している。古いタイプの土器としては①～③⑧等があり、新しいタイプとして㊲～㊵がある。前者は口縁部の形態や文様等から北白川上層式1期に属するものであろう。後者は北白川上層2～3期にあたるものであろう。このように新旧の遺物が混在しているのは、この遺構が二つの竪穴住居址が重複しているとする理由にもなろう。この遺構の東側部分からは1期に属する土器が埋甕として使用されており、東側が1期の竪穴住居址で西側部分が2～3期に属する竪穴住居址となる可能性もある。これらの土器よりやや遡るものとして㉑の土器がある。これは福田KII式土器と併行する土器や四ツ池遺跡出土例[7]の中に散見されるものである。㉒㊽も同じ頃の土器であろう。㉕は胴部の屈曲が強く、算盤玉状の胴部を呈すると考える。九州地方の鐘ケ崎式土器に似る。[8] この他、特殊な土器として㊾の浅鉢がある。浅鉢と判断した根拠としては、内面の調整が丁寧であること、把手部分の一面が丁寧で他面が粗雑な調整であること、把手部分の丁寧に調整された面を上に向けると内側の端部が口縁部と判断しても妥当なこと、内面の曲線が平面形では径18cm程度の円形になること等があげられる。あまり類例のない器形を呈するため、所属時期は不明であるが、胎土・色調等の観察から、中期末ではなく後期前半に属するものと判断した。土器以外の遺物として、土製仮面があるが、眼孔・口孔さらに紐孔があるため、顔に被ったものと推測される。

374—OD内埋甕

口径28cm、胴部最大径30cm、現存器高25cmを測る深鉢である。推定器高33cm前後であろう。口頸部は外反し、口縁端部は肥厚せず、面取りがおこなわれている。外面調整は頸部

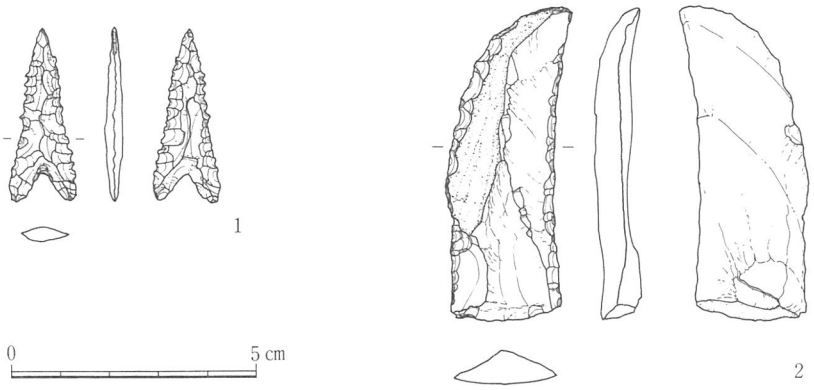
がナデ調整で、胴部は頸部より粗雑なナデ調整である。胴部には粘土紐の接合痕が観察される。底部及び胴下半は欠失している。打ち欠いて埋めたものであろう。北白川上層式Ⅰ期に属する。

第55図　374—OD 内埋甕

石器には打製石鏃や削器等がある。

第56図―1は凹基無茎式石鏃で、長大で整美なものである。側縁は鋸歯状に剝離している。先端には使用痕とみられる剝離がある。長さ35.7㎜、幅13.6㎜、厚さ3.3㎜、重さ1.2gである。

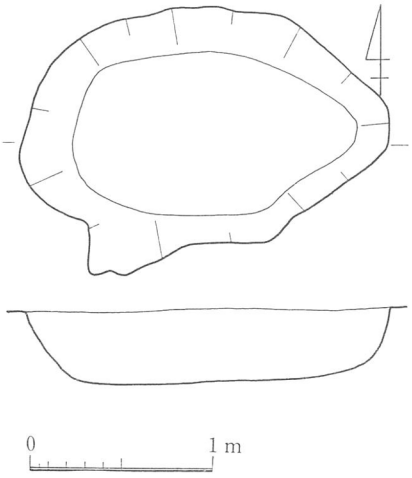
2は縦長素材剝片の両側縁に細部調整を加えた削器の一種と思われる。断面三角形を呈し、鎌状に弯曲する。凹部の大部分は薄形細部調整を施し、凹部の基部付近と凸部には厚形細部調整を施す。B面は先端近くに1個所細部調整痕があるが大部分は剝離面のままである。長さ64.7㎜、幅22.5㎜、厚さ7.9㎜、重さ14.0gである(図版57)。



第56図　374―OD出土土器

194―OO　G―20 SI・SJ区にある。平面形は不整楕円形で、長さ1.8m、幅1.3m、深さ0.4mである。埋土は暗示褐色土で上面には焼土があった。壙底には径約20cmで深さ20～30cmのピットが2個ある。

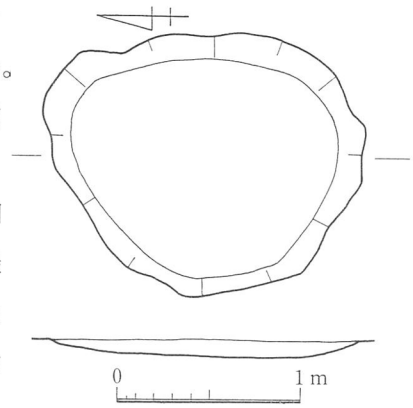
有文土器が2片、無文粗製土器が6片出土しているが、いずれも細片である。有文土器の一つは縄文を施したあと沈線を描く、他は条線文である。縄文時代後期前半の土器である。



第57図　194―OO

195—OO　G—20 OO・PO 地区にある。不整円形のきわめて浅いもので人為的な遺構でない可能性が大きい。不整円形で径1.4～1.7m、深さ0.1m である。褐色砂質土が堆積している。

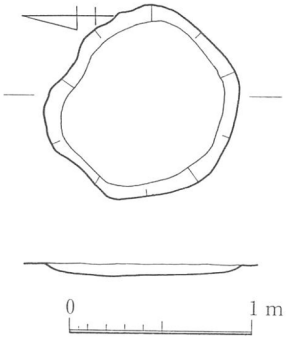
深鉢（第100図①）　外上方に開く深鉢の頸部から胴部にかけての破片である。頸部には太い沈線が、口縁部文様の集約部と思われる所から横方向に描かれ、口縁部文様帯と胴部を画する。また同じ集約部から縦方向の沈線が2条垂下し、縦方向の区画文を構成する。その区画内には連続押引き刺突文を施す。刺突文を施す原体はその先端を刻みこんでおり、刺突された部分にその刻みが残る。黄色を呈し、長石・チャートを含む。



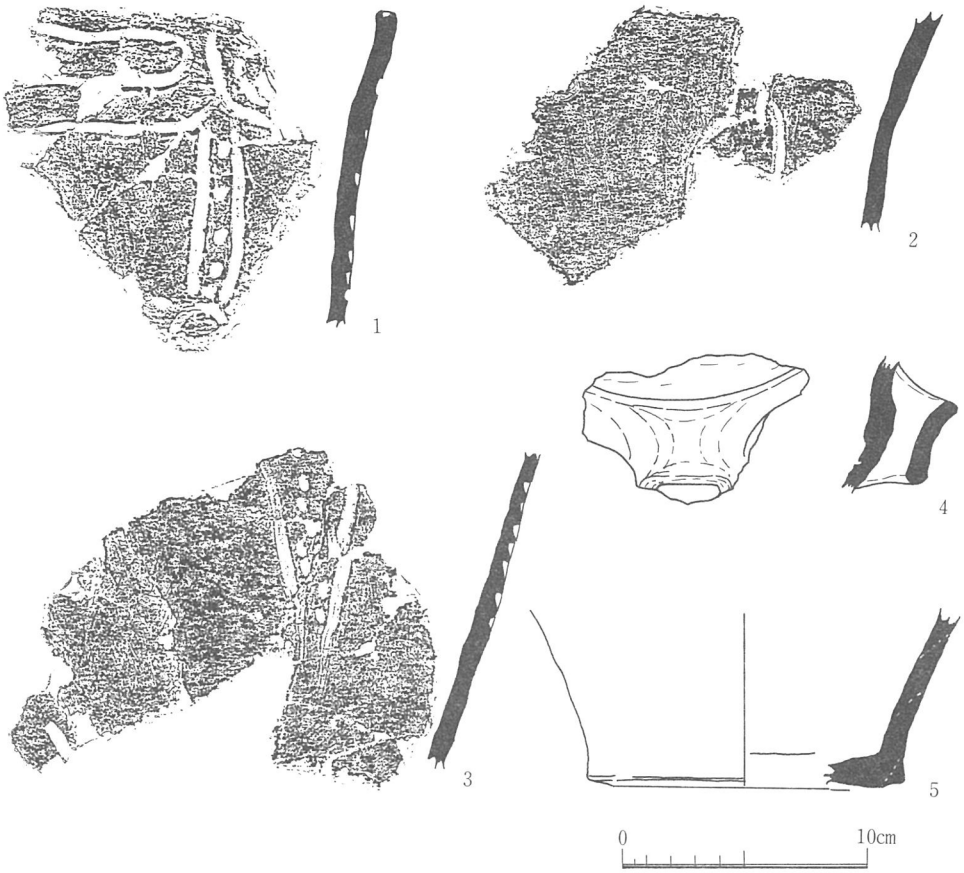
第58図　194—OO

196—OO　G—20・ON 区にある。195—OO 同様人為的遺構ではない可能性が大きい。不整円形で径1.1m、深さ0.05m である。埋土は褐色土である。

深鉢（第60図①～⑤、図版49）　①～④は同一土器の破片と考えるが接合しえなかった。水平口縁の土器で、口縁部は肥厚しない。外上方に開く器形で、胴部には小さなくびれがあるが、全体として、上部の径が大きい。①は口縁部から胴部上半の破片である。口縁部上端面には刺突を連続させる。口縁部は太い沈線で口縁部文様帯を画し、区画文帯の中には渦状の押引き沈線文と上開きの弧状沈線文が描かれる。胴部には口縁部文様が集約する部分より垂下する沈線を2条描き、縦の区画文帯を構成する。その区画内には195号遺構出土土器と同様に押引き刺突文を施す。押引き刺突の原体は195号遺構出土土器の原体と同じく、先端に刻みをつけており、刺突部分にその刻みが残る。この垂下する区画文は二段に連続すると思われ上段と下段の間には円形の沈線文を描くようである。②はその胴中央部の破片である。下段の区画内にも上段同様の刺突文が描かれる。③は下段の区画文帯であろう。④は底部破片である。底径13cm を測る。黄色を呈し、長石・チャートを含み、195号遺構出土遺物と酷似する。しかし口縁部文様帯の文様構成や原体に若干の違いがあるため同一個体ではないと判断した。⑤は破状口縁を呈する土器の口頸部の突起と考える。外反する頸部に同筒状の突起を貼付ける。



第59図　196—OO



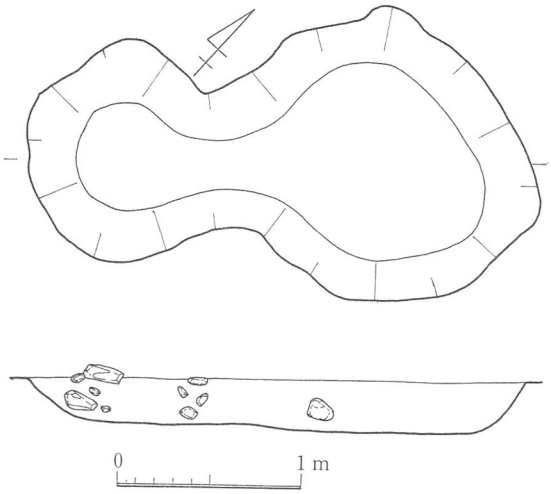
第60図　196―00 出土土器

195・196号遺構より出土した土器は、その文様から縄文時代後期初頭の中津式土器より先行する土器で、中期末葉から後期初頭のどこかに位置するものであろう。中期末葉の土器には口縁部を肥厚させたり、口縁部下端に粘土紐を貼付けたりするが、この土器にはそのような特徴はなく、口縁部上端も丸く、刺突を施すだけである。しかし口縁部文様帯は沈線による区画文があり、胴部には口縁部文様の集約する部分から垂下する区画文が描かれており、文様は中期末葉の特徴をもっている。

247―00　G―20 PJ 区にある。2個の円形の土壙が切合っているとみられるがその先後関係は明確に捉えられなかった。埋土は暗褐色土で、その礫の入り方からみて西南のものが新しい可能性が強い。西南のものは径約1.1m で深さ0.25m、東北のものが約1.5m で深さは0.3m である。

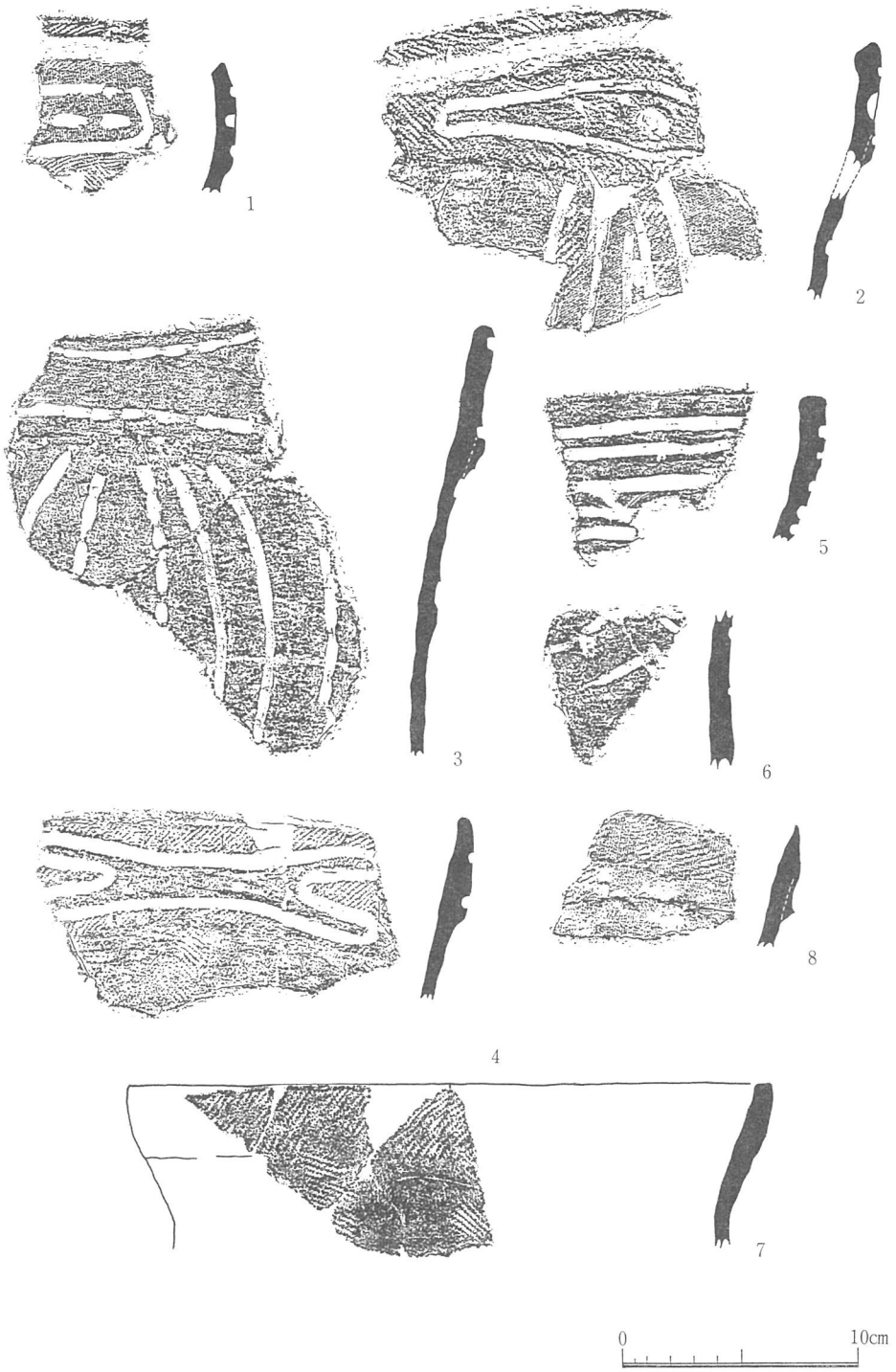
深鉢（第62・63図①～⑪、図版50）

①～④は口縁部文様帯と胴部文様帯とが段によって区別される土器である。口縁部は肥厚する。①は肥厚した口縁部に太い沈線で方形の区画文を描き、区画内には短沈線文を施す。区画と区画の間には竹管刺突文を施している。胴部には沈線と縄文を垂下させた文様帯を描いている。口縁部区画文の外側と内傾した口縁部上端にLRの縄文を施す。②はゆるやかな波状口縁を呈する土器で、口縁部下端に粘土紐を貼付けて、口縁部と胴部の間に段を付ける。口縁部には太い沈線でレンズ状の区画文を描き、その内部の波頂部直下には径1cmの指頭圧痕を配する。区画文の外側と内傾した口縁部上端面にはRLの縄文を施す。胴部は波頂部下に垂下する沈線に囲まれたRLの縄文帯を2条描き、その間に1条の沈線を描く。③は波状口縁で、口縁部下端に粘土紐を貼付け段をつくる土器で②と同様の器形を呈する。口縁部には太い細引き沈線で区画文を描く。文様は見られない。胴部の文様は弧状の垂下沈線文で、押引き手法の沈線もある。胴部の文様は波頂部下に集約するものではなく、波底部に集約させている。縄文はどこにも施さない。④は口縁部の全体が肥厚するもので、そこに両側が二つに分かれた区画文を描く。その外側にはLRの縄文を施す。口縁部上端は丸くなり、縄文は施さない。胴部には間隔をもって縦走する縄文帯を施す。⑤⑥は太い沈線で文様を描くもので、⑤は口縁部付近が胴部にくらべ肥厚する。器面には口縁部と平行した沈線を何条も描く。口縁部文様帯と胴部文様帯の区別がない。⑥は器面に屈曲した沈線を描く。後述する土器片錘と同一土器片と考える。⑦⑧は口縁部に粘土を貼付けて肥厚させたもので、口縁部にはLRの縄文を施す。⑦は口縁部上端が平坦で、そこにもLRの縄文を施すが、⑧は尖っており、縄文はない。⑦の胴部には間隔をもって、縄文を垂下させる。⑨～⑪は垂下する縄文帯を胴部に描く土器である。

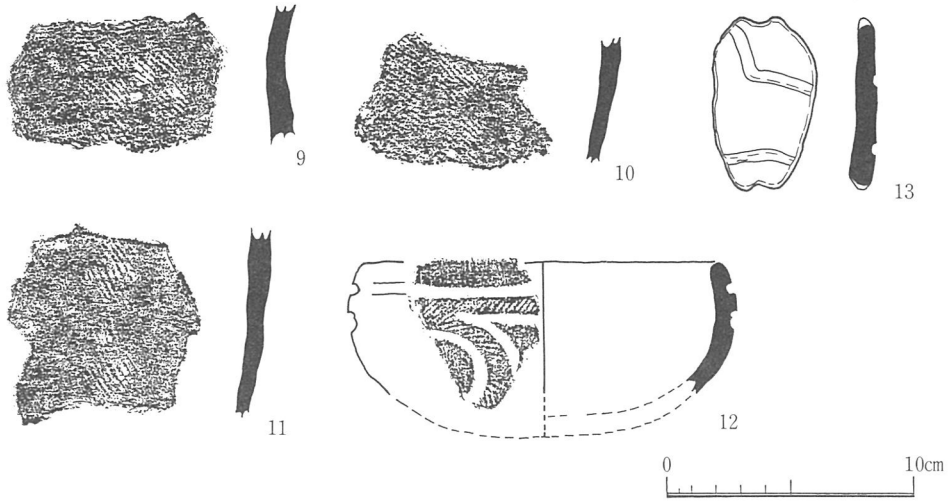


第61図　247—00

浅鉢（⑫）　口径14cm、器高約7cmの半球形を呈する浅鉢である。口縁部上端は丸くなる。外面には太い沈線と磨消縄文による文様が描かれる。縄文はLRである。



第62図　247—00 出土土器(1)

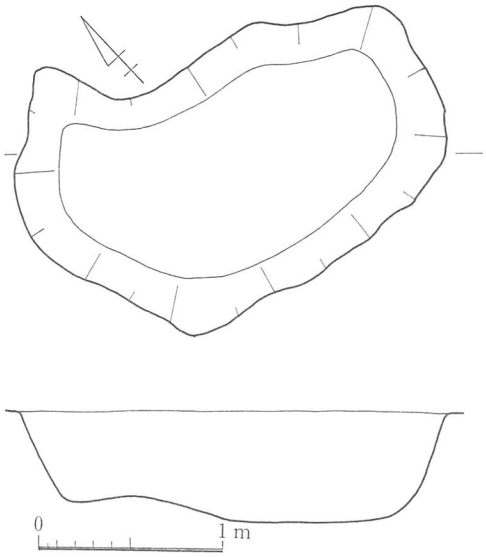


第63図　247―00 出土土器(2)

土器片錘（⑬）は長軸 7 cm、短軸 4 cmの卵形を呈する。周囲は丸く削られており、長軸方向の両端には紐かけと考える削り込みをもつ。外面には太い沈線で文様が描かれている。胎土・色調・文様等から先述した⑥の土器片と同一個体と考える。

この遺構から出土した土器は縄文時代中期末葉から後期初頭にいたるまでのものが含まれる。①～④⑦⑧は口縁部を肥厚させたり、粘土紐を貼付けるなどして段をつくり、胴部と区切っている。しかしその中でも口縁部区画文帯の文様構成に若干の違いが認められる。①は方形の区画文をもっており、区画文内にも、簡略化はされているが短沈線文が描かれる。②も間延びしてはいるが口縁部区画文をもち、①と同様に口縁部上端面に縄文を施すなど、中期的な色彩をとどめている。この土器だけが RL の縄文を施している。③は縄文を施さないが、押引き沈線による口縁部区画文や胴部の垂下沈線文など、口縁部と胴部の文様を明確に分離させている。これに類似した土器で平式[(9)]があるが、異なる点として、胴部文様帯が波底部下に集約していることがあげられる。④は口縁部文様帯と胴部文様帯の区別があり、さらに口縁部には区隔文が描かれている。このようなことから③④も中期末葉に位置付けられよう。⑦⑧も④と同じもので、口縁部に区画文がないものである。⑤は口縁部と胴部の文様帯を区別するものではないが、後期初頭の中津式土器のような磨消縄文をもつものではなく、定形化していない。⑥もこれだけの破片では中津式土器と断定するのは難しいが、⑫の浅鉢は中津式土器としか判断できない。このような器形の土器が深鉢よりも早く磨消縄文の手法を取りいれたと考えるのか、この土器が混入したものと

考えるのか、中期末とした土器を中津式併行の一群とするのかは資料の増加を待って判断すべきであろう。近年このような時期の土器も増加しており、新たな研究課題として取りくまれている。(10)



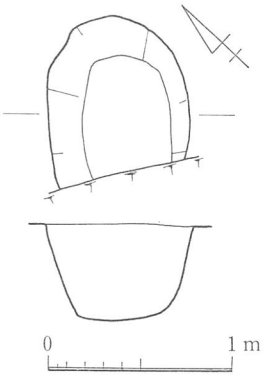
第64図　253—OO

253—OO G—20 RK・RL 地区にあり、北西隅が北へ突出するが大略楕円形を呈す。長さ2.3m、幅1.1m、深さ0.6m をはかる。埋土は暗褐色土で、土器片が若干出土した。

深鉢(第100図③)　2片出土している。一つは垂下する太い沈線と RL の無節縄文で文様を構成する。縄文の上を軽くナデ調整しているため縄文が判読しにくい。他は粗製土器である。縄文時代後期前半の所産であろう。

259—OO　G—20 QI 区にある。西南の一部は排水管のため調査できなかったが、楕円形を呈する。長さ約1.1m とみられる。幅0.6m、深さ0.5m である。黒褐色土が堆積し小礫を含んでいた。

土器は粗製土器の細片が3片出土している。いずれもナデ調整である。後期前半の土器である。



第65図　259—OO

土製品として土製仮面が出土した（第100図②)。一部に端部をもつ破片で、それで判断すれば、全体の形状は円形を呈すると考える。端部に近い所に焼成前の穿孔がある。破片は弯曲し、突出する面の調整は他面にくらべ丁寧である。円孔部は突出した面が小さく、他面の方が広く穿たれている。このような点から、374—OD 出土の土面と同様の形態をもつ土面の顎部分の破片と判断した。胎土内に大粒の長石粒を含む。焼成はよい。

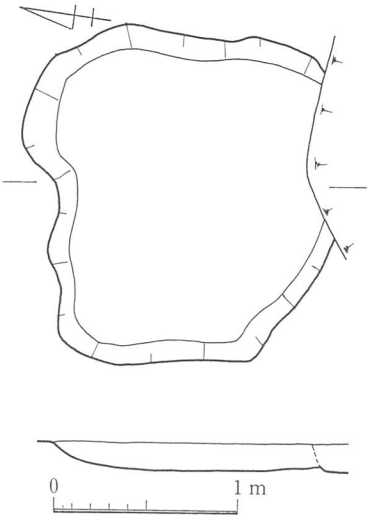
353—OO　G20 UD 区にある。中央微高地西縁部であり、354—OO に切られている。不整方形の浅いもので、径1.6～1.8m、深さ0.15m である。暗褐色土が堆積し拳大～人頭大の礫を多く含む。

土器は図示していないが深鉢等数片がある。ひとつは太い沈線が同心円状に描かれ、そ

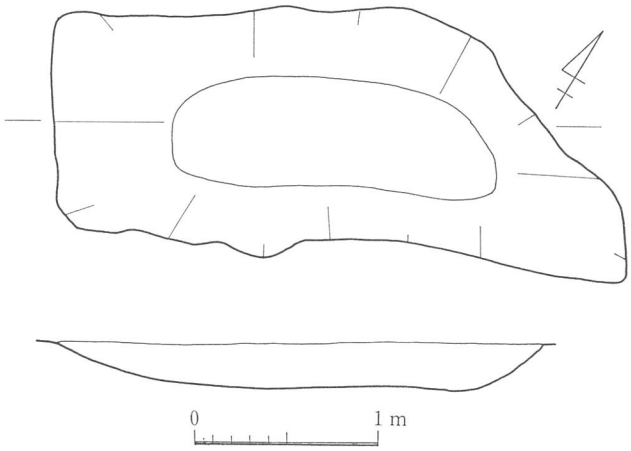
こに縄文を施すものである。もう1点も太い沈線と縄文で文様帯を構成する。いずれも縄文はLRである。この他に小破片であるが、沈線が描かれているものと、無文の土器がある。縄文後期初頭に比定できよう。

373—OO　G—20 SC区にある。中央微高地と西微高地の間の低地——西低地——の中央にある。平面形は五角形で、長さ3.1m、幅1.2m、深さ0.25mである。埋土は東3分の2が暗褐色土、西3分の1が褐色砂礫土でともに拳大～人頭大の礫を含む。礫は西端に近づくにつれて多くなる傾向がある。

土器（第100図④）は太い沈線で文様を描き、沈線間にRLの縄文を充填する。縄文時代後期初頭の中津式土器であろう。内面は丁寧にナデ調整をおこなう。他にもう一点粗製土器が出土している。



第66図　353—OO



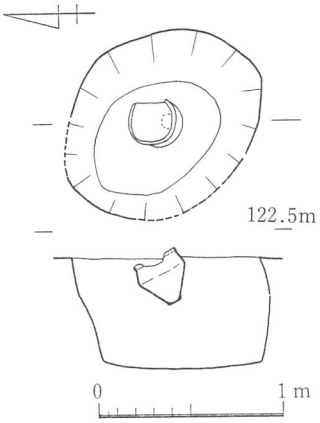
第67図　373—OO

375—OU　G—20—RG区にある。長さ1.2m、幅0.95m、深さ0.6mの楕円形土壙の中央上部に深鉢形土器を埋置している。土器はほぼ正立に近いが、約15°の角度で北に傾いている。土器のまわりを石などで囲った形跡はない。埋土は上から下まで黒褐色土で、分層は

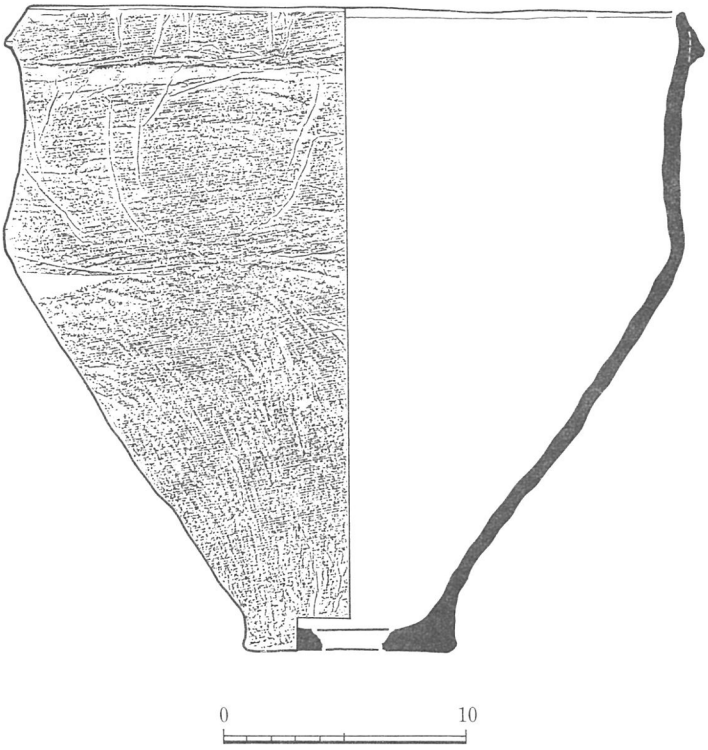
できなかった。

土器（第69～70図、図版51・52）

深鉢①～⑮　①は土器棺として使われていた土器で、口縁部は外側に粘土を貼付けて、肥厚させる。頸部はほぼ直立し、胴部につづく。胴部外面は左上方へ巻貝条痕調整をおこない、頸部と胴部の屈曲部は横方向の条痕調整、頸部は横方向の条痕調整のあとナデ調整を施す。底部には焼成後に穿った径2.5cmの円孔がある。②は口縁部が内側に肥厚する深鉢で、上端はやや平坦になる。器面には太い沈線による文様が描かれている。③は口縁部が外側に肥厚し、そこにLRの縄文を施す土器である。④・⑤は頸部が無文で胴部に縄文を施すもので、④はLR、⑤はRLの縄文である。⑥は口縁部上端が平坦になる粗製土器で、口縁部上端面・外面は二枚貝条痕調整である。⑦は口縁部が内側にやや肥厚した土器で、外面は巻貝条痕調整をおこなう。浅鉢状の器形になるかもしれない。⑧～⑭は口縁部の破片である。⑧は内弯する口縁部にLRの縄文



第68図　375—OU



第69図　375—OU 棺用深鉢

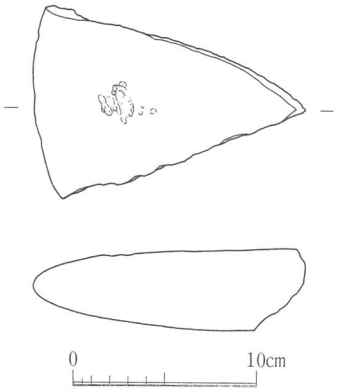
第70図　375—00 出土土器

を施し、縄文帯直下は屈曲し、そこに竹管状工具による円形刺突文を並べる。⑨～⑫は太い沈線と充填縄文による文様構成をもつ。⑩は口縁部上端面にも縄文を施す。いずれも LR の縄文である。⑬・⑭は上端部を欠失する。⑬は口縁部下端を肥厚させ、口縁部文様帯を区画する。口縁部には太い沈線と LR の縄文を施す。⑭は口縁部を外側に肥厚させ、そこに

縄文を施す土器である。縄文はLRの縄文である。縁帯文土器の口縁部ではなく、後期初頭の有文粗製土器の口縁部の可能性もある。⑮⑯は太い沈線と縄文による文様を描くもので、⑮は垂下する縄文帯を構成し、⑯は曲線的な文様をもつ。

浅鉢（⑰）　⑰は沈線で三角や四角等の幾何学的な文様を描き、縄文を充填するもので無文部及び内面は丁寧にナデ調整をおこなっている。

この遺構より出土した土器は縄文時代中期末葉のものから後期前葉のものまで含まれている。中期末葉の土器は口縁部下端に段をもって胴部と区切るもの⑧⑬や胴部に垂下する区画縄文帯をもつもの⑮がやや古くなるものであろう。これらより新しいタイプとして⑨がある。太い沈線と磨消縄文で器面を飾るが、沈線文の構成や縄文の充填個所が中津式土器とは異なっている。中期末葉に遡るものかもしれない。⑩も中津式土器の中でも古いタイプになるかもしれない。以上の中期末から後期初頭にかけての土器は埋土内に混入したもので、土器棺とした①がこの遺構の時期を示すものであろう。口縁部が断面三角形に肥厚しており、北白川上層式Ⅰ期もしくはⅡ期に比定できよう。

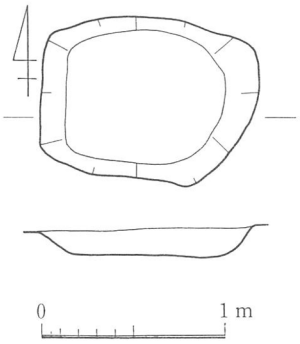


第71図　375—00 出土石皿

石皿の破片が出土している（第71図）。片面には敲打痕が集中する部分がある。扁平なもので、もとは円形を呈していたとすれば、径約30cm前後に復原できる。

377—00　G—20 QF・RF区にある。第3トレンチにより中央部をとばしたが大略原形を推定できる。長さ1.2m、幅0.9mの楕円形を呈し深さは0.15mである。暗赤褐色土が堆積していた。

底部付近の破片である。文様はみられない。縄文時代後期前半の土器と考える。



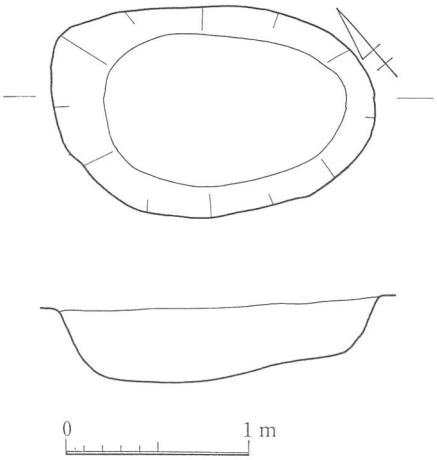
第72図　377—00

378—00　G—20 RG区にある。平面形は楕円形で、長さ1.75m、幅1.2m、深さ0.4mである。埋土は黒褐色土である。

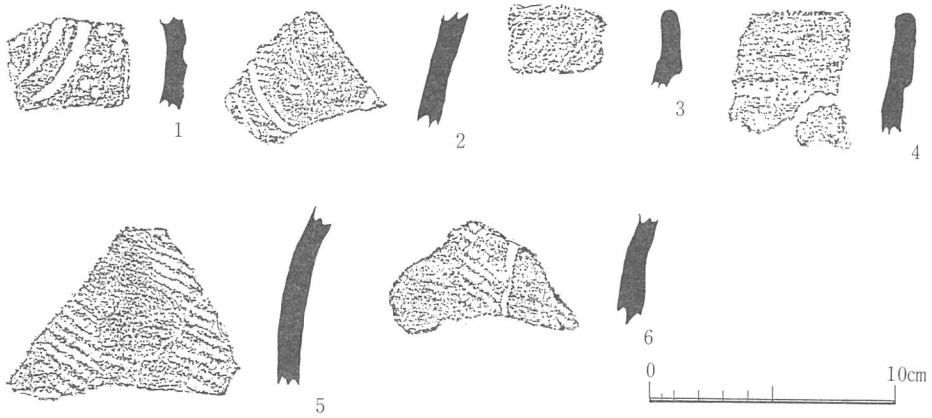
深鉢（第74図①～⑥、図版52）　①は太い二条の平行する沈線文と竹管状の工具による刺突文を描く。②は二条の平行する沈線文を描き、そのあとLRの縄文を施す。③④は

口縁部に粘土を貼付け、肥厚させるもので、③には肥厚した口縁部にLRの縄文を施す。⑤・⑥は胴部に幅の狭い縄文帯を垂下させる土器である。この他図示しなかったものとして太い沈線文の土器、⑤・⑥と同一土器と考えるもの、無文土器が出土している。

①②は多重化した沈線文と縄文や刺突文で文様を構成しており、縄文時代中期末葉に比定できる。③④は口縁部を段状に肥厚させ、口縁部と胴部を区別させている。⑤⑥は胴部に幅の狭い縄文帯を垂下させるもので、中期末葉から後期初頭にみられる有文精製土器である。これらのことから以上の土器は中期末葉に比定できるものと考える。



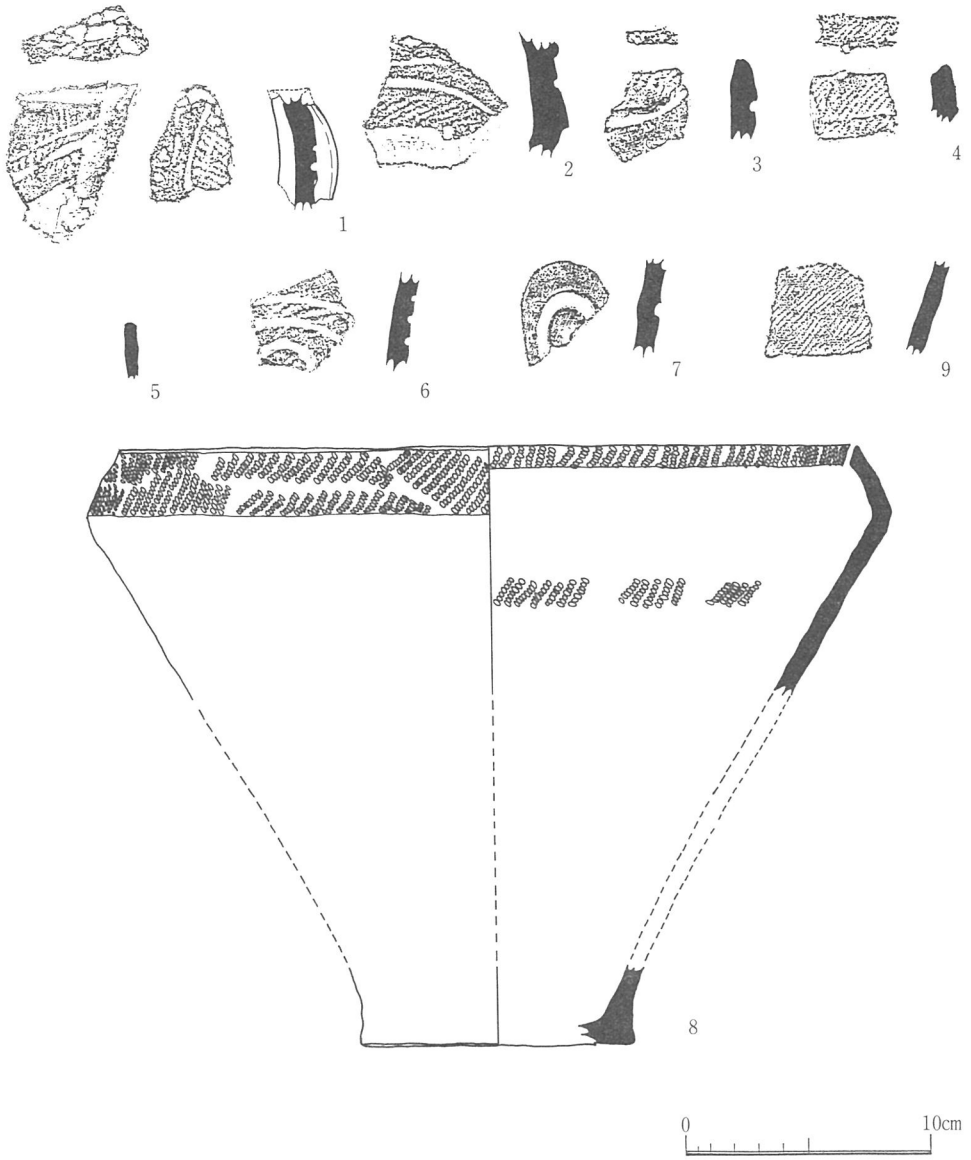
第73図　378—OO



第74図　378—OO 出土土器

379—OO　G—20 RH区にある。374—OD及び375—OUに切られているため全形はよくわからない。径1.8m前後の不整形土壙である。

深鉢（第75図①～⑦、図版53）　①は波状口縁の箱状の突起部である。上端や側面は粘土を貼付けて拡張し、そこに太い沈線とLRの縄文を施す。外面にも沈線と縄文による文様を描く。②は口縁部下端に屈曲をつくり、口縁部文様帯を区切る。口縁部には太い沈線とLRの縄文で文様を描く。上端部に近い所に粘土を貼付け、そこに刺突を施す。③は口縁部が肥厚せず、口縁部付近に太い沈線を描き、沈線と口縁端部間にLRの縄文を施す。また口縁部上端



第75図　379—00 出土土器

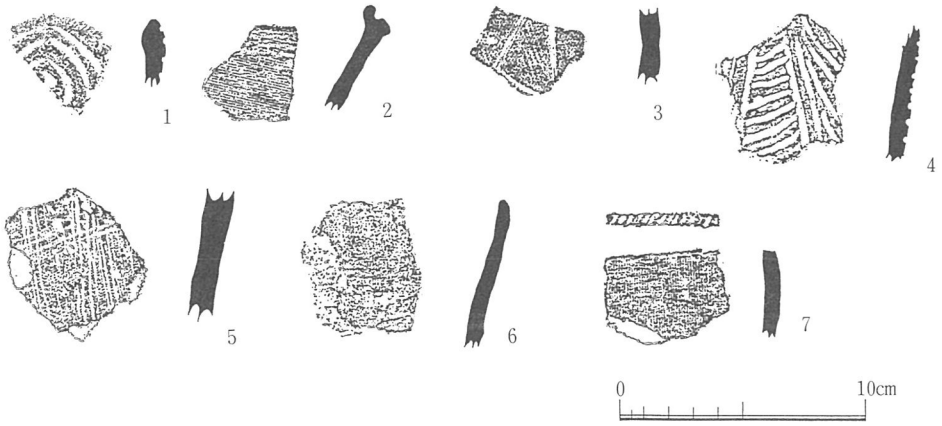
にも LR の縄文を施す。④は口縁部下端で屈曲するもので、口縁端部は内側に面取りがあり、そこに LR の縄文を施す。口縁部と屈曲のすぐ下にも LR の縄文が施される。⑤は器壁が薄く、口径も小さな土器である。口縁部は直立し、上端面と口縁部外面に LR の縄文を施す。⑥⑦は太い沈線を曲線的に描くもので、⑥には LR の縄文を施し、⑦は縄文がない。

浅鉢⑧⑨　⑧は口径30cm、器高24cm前後に復原しうる土器で、口縁部は内側に屈曲し、胴部は底部にむかって直線的にすぼまる器形を呈する。底部は径11cmを測り、平底を呈する。口縁部は内側を面取りし、そこにLRの縄文を施す。口縁部もLRの縄文を施し、口縁部文様帯をつくる。内面の一部にはLRの縄文を横方向に施す。⑨も内面を丁寧に磨き調整しているため浅鉢と判断した。外面にはLRの無節の縄文を施している。

この遺構からは図示したもの以外にも土器が出土している。①～④は口縁部と胴部の境に区画をもち、それぞれを区切るものである。①は箱状の口縁突起や②の口縁部直下の屈曲等は縄文時代中期末葉にみられる特徴である。③～⑤の口縁部破片も口縁部上端に縄文を施していることから同じく中期末葉に位置するものであろう。⑥⑦は胴部の渦状文様であるが、⑥のように先に縄文を施したのちに太い沈線文を描いたり、⑦のような渦状文様は後期の中にはなく、中期末葉に比定できると考える。⑧の浅鉢は口縁部を強く屈曲させることで胴部を区切ったり、文様を口縁部にのみ描くことで口縁部文様帯として意識しており、中期末葉に比定しうる。⑨はこれだけでは所属時期は限定できない。

380—OO　G—20 RH・RI区にある。長さ1.5m、幅1.2mの楕円形を呈し、深さ0.8mである。埋土は黒褐色土であった。

深鉢（第76図①～⑦、図版54）　①は波状を呈する口縁部の波頂部で、同心円状の沈線文を描く。②は口縁部外側に粘土を貼付け、肥厚させる。口縁部上端は拡張し、平坦面をもつ。そこに太い沈線を描く。③は沈線間に縄文を充填するものである。④は先に縄文を施して、沈線文を描くものである。⑤は条線文である。⑥⑦は粗製土器の口縁部で、口縁部は肥厚しない。

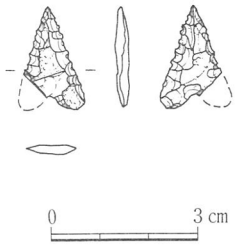


第76図　380—OO出土土器

⑦の口縁部上端には斜め刻みが施される。

これらの土器は縄文時代後期前半の北白川上層式土器の１期もしくは２期に相当するものであろう。

石鏃が１本出土している。凹基無茎式石鏃である。比較的長大で、わたくりも大きい部類に属する。長さ26.1㎜、幅15.1㎜、厚さ3.5㎜、重さ1.2g である。



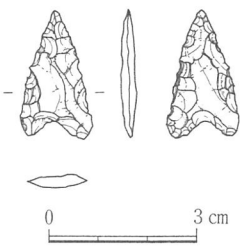
第77図　380―OO 出土石鏃

382―OO　G―20 RH 区にある。380―OO の東に隣接する。径0.7 m 前後の不整円形で深さ0.4m である。埋土は黒褐色土である。

深鉢（第78図①～③、図版54）　①は口縁部下に突帯を貼付け、口縁部文様帯を区画するもので、口縁部上端からその突帯にかけて粘土紐を貼付けている。口縁部上端面、突帯上に無節の LR の縄文を施す。②は太い沈線と縄文によって文様を描く。頸部には「Ｊ」字状の縄文帯の一部がのこる。頸部下端に胴部と区切る沈線を描き胴部も太い沈線と充塡縄文によって文様を構成する。③は粗製土器の口縁部で、端部は丸くする。器面には横方向の条線文を描く。

これらの土器は縄文時代中期末葉から後期前半に含まれる土器であろう。①は突帯によって口縁部を区画しており、中期末葉の文様をもつ。②は中津式土器と考えるが、どのような文様を構成させるか判断しがたい。中津式土器でも古いタイプかもしれない。③は後期前半の粗製土器である。

第78図　382―OO 出土土器



第79図　382―OO 出土石鏃

石鏃が１点出土した。やや小形の凹基無茎式石鏃である。両側縁は鋸歯状に剝離している。長さ21.1㎜、幅12.1㎜、厚さ2.5㎜、重さ0.5g である。Ｂ面には自然面を残す。

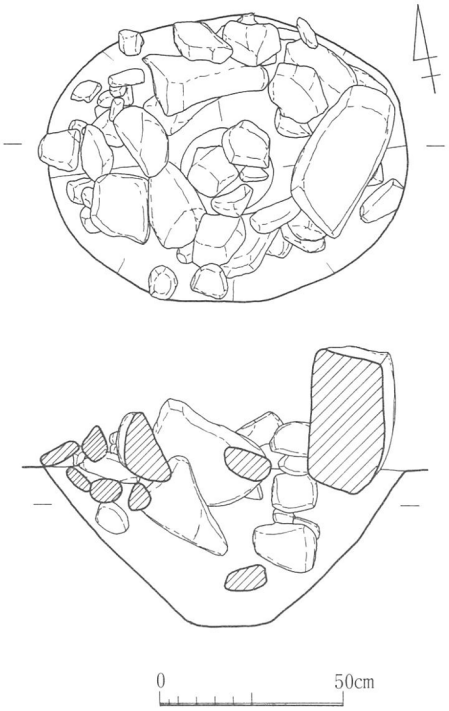
382—OO　G—20 RH・SH 区にある。配石をもつ土壙である。土壙は楕円形を呈し、長さ0.98m、幅0.76m、深さ0.43m で断面スリバチ状である。上面の東端に立石があり、その前面に平らな石で囲みをつくり、拳大の礫で裏込めしている。

387—OO　G—20 RH 区にある。長さ0.7m、幅0.5m 程度の楕円形土壙である。調査の結果 2 個の土壙の切合いであることが判明した。図示した土器は切られた方(387—B）から出土したものである。

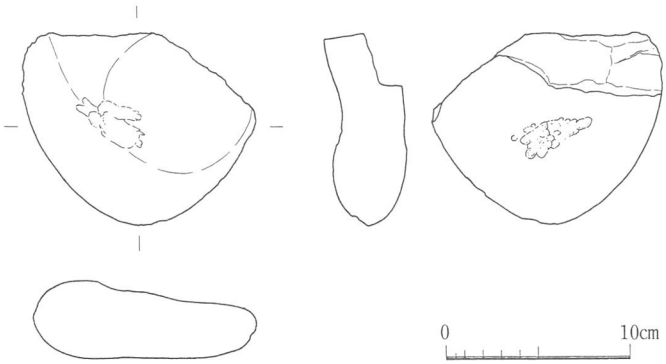
土器（第100図⑤）　口縁部が内傾し、上端部は内側に面取りをおこなう。太い沈線で文様を描き、沈線間に LR の縄文を施す。口縁部上端面にも縄文を施す。

縄文時代中期末葉の土器であろう。

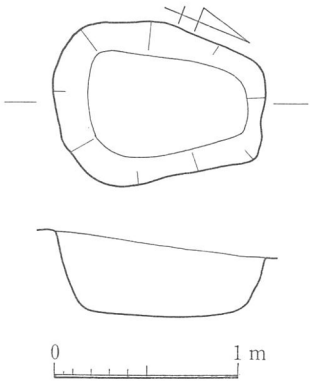
石器は砂岩の扁平な円礫を使用した石皿で、半分ほど欠失している。A 面は研磨により凹む。両面とも敲打痕を残す。



第80図　382—OO



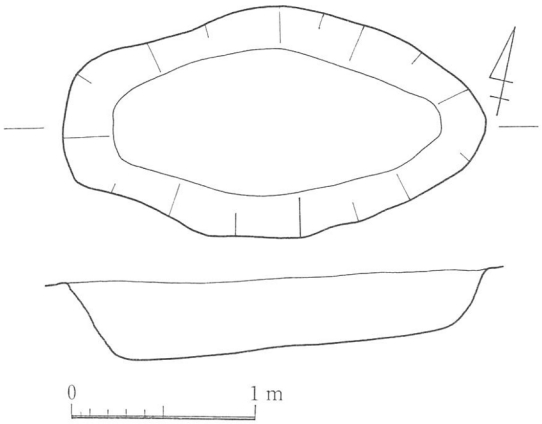
第81図　387—OO 出土石皿



第82図　389—OO

389—OO　G—20 RF 区にある。平面形は隅丸台形を呈す。長さ1.15m、幅0.9m、深さ0.4m で埋土は黒褐色土である。

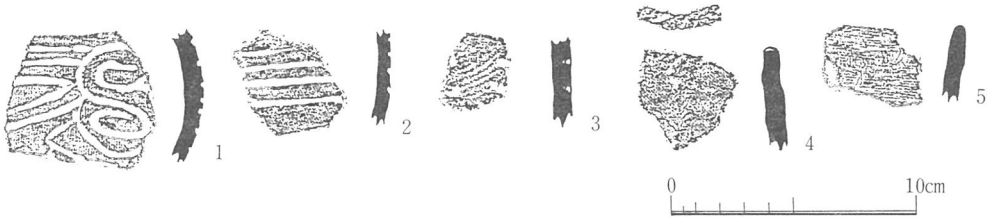
土器細片が 5 片出土している。胎土・調整等から縄文後期前半のものと考える。



第83図　391—00

391—00　G—20 SF区にある。長楕円形を呈する。長さ2.3m、幅1.3m、深さ0.5mの大きな土壙である。埋土は黒褐色土であった。

深鉢（第84図①～⑤、図版56）　①②は同一土器の破片と考える。胴部最大径付近に「S字」字状の沈線文を描き、そこから横方向へ沈線文を描く。③は横方向にLRの縄文を施し、その上に横方向の沈線を2条描く。沈線の端部は刺突



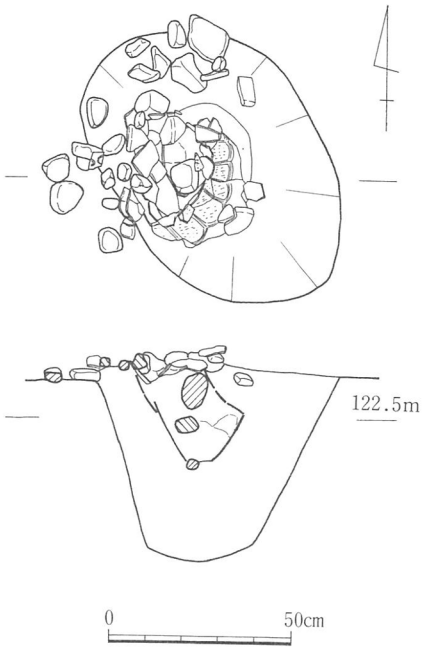
第84図　391—00 出土土器

をいれる。④⑤は粗製土器の口縁部で、④は口縁部上端に無節のLRの縄文を施す。また器面にも、口縁部上端から縦方向の無節のLR縄文を施す。

この遺構より出土した土器はいずれも細片であり、時期を決定することは困難であるが、①にみられる「S」字状の沈線文や⑤の口縁形態から縄文時代後期前半の北白川上層式土器の範疇に含まれるであろう。また③にみられるような沈線の末端刺突文が存在することから、北白川上層式土器でも新しい時期のものであろう。

393—OU　中央微高地上G—20—SH区に検出された。平面形は長径85cm、短径60cmの楕円形を呈し、深さが55cmの土壙である。この中に縄文時代中期末葉の深鉢が埋っていた。土壙の埋土は大きく二層に分けられ、上層が黒褐色中粒砂混粘質シルトで、下層が粗粒砂～小礫を多く含む砂質シルトである。下層からは縄文時代中期末葉の土器が2片出土したが、上層の深鉢とは別個体である。上層には底部を欠いた深鉢が、口縁部を上方に向け、やや傾いた状況で検出された。この深鉢の上には拳大の円礫が散在していた。この深鉢の

口縁部付近に別個体の土器の底部片が出土している。深鉢内にも拳大の円礫が2個検出されている。このような状況から判断して、この遺構は土器棺と推定される。土壙内にまず土を入れ、土器の高さと同じくらいに浅くして、土器を置く。そのあと土器の上に円礫や他の土器片を置いたものと考える。

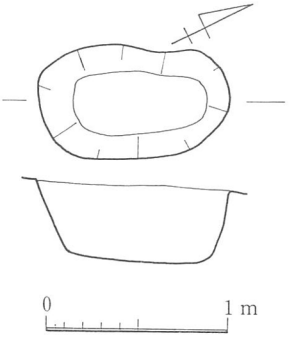


第85図　393—OU

土器棺に使用された深鉢は縄文時代中期末葉の土器で、水平口縁を呈し、口縁部には長方形の区画文・胴部は縦方向の文様が描かれており、口縁部と胴部の文様帯が突帯状の段によって区別されている。口縁部文様帯は突帯で区切り、その間に沈線による長方形の区画文を描き、区画内には矢羽状の短沈線を描く。口縁部上端面および、区画文の外にはLRの縄文を施している。胴部文様は口縁部文様帯直下より多条の垂下沈線文を間隔をあけて描く。その沈線文帯は下端で開いて、両脇の沈線文帯とつながり、区画をつくる。その区画内にLRの縄文を縦位に施している。北白川C式のII期もしくはIII期に属する土器であろう[11]。保存状況が悪く、土器がもろくなっていたせいか、細片になってしまい、接合しえなかった。そのため図化できず、文章による記述となってしまった(巻頭図版3)。

401—OO　G—20 TG区にある。楕円形を呈し、長さ1.05m、幅0.6m、深さ0.4mである。埋土は暗赤褐色土である。

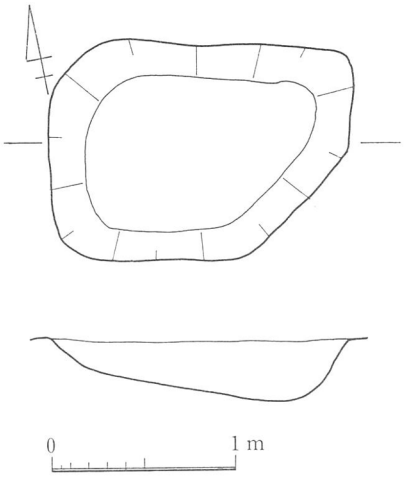
土器(第100図⑥)　やや肥厚した口縁部外面に縄文を施す。縄文は無節のLRの縄文である。頸部の外反はつよい。縄文時代後期前半の北白川上層式に属する。



第86図　401—OO

402—OO　G—20 SG区にある。隅丸長方形の一角が切られて五角形を呈する。長さ1.6m、幅1.2m、深さ0.4mである。埋土は暗赤褐色土である。

深鉢(第88図①～③)　①は口頸部が大きく開く土器で、口縁部は肥厚せず、上端面にLRの縄文を施す。②は口縁部内側に粘土を貼付けて肥厚させる。③はあまり肥厚しない。

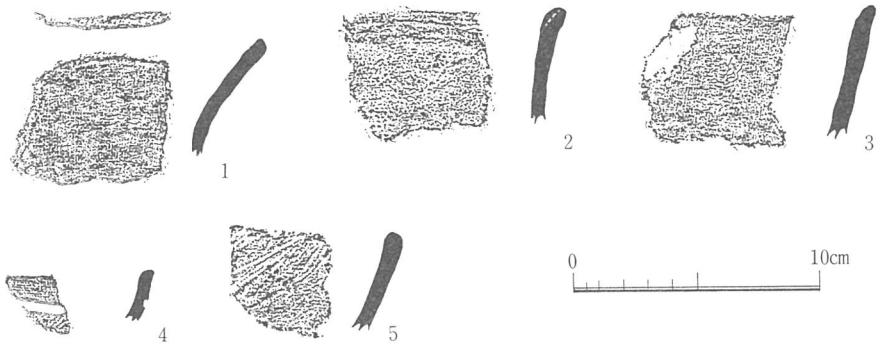


第87図　402—OO

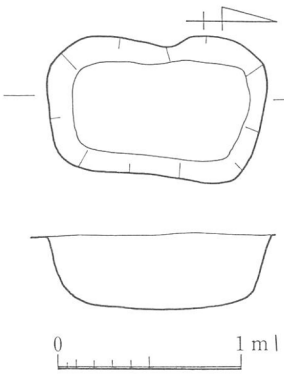
浅鉢（第88図④⑤図版54）　④は器壁の薄い土器で器面の調整は丁寧である。口縁部下に一条の沈線をめぐらし、その下に細かなLRの縄文を施す。⑤は内外面をミガキ調整する土器である。

これらの土器は縄文時代後期前半の北白川上層式土器の範疇に含まれるが、④の土器の文様構成からやや新しいものと考える。

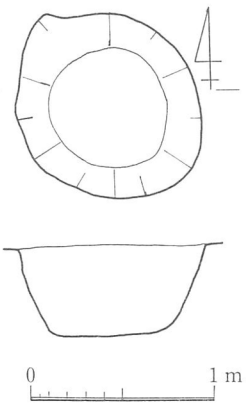
403—OO　G—20 SG区にある。隅丸長方形を呈し、長さ1.2m、幅0.7m、深さ0.4mである。埋土は暗赤褐色土である。



第88図　402—OO 出土土器



第89図　407—OO



第90図　405—OO

土器（第100図⑦）は胴部に横に広がる文様を描く。LRの縄文を施したのち沈線を描く。角セン石を含み、色調は褐色を呈し、生駒西麓の粘土と考える。この土器の他に粗製土器の細片が出土している。ナデ調整をおこなう。

縄文時代後期前半に属する土器である。

405—OO　G—20 TG・UG区にある。ほぼ円形を呈し、径1m、深さ0.65mである。黒褐色土が堆積している。

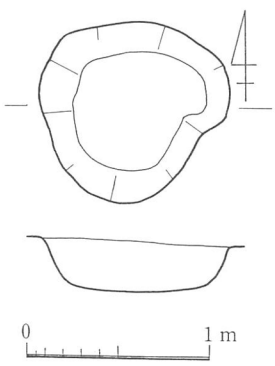
第91図　405—00 出土土器

深鉢（第91図①～⑩１、図版55）　①～⑨は口縁部文様帯と胴部文様帯が区別される土器である。①は波状口縁を呈し、口縁部と胴部の境には粘土紐を貼付け、段状にする。波頂部は粘土紐を貼付けて区画をつくり、その内部には下に開く弧状沈線を重ねて描く。この文様の左右には対称的に、多重化した区画文を描く。これらの文様を描いたのち LR の縄文を施す。胴部には垂下する幅の狭い縄文帯がある。口縁部上面にも縄文を施す。②は口縁端部から弧状の

沈線が垂下する文様をもつ。区画文が退化したものであろう。口縁部は肥厚せず、上端面には縄文を施す。沈線文の上からLRの縄文を施す。③は口縁部と胴部の境界が明瞭ではないが、口縁部はLRの縄文を横走させ、胴部は縦走させて区別する。口縁部上端は内側に屈曲し、上端面にも縄文を施す。口縁部に一条の沈線が描かれているが、区画文の名残りであろう。④⑤は口縁部に横走するLRの縄文帯をもち、胴部には縦走する縄文帯をもつ。いずれも口縁部上端面に縄文を施す。④の口縁部は下端に粘土を貼付けて胴部を画する。縄文帯の幅は広い。⑤は口縁部を内側に屈曲させる。縄文帯の幅は狭い。⑥は①の胴部破片と考える。縦走する縄文帯が三条みられる。⑦は口縁部下端に粘土を貼付け、段をつくり、胴部と区切る。口縁部文様帯は区画文の中に縄文を施すものであろう。胴部は縦位の縄文帯がある。⑧は上に開く弧状沈線を重ねるものである。沈線文を描いたあとLRの縄文を施す。⑨は同心円状の沈線文を描いている。⑩は波状口縁の波頂部で、口縁部上端を内側に折り曲げて、環状の突起をつくっている。外面は丁寧にナデ調整をおこなう。

この遺構から出土した土器は文様構成から判断して縄文時代中期末葉に比定できるものであろう。この中で⑧は星田式土器[12]に類似する。①～⑥は口縁部と胴部の文様帯が区別され、口縁部上端に縄文を施すなど中期的要素をもっているが、口縁部文様帯の区画文はかなり退化しており、胴部文様帯も後期の有文粗製土器に共通する文様である。この遺構出土土器の中でやや異なったものとして⑩がある。中期の口縁部突起というより後期のそれに近似する。これだけの破片で中津式土器とは決めがたいが、後期に属するものではないだろうか。247号遺構でも同様の状況であり、中津式が成立する前段階の土器群として把握できよう。

406—OO　G—20 UF区にある。径1mの不整形で、深さ0.3mである。暗赤褐色土が堆積している。

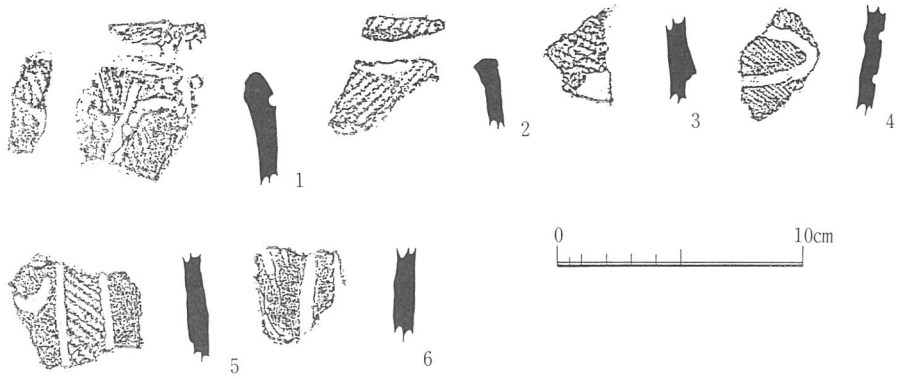


第92図　406—OO

土器（第100図⑧）は太い沈線と沈線間に縄文を充填する文様をもつ土器である。縄文時代後期初頭の中津式土器である。

407—OO　G—20 UG区にある。トレンチ南端に掘削した側溝により南半をとばしてしまった。円形を呈し、径1m、深さ0.5mである。埋土は暗赤褐色土であった。

深鉢（第94図①～⑥、図版54）　①は台形を呈する波頂部をもつ。頂部の両端がやや突出する。上端面にはLRの縄文を施す。器面には口縁上端から太い沈線が短かく描かれ、中央には押し引き沈線文で区



第94図　407―00 出土土器

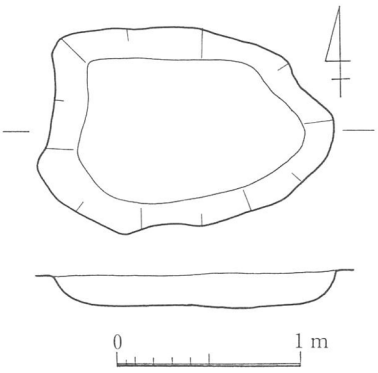
画し、その中に LR の縄文を施す。②は口縁部に縄文帯をもつもので、上端面は拡張し、LR の縄文を施す。③は口縁部文様帯の下端に粘土を貼付けて肥厚させるものである。④は LR の無節の縄文を全面に施したのち、太い沈線で曲線文を描く。どのような文様を構成するか不明である。⑤⑥は胴部破片で、垂下する太い沈線文と LR の縄文を縦に施すものである。⑤には無文部に弧状の短沈線が描かれる。これらの他に平底を呈する底部が出土している。

これらの土器はいずれも縄文時代中期末に比定できる。①の口縁突起は箱状ではなく、平担で、両脇がやや肥厚する程度である。④は、沈線が太く浅く、縄文も磨消縄文ではないことから中津式土器よりは先行する土器であろう。⑤⑥の胴部文様も縦区画の中に縄文を施すなど、中期末葉の特徴をもっている。

409―00　G―20 UH 区にある。南側溝により大半を切られているが、長さ2m 以上の大きな土壙である。

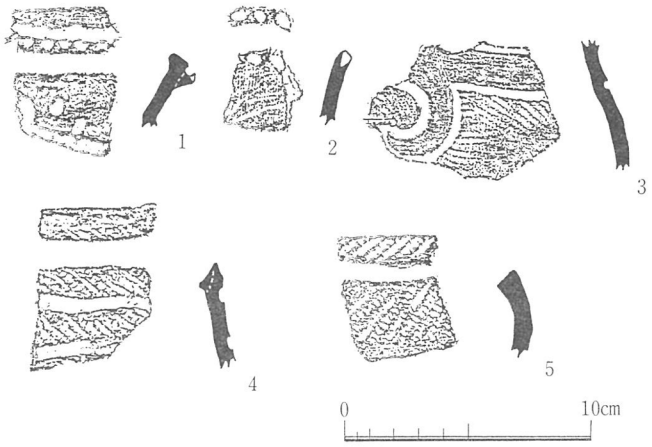
図示しえた土器（第100図９）は１片だけであるが、他に粗製土器片が出土している。図示したのは太い沈線文と充填縄文を施すもので、縄文時代後期初頭の中津式土器である。

414―00　G―20 TI・TJ 区にある。不整楕円形を呈し長さ1.5m、幅1.1m、深さ0.2m である。埋土は暗赤褐色土である。



第93図　407―00

深鉢（第95図①～⑤、図版55）　②は口縁部上端の



第95図　414—OO 出土土器

外側に粘土を貼付けて、口縁部を拡張させる。上端面には一条の沈線をめぐらし、その外側を刻む。②は肥厚しない口縁部であるが、上端面に刺突文を連続させる。③は胴部破片で、頸部と胴部を区切るように沈線をめぐらす。胴部には「J」字状の沈線文を描く。そのあとLRの縄文を施すが、縄文の施文部は「J」字状の沈線の外側であり、中津式土器にみられる磨消縄文帯とは逆の施文である。④⑤は口縁部上端面に縄文を施すものである。

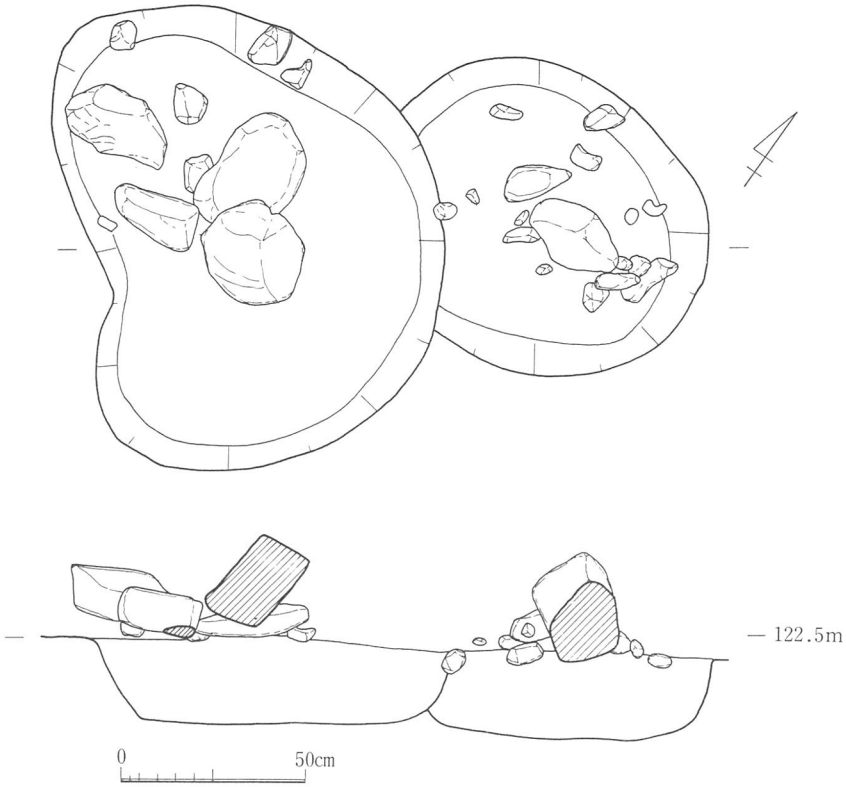
①～③の土器は口縁部や文様等から縄文時代後期前半に比定できるが、①の口縁部は四ツ池遺跡出土の四ツ池型土器[13]に共通した特徴をもっている。また①②は87号遺構出土土器に類似しており、同時期のものと考える。③は縄文の施文手法が中津式土器と異なっており、①②と同時期の土器と考えられる。④⑤は縄文時代中期末葉に属する土器であろう。

416—OO　G—20 SJ区にある。418—OOを切っている。東南部が広がっているが本来は平面楕円形であったと思われる。長さ1.3m、幅0.9m、深さ0.25mで、埋土は黒褐色土である。上面に配石をもつ。中央の長さ約30cmの石は正立に近く、その西に数個の同程度の大きさの石を敷いたような状態であり、正立した石の東側には石が残存していない。

418—OO　G—20 SJ区にある。416—OOに切られている。長さ0.95m、幅0.8mの楕円形で深さ0.25mである。埋土は黒褐色土である。上面に配石を持つ。中央に約30cmの石が正立し、そのまわりに拳大の礫をならべている。

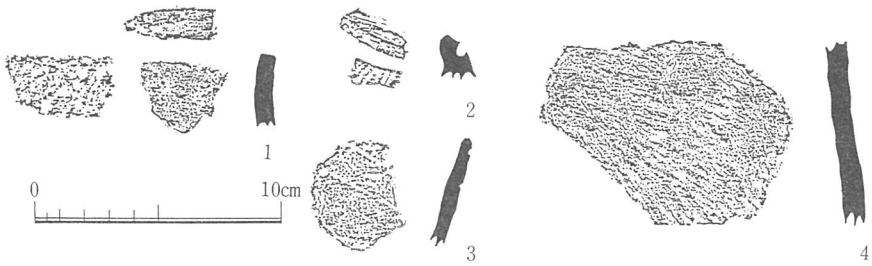
419—OO　G—20 SJ区にある。径0.3m程度の小さなピットで深さ約0.3mである。埋土は黒褐色土である。

土器は有文深鉢片が1片出土している(第100図10)。太い沈線を曲線的に描き、沈縄間に縄文を充填する。縄文時代後期初頭の中津式土器である。



第96図　416・418—00

453—00　G—20 PH 区にある。北半は北側溝に切られている。径0.8m 程度の円形で深さ約0.3m である。

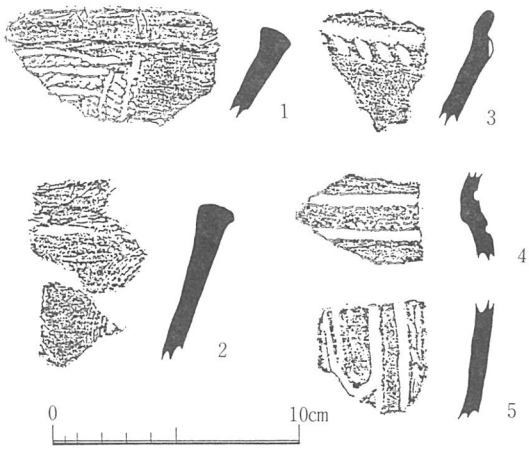


第97図　453—00 出土土器

深鉢（第97図①～④、図版56）　①は口頸部が外反する土器で、口縁端部は肥厚せず、上端面は平坦である。口縁部内面及び上端面にLRの縄文を施す。②は波状口縁の土器で、口縁端部直下に太い沈線をめぐらし、その下位にLRの縄文を充填する。③は口縁部まで直線的にひろがる土器で、口縁部は肥厚しない。器面には口縁端部から斜めに2条の沈線が描かれている。④は巻貝条痕調整の粗製土器である。

①の土器は口縁部上端面や内面に縄文を施しているが、口縁部の形態・胎土・調整手法等を観察すると縄文時代中期の土器とはやや異なっている。後期前半の土器と考えられる。②は後期初頭の中津式土器の口縁部であろう。③は口縁部も肥厚せず、特徴が少ないが、後期前半の北白川上層式土器と考える。

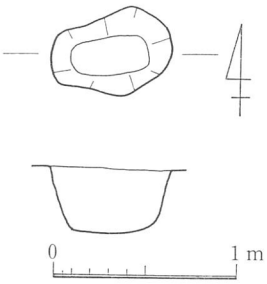
455—OO　G—20 PH区にある。453—OOの東に近接する位置である。径0.8m前後の円形を呈し深さ約0.4mである。



第98図　455—OO出土土器

深鉢（第98図①～⑤、図版56）　①・②は口縁部を拡張させ、平坦面をつくる。①は太い沈線で方形の文様を描き、そのあとLRの無節の縄文を施す。②は3条の条線で弧状の文様を描く。③は口縁部直下に太い沈線を描き、その下位には刻みを施す。④は頸部で屈曲する器形の土器で、胴部上半に横方向の沈線をめぐらし、沈線間にRLの縄文を施す。⑤は太い沈線を上下方

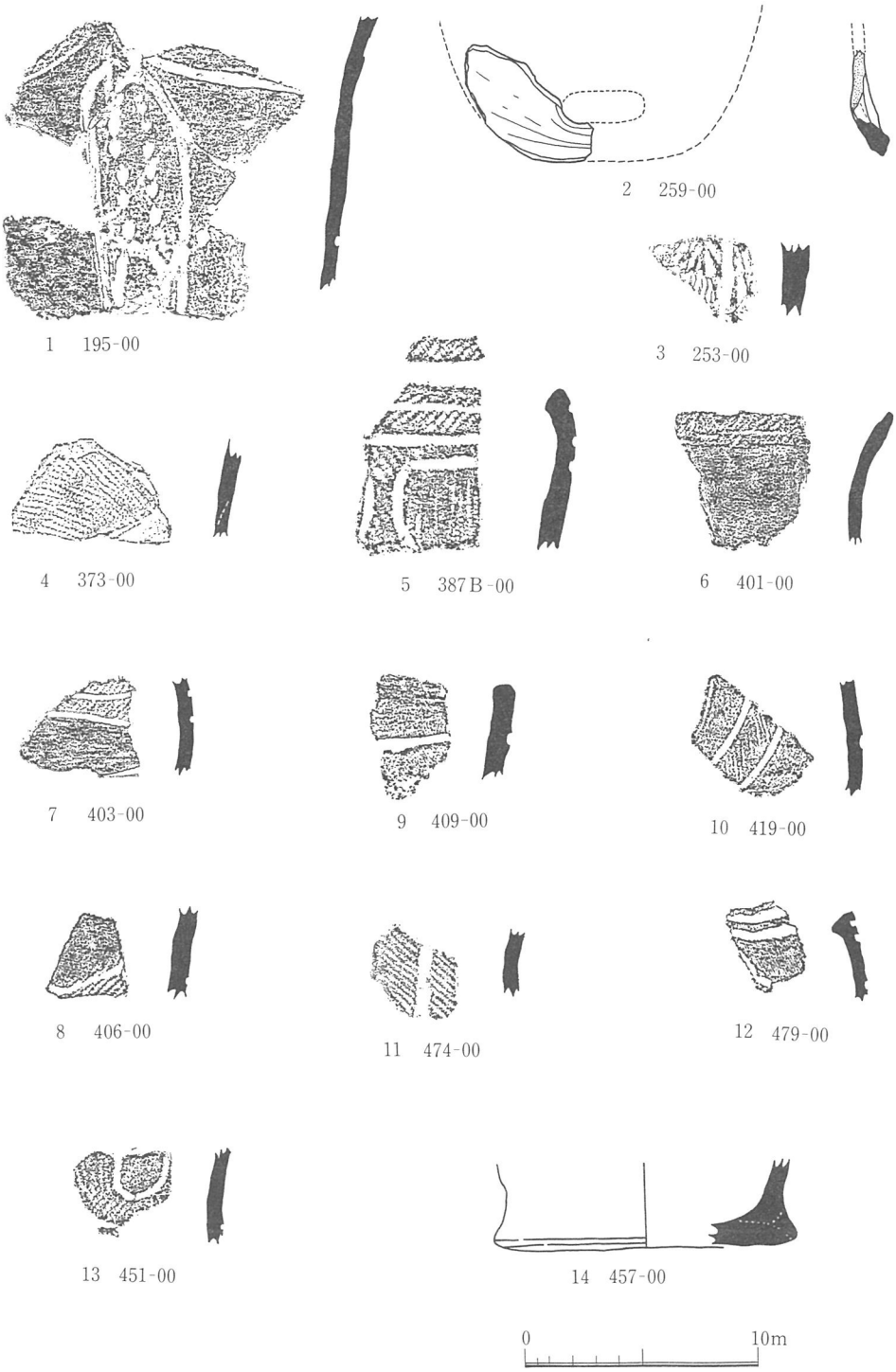
459—OO　G—20 SG区にある。長さ0.65m、幅0.4mの不整楕円形を呈し深さ0.4mである。



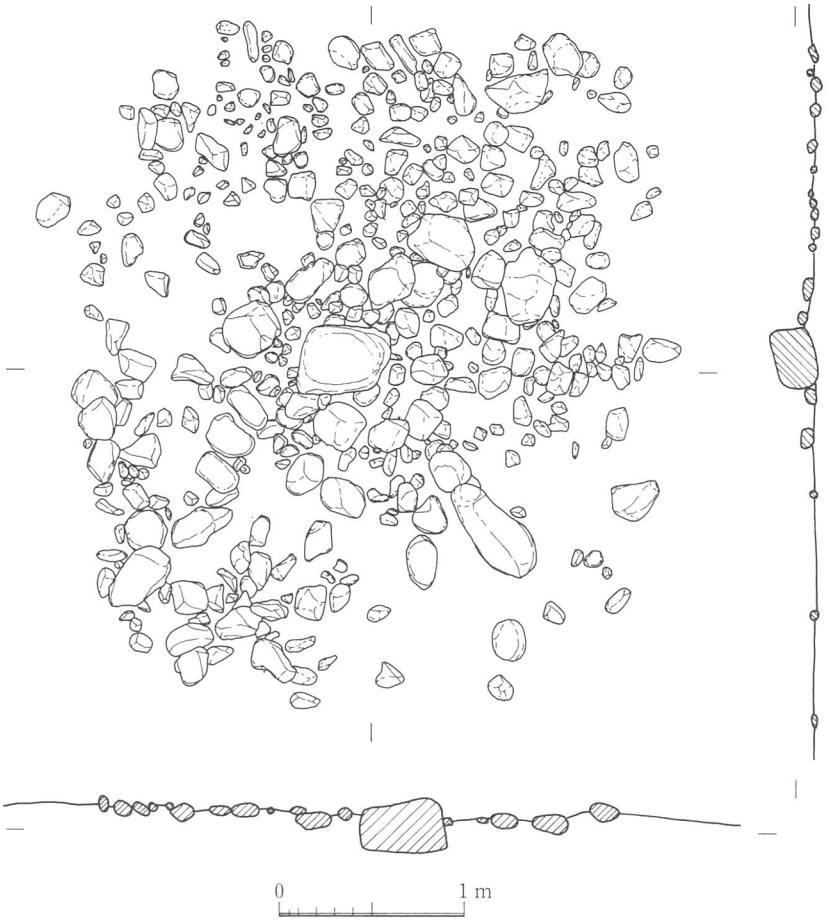
第99図　459—OO

粗製土器の破片が2片出土している。ナデ調整を施す。縄文時代後期前半の土器であろう。

484—OC　G—20 PN・PO・QN・QO地区にある。中央に大きな塊石があり、そのまわりの南北3.6m、東西3mの隅丸方形の範囲に拳大～人頭大の礫が敷きつめられている。そのなかで、北西と南東の隅は礫の分布はうすく、東北から西南にかけてななめに集中



第100図　中央微高地各遺構出土土器



第101図　484—OC

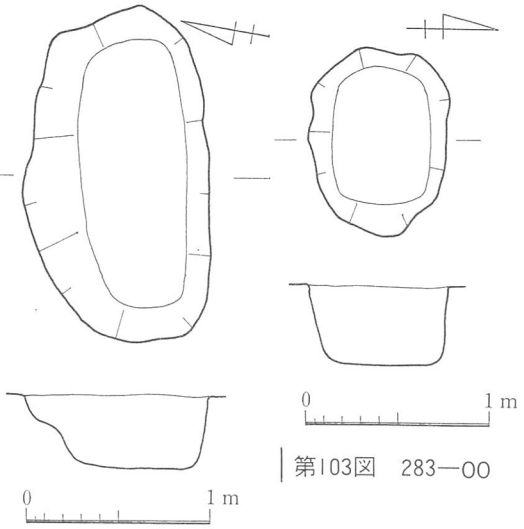
している。断ち割りせずに埋め戻したため礫群下層の構造や遺構の時期については明確でない面が多い。石の並べ方は、塊石のまわりにやや大きな石をめぐらせ、周辺の輪郭に沿っても比較的大きな石を並べているような傾向がみられるがはっきりしない。礫群は地山面即ち縄文時代遺構面に乗っており、すべて縄文時代包含層内に含まれているので、時期的に集落に平行する可能性が強い。人為的遺構である確証もないが、単なる偶然の集積とも考え難い状況である。遺物は包含層掘削中に周辺から若干の土器片が出土しているが、この遺構に確実に伴うと考えられるものはない。

4．西微高地及びその周辺

282—00　G—19 TU 区にある。楕円形を呈し長さ1.8m、幅1m、深さ0.4mをはかる。壙内には暗褐色土が堆積している。比較的整った形態をしている。

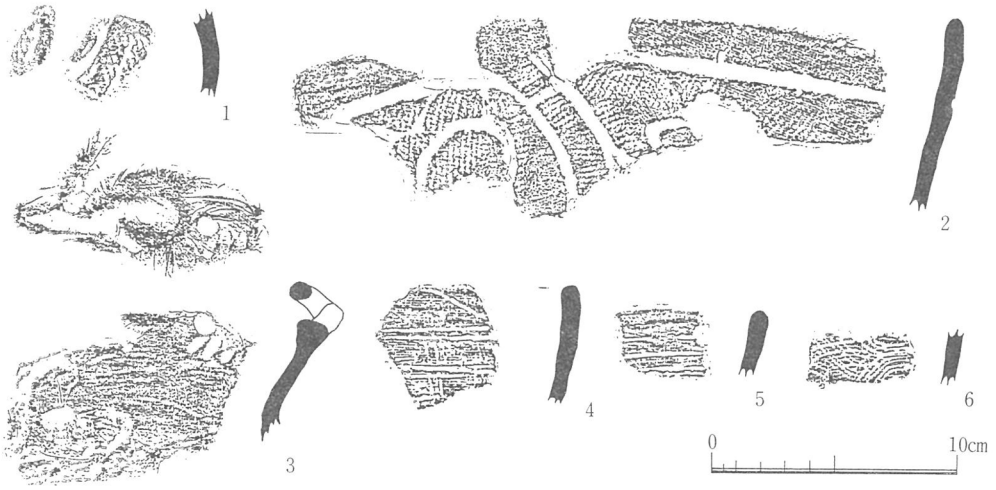
縄文時代後期に属すると考える土器片が2点出土している。いずれも粗製土器でナデ調整をおこなう。後期前半の所産であろう。

283—00　G—19 TV 区にある。小形の楕円形土壙であり、長さ1m、幅0.7m、深さ0.4mをはかる。埋土は極暗赤褐色土である。



第102図　282—00

第103図　283—00



第104図　283—00 出土土器

深鉢（第104図①～⑥）　①は波状口縁を呈する土器の波頂部で、沈線文の上からLRの縄文を施す。側面は平坦になり、縄文を施しているた②は太い沈線で渦文や横へのびる文様帯をつくりそこにLRの縄文を充塡するものである。口縁部は丸くなり、肥厚しない。③は頸部と胴部の境で屈曲する器形の深鉢で、口縁部は内側へ折り曲げ、上端面には粘土紐

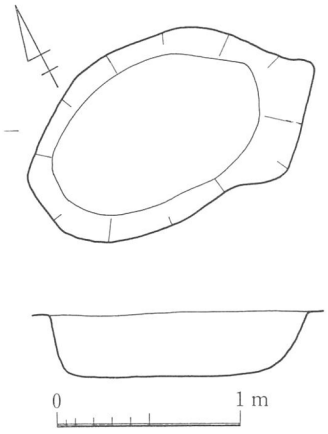
を「８」字状に巻いたものを貼付ける。その横には円形の刺突文を加える。また口縁端部外側に刻みをめぐらす。頸部には太い沈線間にLRの縄文を充塡した文様が描かれている。④～⑥は条線文の土器で、口縁部は丸くする。④は格子状の条線文、⑤は横方向の条線、⑥は横方向の条線を波状にうねらせた文様を描く。これらの他に巻貝条痕調整の粗製土器が出土している。後期前半の土器群である。

この遺構から出土した土器は、①の他は縄文時代後期前半に属するものであろう。①は縄文時代中期末葉の波状口縁を呈する土器の波頂部である。②は一見中津式土器とも思われるが、中津式土器は縄文帯と無文帯が交互に配される構図をもっており、この土器のように縄文を磨消さない文様構成ではない。中津式土器でも新しい時期のものであろう。③は口縁部の形態や頸部に描かれる文様等から四ツ池型土器に比定できるが、口縁部上端に貼付けられた「８」字状を呈する橋状突起は他地域との関連をうかがわせるものであろう。

286—OO　G—19 UV区にある。径0.5mの不整楕円形を呈する。

太い沈線文を描く土器片と粗製土器が出土している。有文土器は磨消縄文を施している。縄文時代後期初頭の中津式土器に含まれるものであろう。

291—OO　G—19 WW区にある。楕円形を呈し長さ1.5m、幅1m、深さ0.35mである。壙内には暗褐色土が堆積している。



第105図　291—OO

粗製土器の破片が２片出土している。ナデ調整をおこなう。胎土・色調から判断して縄文時代後期に属するものであろう

299—OO　G—19 UW区にある。平面形は楕円形で長さ1.2m、幅0.6m、深さ0.1mである。埋土は褐色砂礫土であった。

細片のため図示しなかったが、有文土器２片、無文土器が３点出土している。有文土器は沈線間に縄文を施すもので、一つはLR、他はRLの縄文である。無文土器はナデ調整の粗製土器である。縄文時代後期前半に比定できる。

310—OO　G—19 UY・VY区にある。楕円形で長さ0.8m、幅0.7m、深さ0.1mの小さな土壙である。埋土は暗褐色土であった。

縄文時代後期に属すると考える土器片が２点出土している。細片のため図示できないが、器表をナデ調整する粗製土器である。後期前半の所産であろう。

318—OO　G—19 UY 区にある。平面形は不整楕円形で、長さ1.4m、幅0.9m、深さ0.3m である。埋土は暗褐色土である。

深鉢（第110図①）　口縁部の破片である。口縁部に横方向の太い沈線をめぐらし、その上から LR の縄文を施し、口縁部縄文帯をつくる。胴部との境は突帯状に肥厚させる。胴部には垂下する太い沈線がある。口縁部は丸く、縄文は施さない。

縄文時代中期末葉から後期初頭の中に位置すると考える。

330—OO　G—19 VY 区にある。西微高地東縁である。径0.8～0.9m の不整円形で深さ0.35m である。埋土は褐色土である。

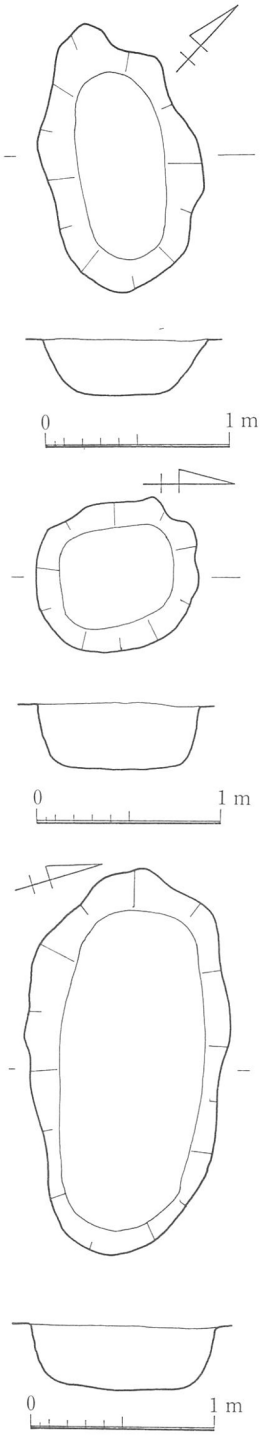
深鉢(第110図②～④)　②は太い沈線間に LR の縄文を充填する文様をもつ。縄文の上には赤色顔料が塗布されている。③は口縁部破片で、端部は丸くする。器表には口縁端部から垂下する条線文が描かれている。④は粗製土器の胴部で、巻貝による条痕調整をおこなう。これらの他にも粗製土器片が5片出土しているが、巻貝条痕調整のものとナデ調整のものがある。縄文時代後期前半の北白川上層式土器に比定しうる。

335—OO　G—19 UY 区にある。平面形は楕円形で、長さ2.1m、幅1.1m、深さ0.35m である。埋土は暗赤褐色土であった。

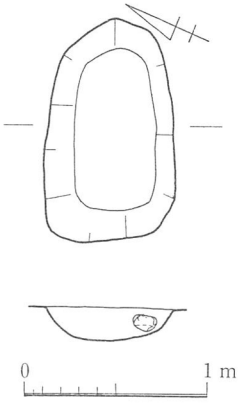
粗製土器の口縁部がある。口縁部は内弯し、端部はやや肥厚する。巻貝条調整のあと粗くナデ調整を施す。縄文時代後期初頭の中津式土器の口縁部の形態とよく似ており、その時期の粗製土器と考える。

349—OO　G—20 VA 区にある。西微高地の東縁付近である。楕円形を呈す。長さ1.2m、幅0.7m、深さ0.2m で、最大幅は西端部に扁する。埋土は拳大の礫を少量含む暗褐色土である。

深鉢（第110図⑤）　平行した2条の沈線を描き、そこより別の沈線を派生させる。沈線間の幅は狭い。縄文は施さない。後期前半の土器であろう。



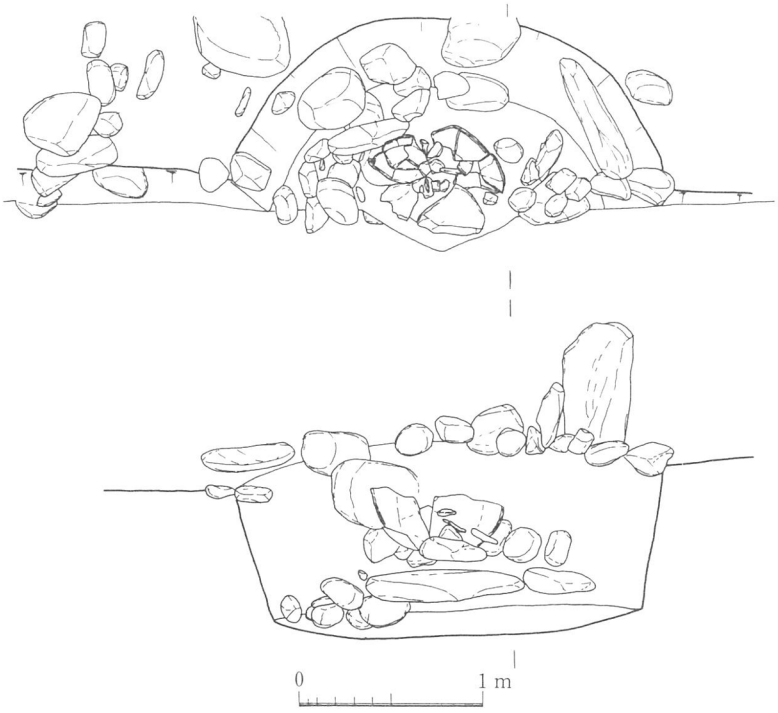
第106図　318・330・315—OO



第107図　349—OO

450—OU　G—19 YR 区にある。調査区の西南端である。調査の最初の段階に排水溝を南北両辺に沿って機械掘削した際に、北半を掘削してしまい、南半分しか残っていない。墓壙は長さ1.2m 程度の円形または楕円形と思われ、深さは0.5m である。壙底には円礫を並べその上に平らな石を敷き、その上に深鉢形土器を正立させ、その周囲にも円礫をまばらに敷き、西端には平たい石を立てている。

棺として使用されたと思われる土器は粗製の深鉢であるが、保存状態悪く復原不可能であり図示できなかった。後期初頭～前半の中

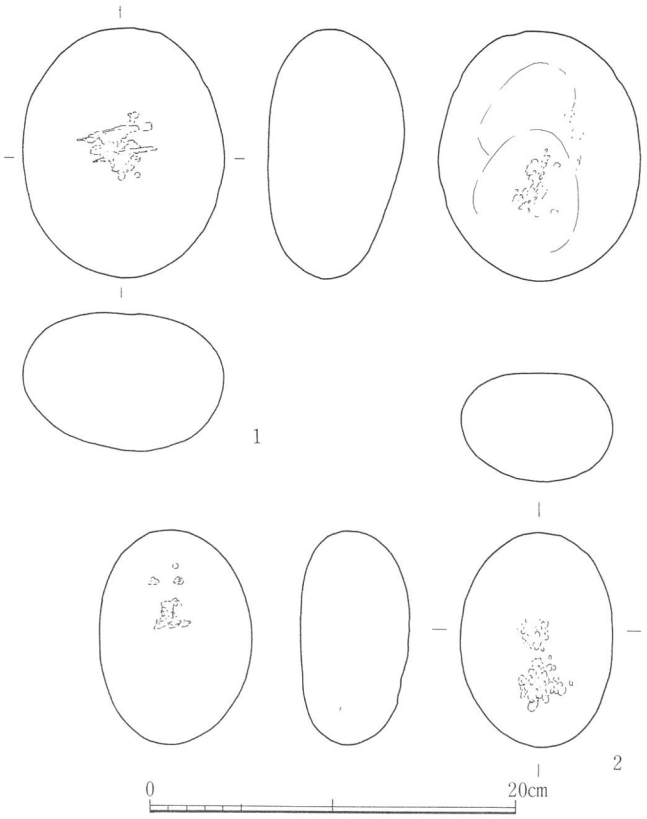


第108図　450—OU

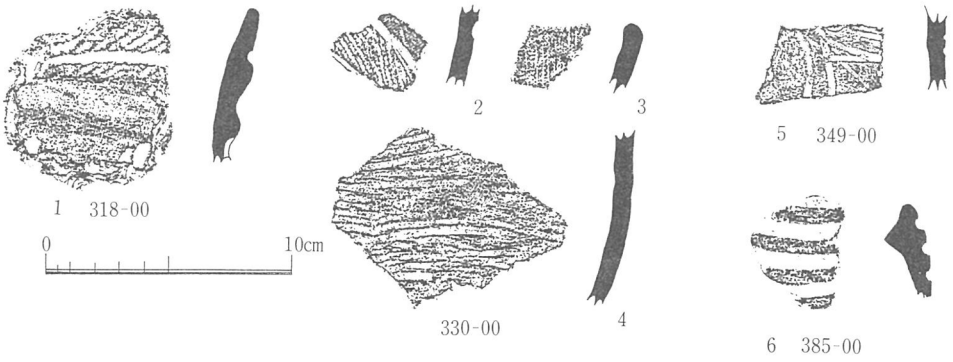
津式よりや後出するものと思われる。墓壙内からは中津式と思われる精製土器の破片も出土した。

円礫石器あるいは円礫は多く出土した。図示したものは敲石で、両面に敲打痕があり、

1には研磨痕も残っている。1は長さ17.6cm、幅11.0cm、厚さ7.5cm、重さ1.547gで、2は長さ11.7cm、幅8.3cm、厚さ5.9cm、重さ819gである。



第109図　450—OU 出土円礫石器



第110図　318・330・349・385—OO 出土土器

5．包含層出土遺物

石鏃は凹基無茎式と平基無茎式がある(第11図、図版61)。大部分は凹基式である。1は長大で整美なつくりのもので、わたくりも大きく両端部はとがっている。2は両端部を丸くつくる。3は両側線がくびれ、逆Y字状を呈する。くびれ部は鋸歯状に剝離している。4はわたくりが大きく先端は欠失している。5は片方の端部が長く左右非対称形である。6はわたくりがやや浅く、厚手で粗雑なものである。風化して白色を呈する。7は両側線がややくびれ気味で、わたくりは大きく両端は方形状を呈する。10も7と類似の形態を示す。8、13、16はかなり小形品で、両端部を丸くつくる。11はわたくりは大きいが尖先は短い。12、15は薄く小形のもので、主要剝離面を残す。12の方がわたくりが深い。17は両側縁がややくびれ、わたくりも浅い。18は唯一の平基式で、五角形を呈する。

石錐（第111図　1～8、図版62）にはつまみをもつものと、明確なつまみをもたないものがある。つまみの形態は、逆三角形のもの(2)と円形のもの(3)がある。5・6は明確なつまみはないが、頭部が幅広くなっている。1・4・7・8は全体が柳葉形を呈し、1は断面三角形であるが他は扁平である。

小形削器（第111図9、図版62）は縁辺の全周にわたって細部調整を施す。B面には厚礫面を残す。長さ25.5㎜、幅22.6㎜、厚さ6.2㎜、重さ　gである。

楔形石器（第111図10、図版63・64）は台形を呈し両側縁は無調整で、上辺及び下辺には細部調整ないし潰れがみられる。長さ35.0㎜、幅34.7㎜、厚さ9.0㎜、重さ　gである。1点のみ図示したが、同様なものは10点前後あり、若干のヴァラエティがある。

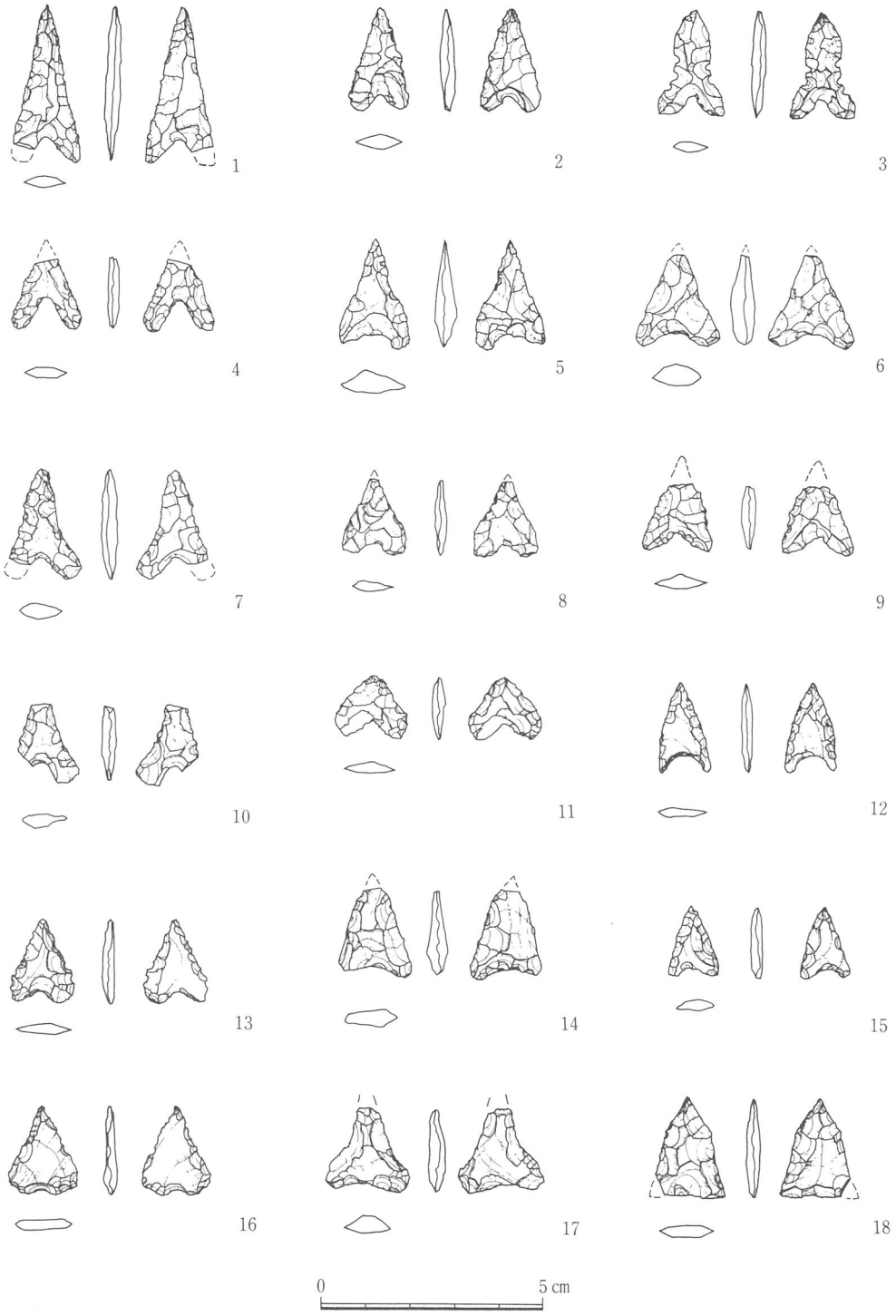
石匙（第112図1、図版63・64）は体部は断面三角形で刃部は直刃である。つまみは小さい円形状で体部中央にやや傾いてつくり出されている。長さ38.3㎜、幅67.2㎜、厚さ9.4㎜、重さ16.7gである。

削器（第111図11・第112図2～4、図版63・64）

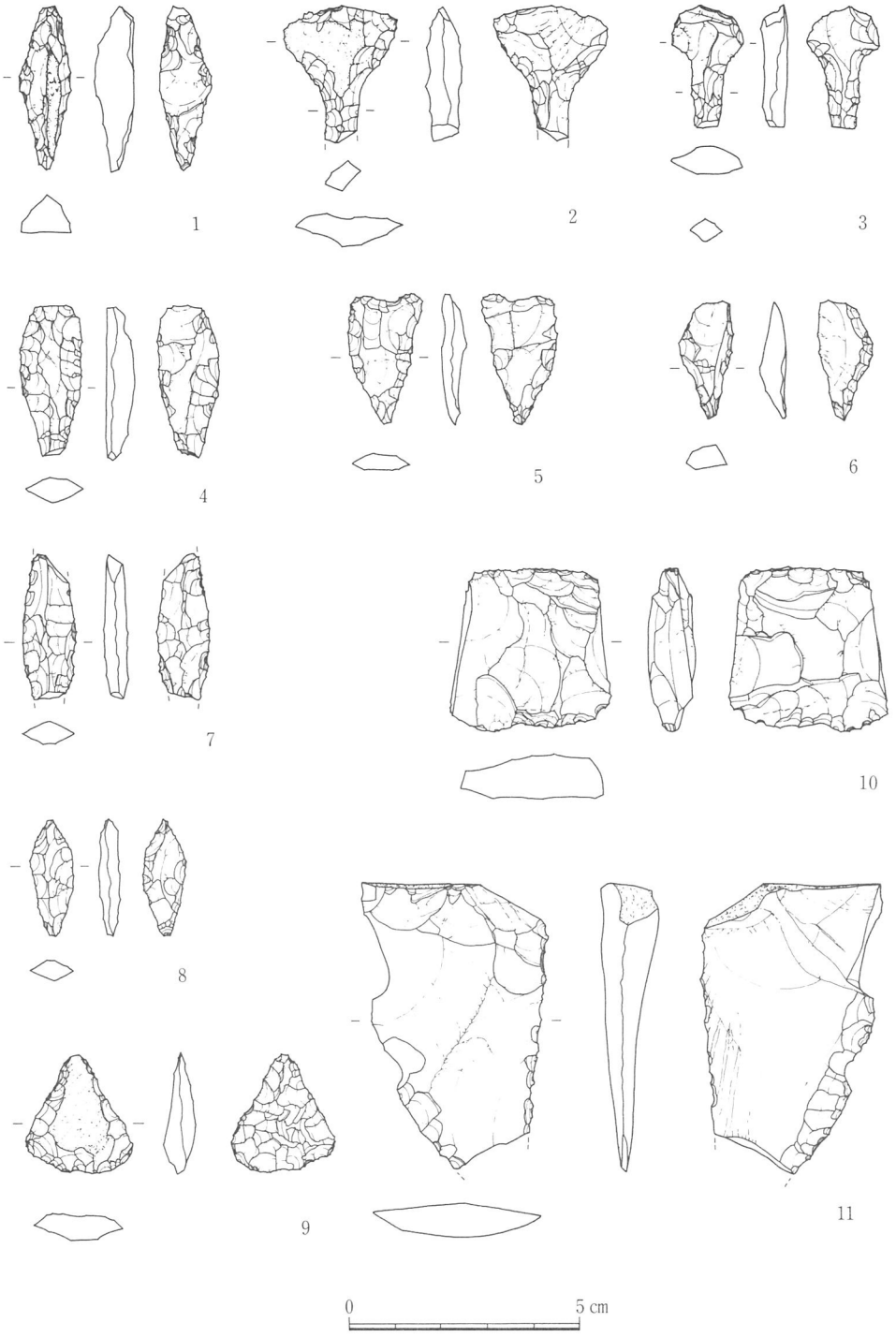
第111図11は縦形複刃削器で、上辺は打面を残し、下端は欠失している。両側縁に細部調整を持ち、平面形は三角形を呈する。長さ62.4㎜、幅40.7㎜、長さ11.0㎜、重量24.3gである。

第112図2は長方形の縦長剝片を使用した削器で片面は自然面のままである。刃部は直線状で両面から細部調整を施す。長さ83.7㎜、幅35.6㎜、厚さ10.5㎜、重さ45.1gである。

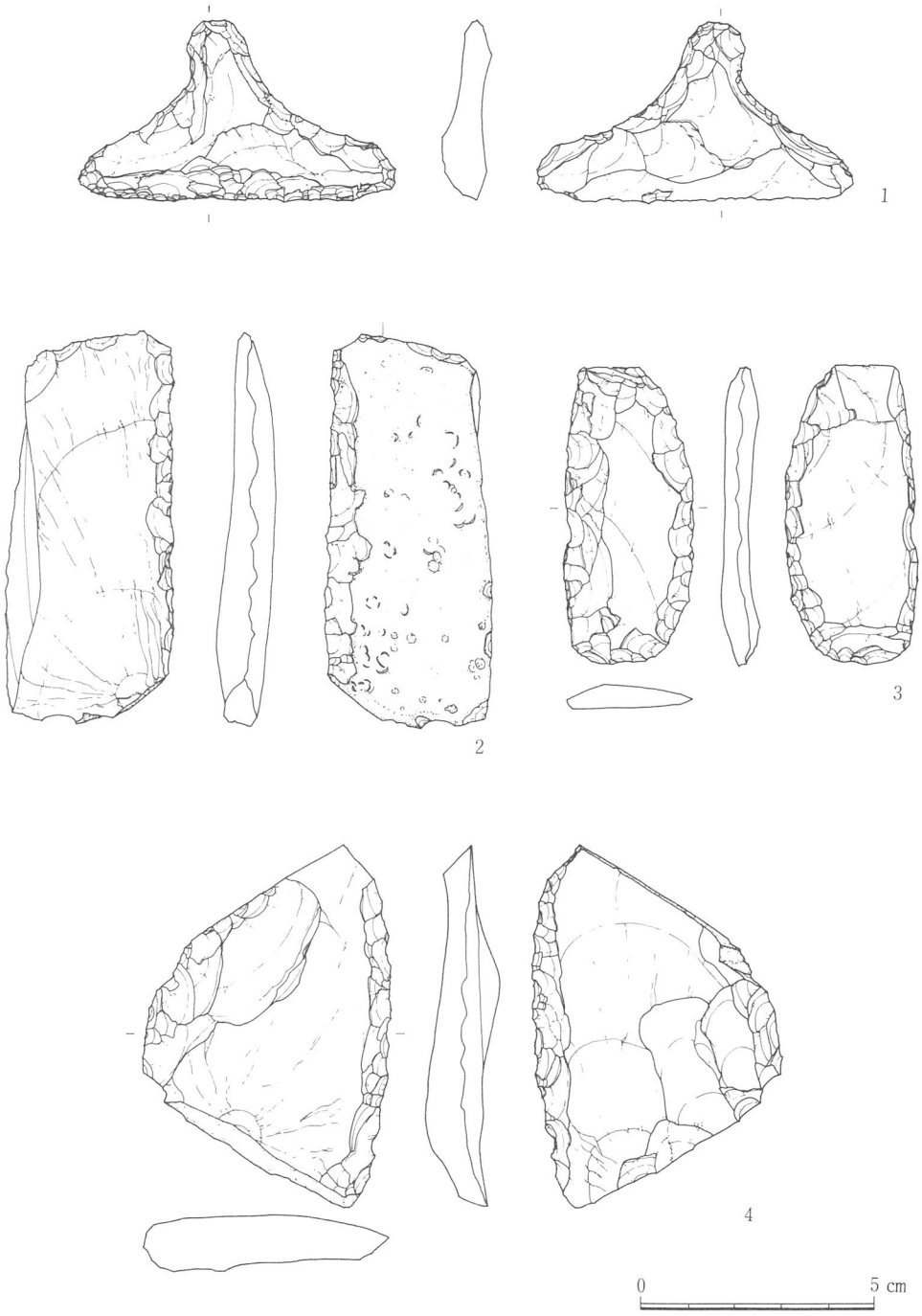
3は2に比べるとやや小形の削器で、やはり縦長剝片を使用し、刃部は弯曲する。長さ63.3㎜、幅27.7㎜、厚さ7.1㎜、重さ15.1gである。



第111図　包含層出土石器(1)

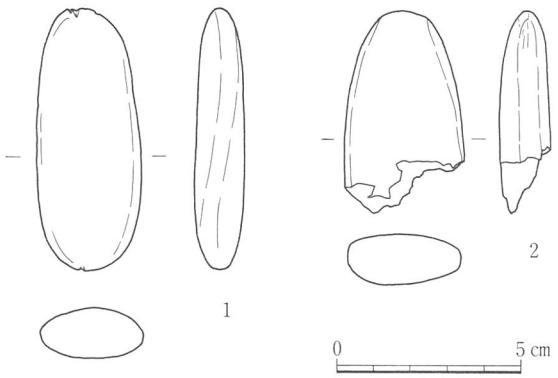


第112図　包含層出土石器(2)



第113図　包含層出土石器(3)

4は平面台形で、台形の底辺にあたる縁辺に細部調整を施して刃部をつくり、他の縁辺にはほとんど細部調整はみられない。長さ52.8mm、幅76.9mm、厚さ10.5mm、重さ45.5gである。図示した以外にも10点弱の削器が出土した。特に4に類似したものが多く、4～5点みられる。



第114図　包含層出土磨製石器

磨製石器には切目石錘と石斧がある。切目石錘(第114図1、図版60)は長さ7.2m、幅2.8cm、長さ1.4cmで、細長い円礫の両端に切目を入れている。上端は切目を入れなおしている。石斧(第114図2)は残存長5.3cmをはかり、刃部は欠失している。[14]

No.	長	幅	厚	重　量
1	35.7mm	14.4mm	3.5mm	1.2g
2	23.0mm	13.3mm	3.4mm	0.7g
3	23.7mm	14.9mm	2.9mm	0.7g
4	15.9mm	15.6mm	2.3mm	0.4g
5	23.9mm	15.7mm	4.9mm	1.1g
6	18.6mm	19.0mm	4.1mm	1.1g
7	24.8mm	16.1mm	3.5mm	0.8g
8	17.6mm	14.7mm	2.4mm	0.5g
9	15.2mm	15.9mm	3.5mm	0.7g
10	18.4mm	13.7mm	3.2mm	0.6g
11	14.0mm	16.2mm	2.8mm	0.5g
12	20.3mm	11.6mm	2.3mm	0.5g
13	19.2mm	14.3mm	2.6mm	0.8g
14	20.2mm	16.3mm	4.5mm	1.2g
15	15.8mm	11.4mm	2.6mm	0.4g
16	20.6mm	15.5mm	2.9mm	0.7g
17	18.6mm	19.0mm	4.1mm	1.1g
18	22.9mm	15.5mm	3.1mm	1.0g

包含層出土石鏃計測表

No.	長	幅	厚	重　量
1	35.4mm	11.0mm	8.1mm	2.6g
2	29.0mm	24.8mm	8.0mm	3.8g
3	26.2mm	15.5mm	5.7mm	2.0g
4	32.7mm	13.3mm	5.9mm	2.8g
5	28.2mm	16.4mm	5.5mm	2.0g
6	25.2mm	11.6mm	5.1mm	1.3g
7	31.5mm	11.5mm	5.0mm	1.9g
8	25.2mm	9.5mm	4.1mm	0.9g

包含層出土石錐計測表

(1) 泉拓　良「近畿地方の土器」『縄文文化の研究 4 』雄山閣1981

(2) 原田　修『縄手遺跡 1 』縄手遺跡調査会1971

(3) 泉拓　良「西日本縄文文化研究会1984年 9 月例会発表主旨」1984

(4) 細谷克彦「近畿地方の土器――福井県鳥浜貝塚の資料――」第 2 回縄文研究会松江大会発表資料1985

(5) 註(2)に同じ

(6) 『称名寺式土器に関する交流研究会資料集1985

(7) 『池上・四ツ池遺跡16・17』第 2 阪和国道内遺跡調査会1971

(8) 田中良之氏・西健一郎氏の御教示による。記して感謝したい。

(9) 堅田　直『平遺跡』帝塚山大学考古学研究室1966

(10) 註(6)に同じ

(11) 泉　拓良・家根祥多「北白川追分町遺跡出土の縄文土器」『京都大学埋蔵文化財調査報告III――北白川追分町縄文遺跡の調査』1985

(12) 岡田茂弘「近畿」『日本の考古学II』河出書房新社1965

(13) 註(7)に同じ

(14) 本節の文責は、遺構については71―OD、87―OO が服部、193―OD、374―OD が松尾、それ以外は岩崎、遺物については縄文土器、土製品は松尾、石器は岩崎である。なお打製石器の実測・トレースについては本協会蜂屋晴美による。

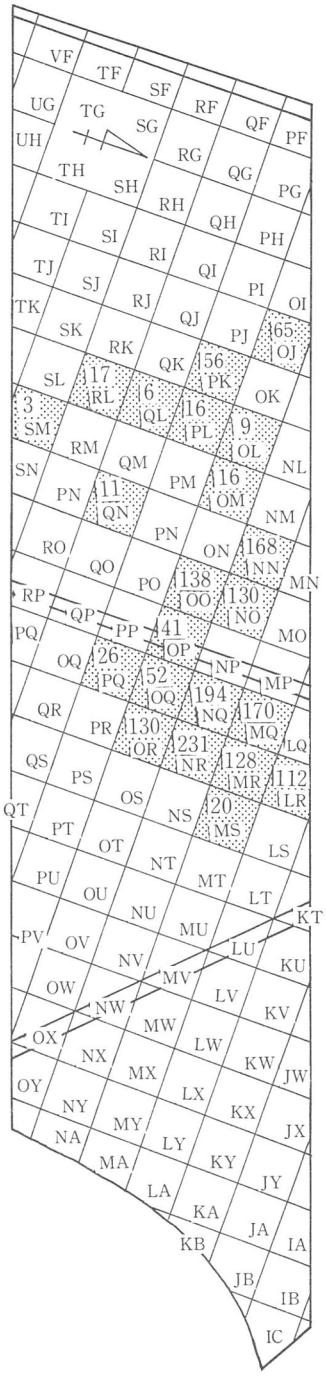
第3節　弥　生　時　代

弥生時代の遺物は、基本層序の第4層とした暗褐色土層より主として出土したものである。今回の調査において弥生時代の遺構は検出されていない。

第4層内出土遺物としたものには、上層の第3層中世包含層の遺物と思われるものの混入が若干認められる他、縄文・弥生土器があり、量的には縄文土器の方が多い。

弥生土器は調査区中央部と東部のごく限られた範囲――南北K～Tライン、東西M～Sライン付近――に集中して分布している。(第115図)量的にみると弥生時代中期の遺物が9割を占め、前期と後期の遺物は少量である。出土した弥生土器は全て破片で総数1,739点を数えるが図化し得るものはわずかである。遺物の残存状態は極めて悪い。焼成は軟質なものが多く、生駒西麓産の胎土と思われる数点の土器を除き、表面が剥離しているものが、ほとんどである。

以下、各出土遺物について報告する。



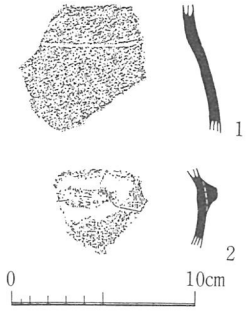
第115図　弥生土器数量分布図

1．弥生土器

第1様式（第116図、図版67）

出土した弥生土器第Ⅰ様式は2点である。

(1)は壷の破片と思われる。頸部に箆描き沈線文を一条施している。胎土は砂粒を多量に含み軟質である。

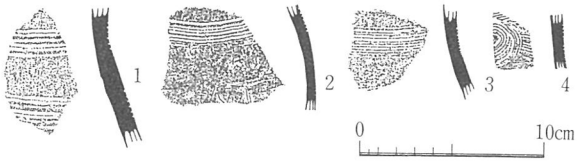


第116図　第Ⅰ様式
土器拓影

(2)は外反する口縁をもつ鉢形土器に付く瘤状の把手と思われる。内外面とも、丁寧になで調整を行なっている。第Ⅰ様式の新段階に位置づけられよう。

第Ⅱ様式（第117図、図版67）

弥生時代中期前半の遺物もわずかながら認められる。甕の体部破片が多量に出土しているが弥生時代中期のいずれの時期かを決定し難いため、壷の体部に施された文様より第Ⅱ様式と判断されたものについて述べることとする。



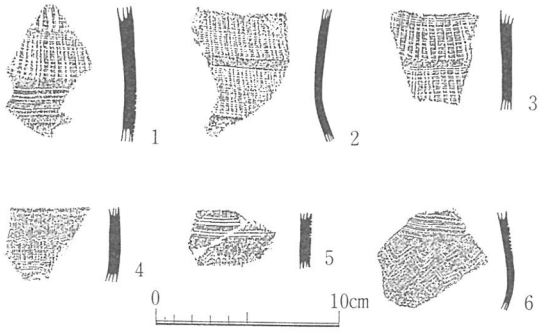
第117図　第Ⅱ様式土器拓影

(1)は壷形土器の頸部に施された櫛描き直線文である。3本を1単位とし、6条で構成される。

(2)は壷形土器（無頸壷）の肩部に施された櫛描き直線文である。7条を一単位とする。体部は丁寧にヘラ状工具で磨かれている。

(3)は1と同様、壷形土器に施された直線文である。沈線の間隔は狭まり直線的で細く流麗になる。

(4)は細片ではあるが櫛描き直線文を末端で止める、いわゆる「直線文末端扇形文」を施すものである。器種等は不明。



第118図　第Ⅲ～Ⅳ様式土器拓影

第Ⅲ～Ⅳ様式（第118～120図、図版65～67）

本遺跡の弥生土器は大半弥生時代中期中葉のものであるが第Ⅲ様式と第Ⅳ様式については明確に区別し得ていない。しかしながら第Ⅲ～Ⅳ様式は量的に

急激に増加し、器種構成も豊富になっている。壷形土器、甕形土器、鉢形土器の他に壷形土器用蓋、高杯形土器、水差し形土器等中期前半には見られない器種も含まれる。

出土遺物は全て破片で完形は一点も含まれない。図化し得るものはいずれも口縁、底部脚部にとどまるため全体の器形については不明である。しかし、体部の破片は弥生時代中期の特徴的な様相を示すものが多々出土している。簾状文で飾る土器（第118図２、３）が圧倒的に多く、簾状文と簾状文の間を磨くなど丁寧な調整を行っている。他に簾状文と箆描き直線文を組み合わせるもの（第118図１）、波状文と箆描き直線文の組み合わせによる装飾が施されているもの（第118図４～６）が大半を占める。

壷形土器（第119図、１～16）

(1)～(4)は広口壷形土器で大きく外反する口縁部に文様をもち端面が下垂するものである。

(1)は復元口径25.6cmを測る。口縁部外面は上下二段の櫛描き列点文により綾杉文状の文様を施し、その間径0.7～１cmの円形浮文を貼りつける。円形浮文は数個おきに上下に追加され３段となるが破片からはその間隔については不明である。又、口縁端部内面には外面と同様の櫛描き列点文を一条施す。

(2)～(4)は下垂した口縁部外面に簾状文を施すものである。

(2)は口縁端部内面に円形浮文が６～７㎜間隔で貼りつけられる。又、口縁部外面は簾状文の上から不規則な間隔で刺突文がみられる。復元口径24.8cmを測る。

(3)は口縁部内面にやや粗雑な波状文を施す。復元口径28.6cmを測る。又、口縁端部は上方にもわずかながら拡張する傾向を示す。

(4)は口縁がやや小型で復元口径20.0cmを測る。口縁部と共に頸部外面にも簾状文を施している。遺存状態が悪いが、生駒西麓産の胎土の可能性が考えられるものである。

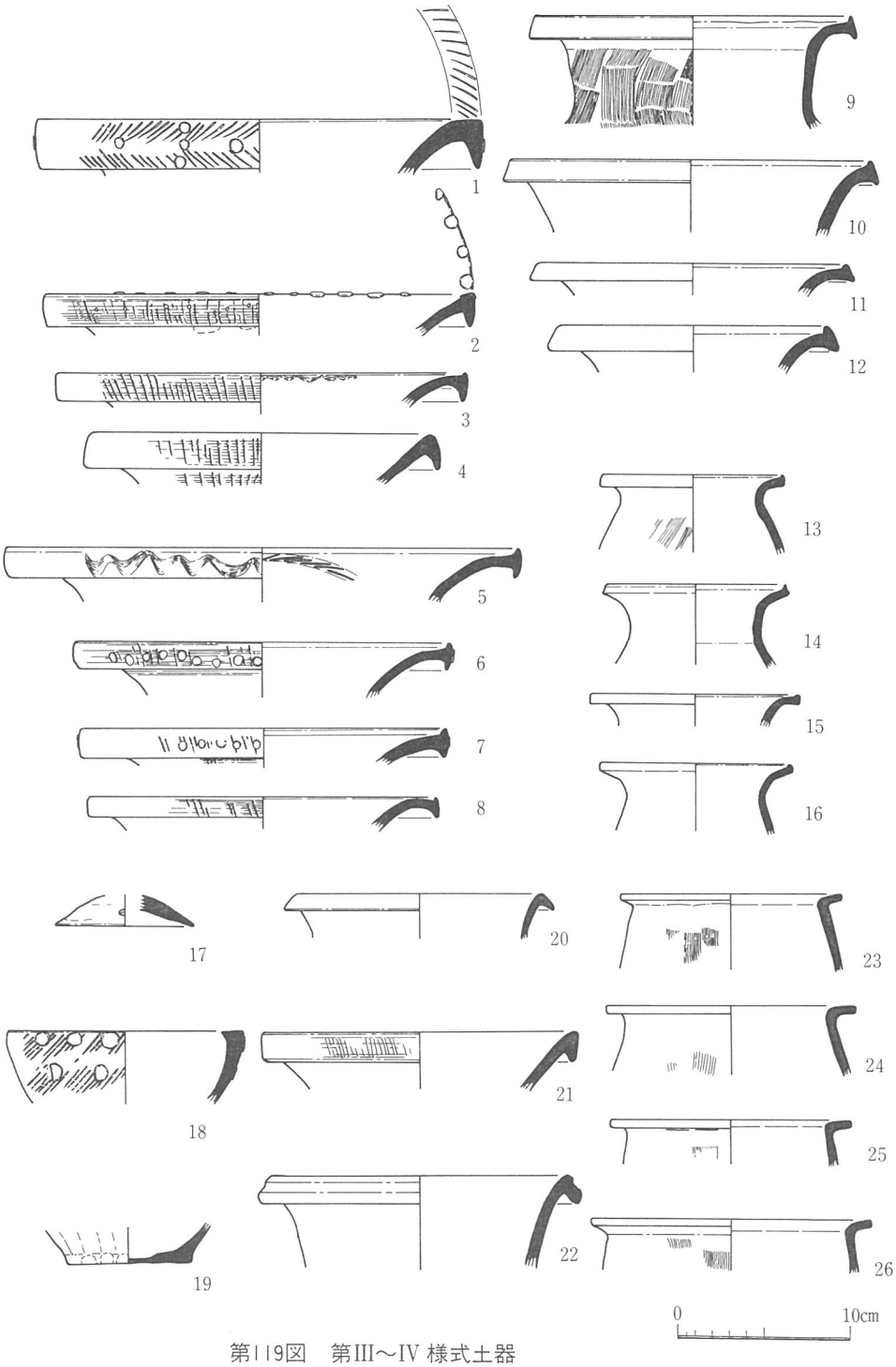
(5)～(8)は口縁端部を上下に拡張し口縁部と文様をもつ広口壷形土器である。

(5)は復元口径29.6cmを測りやや大型のものである。拡張した口縁部外面に粗雑な波状文を施す。口縁部内面はナデ調整により、その上端に櫛描き列点文を１条施す。

(6)～(7)は口縁端部外面に簾状文を施し円形浮文をはりつけたものである。円形浮文の貼りつけはやや雑であり高さが一定せず直線をなさない。復元口径は(6)が21.6cm、(7)が21.1cmを測る。

(8)は口縁端部外面に簾状文のみを施すもので復元口径20.0cmを測る。

(9)～(12)は口縁端部を上下に拡張する文様を施さない壷形土器である。



第119図　第III～IV 様式土器

(9)はややのびた垂直に近い頸部をもち口縁部も外方に開く壷形土器である。復元口径18.2cmを測る。頸部外面に縦方向の細かな刷毛目調整が施される。このタイプのものは本片に図示したもの以外には認められない。

(10)〜(12)は内外面ともになで調整による無文の広口壷である。細片ではあるが図化し得なかったものに20cm前後の口径をもつ無文の口縁部が多々出土した。(10)の復元口径20.7cm、(11)の復元口径17.7cm、(12)の復元口径15.4cmを測る。

(13)〜(16)は小型無文の壷形土器である。復元口径はいずれも11cm内外であり短く立ちあがる頸部に小さく外反する口縁部をもつ。

口縁端部は小さく上下に拡張するもの(13)と上方へ立ち上がるように拡張するもの(14)〜(16)がある。調整は内外面ともになで調整を基本とし、外面上刷毛目調整を施すもの(13)も認められる。形態的には畿内第IV様式に相当するものと思われる。復元口径(13)は10.3cm、(14)10.4cm、(15)は11.9cm、(16)は10.9cmを測る。

(17)〜(26)はいわゆる生駒西麓産と言われている土器である。胎土は暗茶褐色の色調を呈し、肉眼観察において雲母、角閃石を多量に含む。他の遺物に比べ焼成は硬質であり肉眼で容易に識別できるものを図化した。全体の中で占める割合はさほど多くないにも拘わらず、壷形土器、壷形土器用蓋、甕形土器、水差し形土器の把手、高杯形土器の脚部等、器種がでそろう。

(17)は壷形土器用の蓋と思われる。復元径8.0cm、残高1.8cmを測る。下端部に径0.6cmの孔を穿っている。焼成前の穿孔である。

(18)は細頸壷形土器の口縁部である。外面に櫛描き列点文を施し、円形浮文を貼りつけている。復元口径13.4cmを測る。

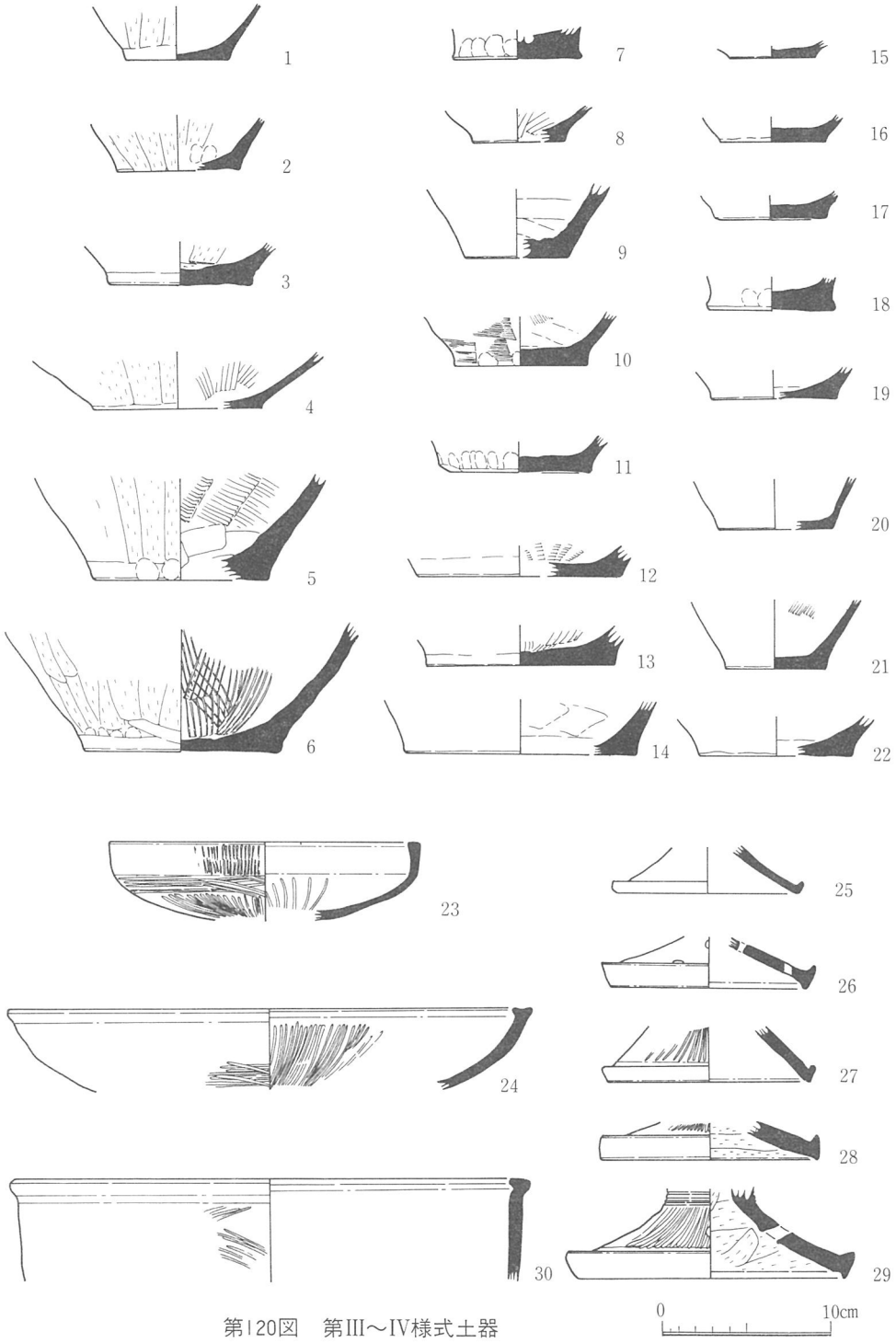
(19)は甕形土器の底部と思われるもので底径7.0cmを測る。細砂を多量に含む。外面は縦方向のなで調整を丁寧に施している。

(20)〜(22)は口縁部が下垂する広口壷である。

(20)は復元径14.0cmを測る。口縁部はやや外広に開き、口縁、体部ともに文様が施されないものである。

(21)は下垂した口縁端部外面に簾状文を施しやや厚みをもち大きく口縁が開く形状をもつものである。復元口径18.4cmを測る。

(22)は斜め下方に折り返すように下垂する口縁端部に凹線文を一条めぐらせる。復元口径



第120図　第III～IV様式土器

17.2cmを測る。

⑵～⒇は甕形土器である。復元口径14.0～16.0cmの小型の甕で、やや内傾する肩部に短く水平近くまで折りまげた口縁をもつのが特徴である。体部外面は縦方向の刷毛目調整を施し、内面は丁寧になでを施している。第Ⅳ様式に相当するものと思われる。⒇の復元口径12.6cm、⒇の復元口径14.0cm、⒇の復元口径13.6cm、⒇の復元口径16.0cmを測る。

生駒西麓産の胆土と思われるものはこれらの他、水差し形土器の把手、壷形土器、鉢形土器の体部と思われる破片が出土している。

底部（第120図１～22）

(1)～(6)は外面に縦方向のケズリが認められる甕形土器の底部である。復元底形8.0cm前後のもの(1)～(3)と10.0cmを越えるやや大型のもの(4)～(6)がある。小型のものは内面をなで或いは箆削りによって調整する。大型のものは内面に荒い刷毛目が施される。復元底径(1)は7.0cm、(2)は7.1cm、(3)は8.1cm、(4)は10.0cm、(5)は10.0cm、(6)は11.3cmを測る。

(7)～⒇は壷形土器或いは甕形土器の底部である。細片のため厳密に区別し得ない。内外面ともになで調整を基本とするもの⒂～⒇と外面刷毛目調整、内面なで調整のもの⑽、外面なで調整、内面刷毛目調整のもの⑿⒀などバラエティに富む。

各復元底径は次の通りである。(1)7.0cm、(2)7.1cm、(3)8.1cm、(4)10.0cm、(5)10.0cm、(6)11.3cm、(7)6.6cm、(8)5.4cm、(9)6.0cm、⑽7.8cm、⑾8.2cm、⑿12.0cm、⒀11.1cm、⒁13.6cm、⒂4.9cm、⒃6.1cm、⒄6.4cm、⒅7.3cm、⒆7.3cm、⒇6.7cm、(21)6.0cm、(22)7.9cm。

高杯形土器

⒇ ⒇は高杯形土器の杯部、⒇～⒇は高杯形土器の脚部である。

⒇は口縁部がほぼ垂直に立ちあがり、口縁端部がやや肥厚し水平な端面をもつものである。外面は上部より縦方向２段の箆の刺突のような文様をつけ、受部は横方向と方射状に箆磨きを施している。内面は下半に下から上へむかう放射状の箆磨きを施す。復元口径18.2cmを測る。

⒇は杯部が浅くやや大型の形状をもつもので復元口径30.8cmを測る。口縁端部は両側にやや肥厚し上面に水平な端部をもつ。又、端部上面に凹線を一条めぐらす。内面は放射状、外面は横方向に箆磨きを施している。

⒇は第Ⅲ様式、⒇は第Ⅳ様式に属するものと思われる。

(25)～(29)は中空円筒状柱部をもつ高杯形土器の脚部である。

(25)は内外面ともになで調整を施しやや器壁が薄いものである。裾部径10.8cm測る。

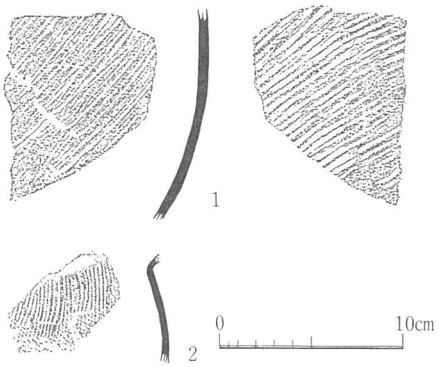
(26)は(25)同様内外面なで調整である。2段に孔を穿っている。焼成前穿孔である。裾部径11.5cmを測る。

(27)は外面に篦磨きを施すやや丸味をもつ脚部である。裾部径11.9cmを測る。

(28)は(27)同様外面に篦磨きがみられる。内面は横方向に篦削りが認められる。器壁は厚めである。裾部径12.7cmを測る。

(29)は器壁が厚く大型である。外面は全面に丁寧な篦磨きが施されており、裾部から脚柱部にかけての変化点に沈線を何条もめぐらせている。内面は荒い篦削りが認められる。焼成前穿孔が一孔穿たれている。裾部径16.0cmを測る。

第Ⅴ様式（第121図、図版67）



第121図　第Ⅴ様式土器拓影

後期の遺物もわずかながら含まれる。

外面に叩きを施す甕が2点出土している。

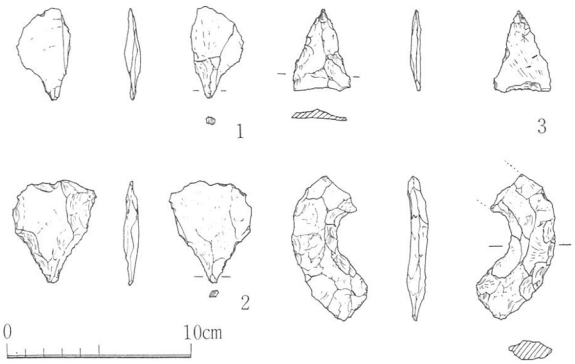
(1)はやや大型の甕で、外面に斜方向のあらい平行叩き、内面は縦方向の刷毛目調整を施す。

(2)は中型の甕で外面に細かい平行叩きを肩部に施している。

2．石器

第5層には弥生時代の打製石器が数点出土している。(第122図)、この他讃岐石の剝片や石核も少量認められる。

(1)(2)は石錐である。最大幅が上端にあり錐部がそのまま細く作り出され、全体が扇状を呈したものである。材質は讃岐石である。



第122図　弥生時代：石器

(1)は器長2.5cm、頭部幅1.4cm、錐部幅0.4cm、厚さ0.4cm、断面は四角形を呈す。重量1.3g、(2)は器長2.8cm、頭部幅2.1cm、錐部幅0.6cm、厚さ0.4cm、断面は四角形を呈す。重量3.5g、先端部に回転した使用痕と思われる痕跡がわずかに残る。

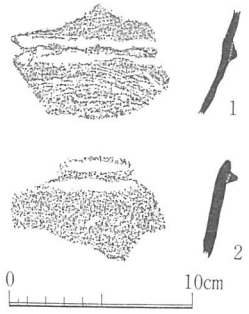
(3)は凹基無茎式石鏃である。やや左右が不対象な三角形を呈し、基部がわずかにくぼむものである。材質は讃岐石を使用している。器長2.2cm、最大幅は基辺にあり1.6cm、厚さ0.3cm、重量1.0g、縁辺にのみ細かい調整剥離を行なっている。

(4)は先端部を欠損しているが、弧形に彎曲している形態の石小刀である。両側縁に刃部をもつ。柄部を装着するための加工等は認められない。現長4.0cm、幅1.2cm、厚さ0.3cm、重量4.2g を測る。材質は讃岐石である。

3．その他の遺物

縄文土器（第123図、図版67図）

突帯文式土器片２点が出土している。近畿地方においては、弥生時代前期の土器に伴って出土する例が知られる縄文時代晩期の土器である。(1)(2)共に深鉢形土器の破片と思われる。(1)は砂粒を多量に含む暗褐色の胎土をもち、断面三角形の突帯を一条貼りつける。突帯にはレンズ状の刻み目がつけられる。体部外面は荒く削られ、内面は丁寧になでる。(2)は口唇部直下に突帯を一条貼りつける。内外面ともに丁寧ななで調整を行なうものである。



第123図　突帯文土器

石器（第124図、図版68図）

凹石、磨石等の礫石器が混入している。全般的に厚みのある楕円形の河原石を素材として選択している。石材は全て和泉砂岩と思われる。使用面における制限のためか、重量、大きさ、石材等共通することが多い上、二つ以上の機能をもつ。いずれも使用頻度は高く敲打痕は連続的使用痕が認めら

れる。

(1)〜(4)は一つの機能で使用した礫石器を図化したものである。

(1)は片面にのみ敲打痕の残る凹石である。河原石の凸部分を使用している。

(2)両面に敲打痕を残す凹石である。二次的に焼成を受けたためか石器全体がやや変色しヒビが入っている。

(3)は、両面、及び両断面に連続した敲打痕が残り使用頻度の高さを物語っている。他の凹石に比べやや小ぶりで軽量である。

(4)は片面のみ磨石として使用しており回転して使用した痕跡が残っている。

(5)〜(8)は二面以上使用し、かつ複数の機能を同時に求めているものである。

(5)は片面を磨石として使用し、石器の長軸の断面に敲打痕を残す。叩き石として使用された可能性がある。

(6)は片面を磨石として使用しつつ、同じ面に敲打痕を残す。

(7)両面を磨石として使用し、その片面に敲打痕を残す。

(8)は両面を磨石とし、両面と断面に敲打痕を残す。使用頻度は極めて高いものである。

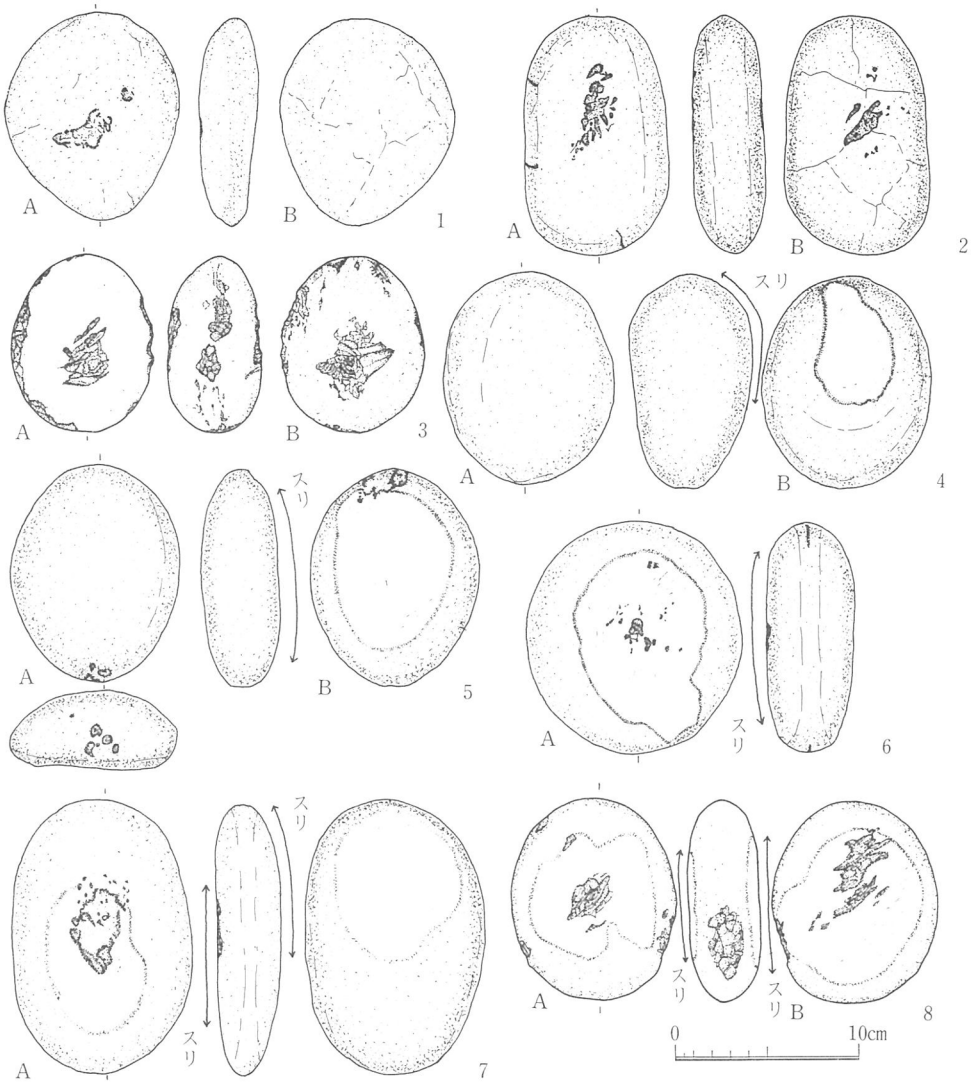
法量と重量は第124図に示す通りである。

4．小結

横山谷で確認されている弥生時代の遺跡は今回の仏並遺跡の他に、横山遺跡（和泉市下宮町）、福瀬東遺跡（和泉市福瀬町）が知られている（第125図）。3遺跡ともに槇尾川によって開折された中位段丘面の上面に位置している。いずれも確実な弥生時代の遺構は伴っておらず従来から弥生時代中期から後期にかけての散布地という認識にとどまっていた。このことは中世の大規模な土地開発によって横山谷一帯の弥生時代の遺構面が削平されたことをも示している。

今回の調査において細片ではあるが弥生時代前期の壷形土器や鉢形土器が存在するとともに、近畿地方の弥生時代前期に伴って出土例が幾つか認められる突帯文土器が存在することが明らかになった。ここでは数的、質的にとぼしい資料ではあるが、横山谷の弥生時代は前期にさかのぼる可能性があることを示唆しておくにとどめたい。

さらに弥生時代中期には、和泉地方の特徴をもつ土器の他に、河内地方の特徴をもつ土

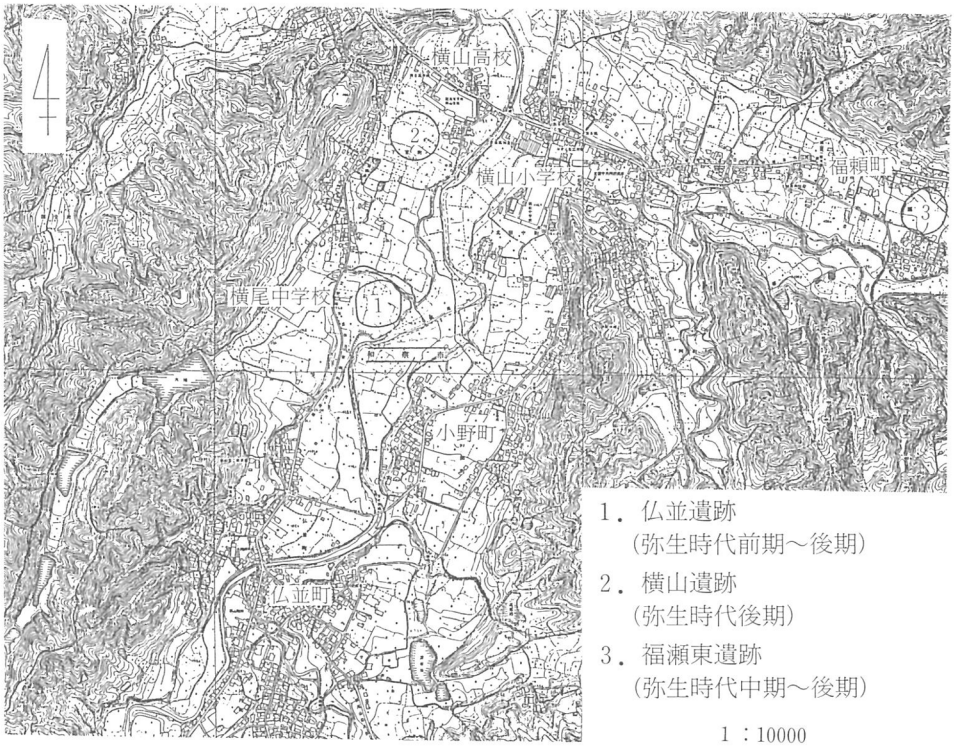


	種別	出土地区	長さ(cm)	幅 (cm)	長さ(cm)	重　量	材　質	敲打痕	スリ面
1	凹石	G20NR	11.3	9.5	3.2	510	砂岩	A	×
2	凹石	G20ON	13.0	7.9	3.7	707	〃	A、B	×
3	凹石	G20QM	9.6	7.7	5.1	584	〃	A、B断	×
4	磨石	G20QM	11.6	9.2	6.2	1,070	〃	×	B面
5	凹石	G20NR	11.8	9.1	4.2	700	〃	B、断	B面
6	凹石	G20NS	12.7	11.8	4.9	1,115	〃	A	A面
7	凹石	G20MA	14.8	9.8	3.4	950	〃	A	A面、B面
8	凹石	G20NR	11.0	8.9	3.9	650	〃	A、B断	A面、B面

第124図　第5層包含層内出土石器

器が若干含まれるようになり、仏並遺跡が、弥生時代中期において両地域に向けて展開していたことを示している。わずかではあるが後期の遺物も含まれていることより、仏並遺跡の周囲、中位段丘面上において、弥生時代は各時期開発が続いていたことが解明されたといえよう。今後付近に弥生時代の遺跡が発見される可能性は極めて高いと思われる。

（服部みどり）



第125図　横山谷の弥生時代遺跡

第4節　中世の遺構と遺物

今回の発掘調査地点は、西から東へ、ゆるやかに傾斜する中位段丘下面に位置する。中世の遺構は、調査区内東部東側付近で多数検出した。遺構面のレベル〔T.P〕は、121.90m前後である。遺構の掘削深度は、いずれも著しく浅く、近、現代の整地等によって削平されたと思われる。東部において検出した計43個の土壙は、ほとんど東端部に密集する。

各土壙の形態は、円形、楕円形、方形である。出土遺物としては、土壙内より土師質土器（土釜・皿）、瓦質土器（土釜・碗）片を出土したが、いずれも細片である。なお、著しく浅く、遺物の出土しなかった土壙は全容が不詳のため割愛した。

4―OO　（第135・136図、図版69）

土壙4はG―20KL、LY、H―16KA、LA地区にまたがって検出した。土壙8の東側に位置する。約⅓は調査区外であるが、径約3.8mの不整な円形を呈する土壙と推定される。深さ0.5m内外。出土遺物としては、土師質羽釜、土師皿、瓦質羽釜などが出土した（第126図1～6）。

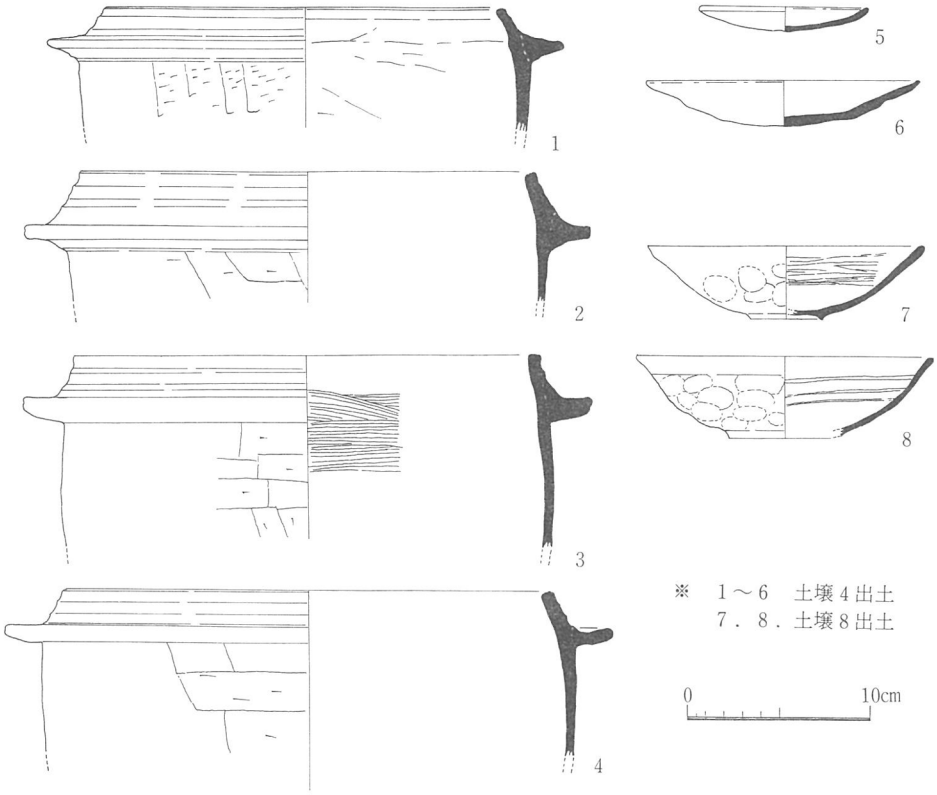
（1・2）は土師質羽釜で、復元口径21.6cm、24.8cm、同鍔径28.2cm、31.0cm。（3・4）は瓦質羽釜で、復元口径25.4cm、26.4cm。同鍔径31.1cm、33.1cm。(5)は土師小皿で、口径9.2cm、器高1.3cm。(6)は土師皿で、口径15.0cm、器高2.5cmである。

5―OO　（第135・136図）

土壙5はG―20JY、KY地区にまたがって検出した。土壙6の南側に位置し、一辺が約1.7mの正方形に近い土壙である。深さ0.1m内外。出土遺物としては、土師器、瓦器片を数点出土したが、いずれも小片のため全容は不詳。

6―OO　（第135・136図）

土壙6はG―20JX、JY地区にまたがって検出した。土壙5の西側に位置し、約½はトレンチによって切られる。径約1.5m前後の不整な円形を呈する土壙と推定される。深さ0.2m内外。出土遺物としては、土師器、瓦器片を数点出土したが、いずれも小片のため全容は不詳。



第126図　土壙4・8出土遺物（¼）

8—OO　（第135・136図、図版69）

土壙8はG—20KX、KY地区にまたがって検出した。土壙6の南側に位置し、径約2.0m、深さ0.12m内外の円形土壙。出土遺物としては、土師器片、瓦器碗（第126図7・8）などが出土した。土師器は、小細片が多く、図化できるものはなかった。（7・8）は瓦器碗で、内面底に平行状暗文が施される。外面に指圧痕が明瞭に残り、断面三角形の高台が貼り付けられている。復元口径15.1cm、16.1cm。器高4.1cm、4.5cmである。

9—OO　（第135・136図）

土壙9はG—20KY地区において検出した。土壙4の西側に位置し、径0.65m、深さ0.15m内外の円形土壙。出土遺物としては、土師器、瓦器片を数点出土したが、いずれも小片のため全容は不詳。

10—OO　（第135・136図）

土壙10はG—20 KY 地区において検出した。土壙 4 の西側に位置し、径0.25m、深さ0.12m 内外の円形土壙。遺物の出土なし。

11—OO　（第135・136図）

土壙11はG—20 LY 地区において検出した。土壙 4 の南側に位置し、径0.45m、深さ0.13m 内外の円形土壙。遺物の出土なし。

12—OO　（第135・136図）

土壙12はG—20 LY 地区において検出した。土壙11の東側に位置し、径約0.4m、深さ0.21m 内外の円形土壙。遺物の出土なし。

13—OO　（第135・136図）

土壙13はG—20LY 地区において検出した。土壙11の南側に位置し、長径約0.7m、短径約0.4m を測る不整な楕円形土壙。深さ0.12m 内外。遺物の出土なし。

14—OO　（第135・136図）

土壙14はG—20 LX 地区において検出した。土壙13の西側に位置し、径約0.5m、深さ0.12m 内外の円形土壙。遺物の出土なし。

16—OO　（第135・136図）

土壙16はG—20 LW 地区において検出した。土壙18の北側に位置し、径約0.6m、深さ0.1 m 内外の円形土壙。遺物の出土なし。

17—OO　（第135・136図）

土壙17はG—20 LW、LX 地区にまたがって検出した。 土壙18の北側に位置し、 径約0.7 m、深さ0.15m 内外の円形土壙。遺物の出土なし。

18—OO　（第135・136図）

土壙18はG—20 LW 地区において検出した。土壙16、17の南側に位置し、径約1.4m、深

さ0.13m 内外の円形土壙。遺物の出土なし。

20—OO　（第135・136図）

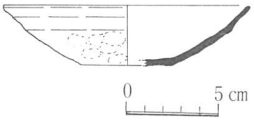
土壙20はG—20 MX 地区において検出した。土壙21の北側に接するように位置し、径約0.25m、深さ0.13m 内外の円形土壙。遺物の出土なし。

21—OO　（第135・136図）

土壙21はG—20 MX 地区において検出した。土壙25の北側に位置し、径約0.4m、深さ0.1 m 内外の円形土壙。遺物の出土なし。

22—OO　（第135・136図）

土壙22はG—20 MY 地区において検出した。土壙25の東側に位置し、長径約0.7m、短径約0.46m を測る不整な楕円形の土壙である。深さ0.13m 内外。出土遺物としては、土師器、瓦器片などが出土した（第127図）。土師器は、小細片が多く、図化できるものはなかった。第127図は瓦器碗で、外面に指圧痕が明瞭に残る。内面調査は不明。高台は、粘土紐を張り付け、偏平に引き伸ばしたような状態の高台で、復元口径約13.5cm、器高3.3cmである。



第127図　土壙22出土遺物（1/4）

23—OO　（第135・136図）

土壙23はG—20 MY 地区において検出した。土壙22の東側に位置し、径約0.6m、深さ0.2 m 内外の円形土壙である。出土遺物としては、瓦器片を1点出土したが、小片のため全容は不詳。

24—OO　（第135・136図）

土壙24はG—20 MY、NY 地区にまたがって検出した。土壙23の東側に位置し、約½はトレンチによって切られる。径約0.5m 前後の円形土壙と推定される。深さ0.18m 内外。出土遺物としては、土師器、陶器片を出土したが、いずれも小片のため全容は不詳。

25—OO　（第135・136図）

土壙25はG—20 MX 地区において検出した。土壙21の南側に位置し、長径約0.99m、短

径約0.6mを測る楕円形土壙である。深さ0.1m内外。出土遺物としては、土師器片を1点出土したが、小片のため全容は不詳。

26—OO　（第135・136図）

土壙26はG—20 MX地区において検出した。土壙25の西側に位置し、径約0.42m、深さ0.12m内外の円形土壙。遺物の出土なし。

28—OO　（第135・136図）

土壙28はG—20 NX、NY地区にまたがって検出した。土壙29の北側に平行するように位置し、長径約2.5m、短径約1.18mを測る不整な楕円形土壙である。深さ0.23m内外。出土遺物としては、土師器、須恵器片を出土したが、いずれも小片のため全容は不詳。

29—OO　（第135・136図）

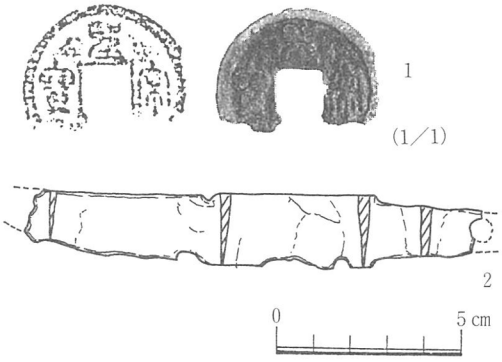
土壙29はG—20 NY、OY地区にまたがって検出した。土壙30の北側に位置し、長径約1.58m、短径約1.23mを測る不整な楕円形土壙である。深さ0.09m内外。出土遺物としては、瓦質片を1点出土したが、小片のため全容は不詳。

30—OO　（第135・136図）

土壙30はG—20 OX、OY地区において検出した。土壙29の南側に位置し、約½はトレンチによって切られる。長径約1.6mの楕円形土壙と推定される。深さ0.12m内外。遺物の出土なし。

31—OO　（第135・136図）

土壙31はG—20 NX、OX地区にまたがって検出した。土壙32の東側に位置し、長径約0.5mを測る不整な楕円形土壙。深さ0.15m内外。遺物の出土なし。



第128図　土壙32出土金属製品

32—OO　（第135・136図）

土壙32はG—20 NX地区において検

出した。土壙31の西側に位置し、長径約1.3m、短径約0.5m を測る不整な楕円形土壙である。深さ0.1m 内外。出土遺物としては、遺構検出面上部より土壙32に伴う遺物と思われる銭貨１点、刀子１点が出土した(第128図、図版69)。銭貨(1)は北宋銭の「聖宋元宝」であり、初銭年は建中靖国元年（西暦1101年）である。銭貨は下部を欠損しているが、外径約23.3㎜、内径6.5㎜、厚さ1.6㎜、重さ約1.1g を測る。刀子(2)は切っ先及び目釘穴より下部を欠損する。現存長12.5㎝。両関作りの刀子である。木質は残存しない。

33―OO　（第135・136図）

土壙33はＧ―20 NX 地区において検出した。土壙34の南側に位置し、土壙34を切った土壙。長径約0.99m、短径約0.5m を測る楕円形土壙である。深さ0.19m 内外。遺物の出土なし。

34―OO　（第135・136図）

土壙34はＧ―20 NX 地区において検出した。土壙33によって切られた土壙である。長径約1.27m、短径約0.3m を測る楕円形土壙。深さ0.18m 内外。遺物の出土なし。

35―OO　（第135・136図）

土壙35はＧ―20 NW、NX 地区にまたがって検出した。土壙36の東側に位置し、長径約0.43m、短径約0.32m を測る楕円形土壙である。深さ0.08m 内外。遺物の出土なし。

36―OO　（第135・136図）

土壙36はＧ―20 NW 地区において検出した。土壙35の西側に位置し、径約0.5m、深さ0.11m 内外の円形土壙。遺物の出土なし。

37―OO　（第135・136図）

土壙37はＧ―20 OX 地区において検出した。土壙31の南側に位置し、中央をトレンチによって切られる。長径約1.7m を測る不整な楕円形土壙である。深さ0.27m 内外。遺物の出土なし。

39—OO　（第135・136図）

土壙39はG—20 OW、OX地区にまたがって検出した。土壙41の北側に位置し、土壙41を切った土壙である。長径約2.4m、短径約1.0mを測る不整な楕円形土壙。深さ0.13m内外。出土遺物としては、土師器、瓦器片を数点出土したが、いずれも小片のため全容は不詳。

40—OO　（第135・136図）

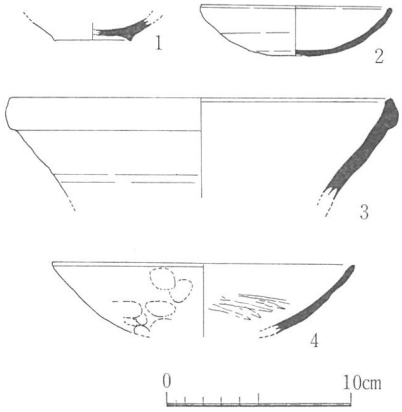
土壙40はG—20 OW地区において検出した。土壙39の南側に位置し、径約0.5m、深さ0.13m内外の円形土壙である。出土遺物としては、土師器、瓦器片を数点出土したが、いずれも小片のため全容は不詳。

41—OO　（第135・136図）

土壙41はG—20 OW地区において検出した。土壙39に切られた土壙。径約0.8m、深さ0.1 m内外の円形土壙と推定される。遺物の出土なし。

42—OO　（第135・136図、図版69）

土壙42はG—20 OW地区において検出した。土壙46の東側に位置し、約½はトレンチによって切られる。径約0.5m、深さ0.2m内外の円形土壙と推定される。出土遺物としては、土師器、瓦器、須恵質土器等が出土した。（第129図1～3）。土師器は、小細片が多く、図化できるものはなかった。(1)は瓦器碗片で口径及び器高の復元はできなかった。断面三角形の高台が貼り付けられている。(2)は瓦器碗で、口径10.3cm、器高2.7cm。(3)は須恵質鉢の口縁部で、復元口径20.7cmである。



第129図　土壙42・43出土遺物（¼）
1～3、土壙42、4、土壙43

43—OO　（第135・136図）

土壙43はG—20 KV地区において検出した。土壙16の西側に位置し、径約0.7m、深さ0.1

m 内外の不整な円形土壙である。出土遺物としては、瓦器片を出土した。(第129図４)。

(4)は瓦器碗の口縁部で、内面には暗文が粗く施され、外面には指圧痕が残る。復元口径約16.5cmである。

44—OO　(第135・136図)

土壙44はG—20 LV、MV 地区にまたがって検出した。土壙18の西側に位置し、約½をトレンチによって切られる。径約0.4m、深さ0.08m 内外の円形土壙と推定される。遺物の出土なし。

45—OO　(第135・136図)

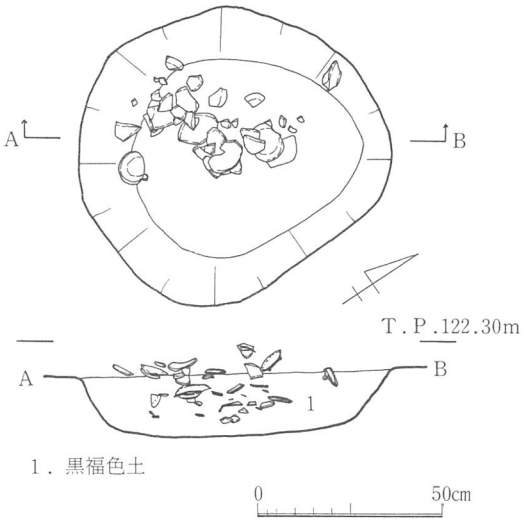
土壙45はG—20 OV 地区において検出した。土壙46の北西側に位置し、長径約1.3m、短径約0.7m を測る不整な楕円形土壙。深さ0.18m 内外。遺物の出土なし。

46—OO　(第135・136図)

土壙46はG—20 OV、PV 地区にまたがって検出した。土壙47の東南に位置し、径約1.0m、深さ0.13m 内外の不整な円形土壙。遺物の出土なし。

48—OO　(第135・136図)

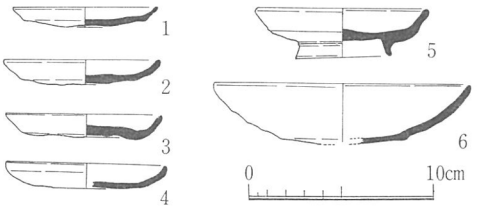
土壙48はG—20 MT 地区において検出した。土壙44の西側に位置し、長径約0.7m、短径約0.4m を測る不整な楕円形土壙。深さ0.18m 内外。遺物の出土なし。



第130図　土壙55平面、断面図

54—OO　(第135・136図)

土壙54はG—20 OQ、OR 地区にまたがって検出した。土壙55の北西に位置し、一辺が約0.8m の正方形に近い焼土壙。深さ0.12m 内外。焼土は土壙内の東、西斜面に



第131図　土壙55出土遺物（¼）

多く、底面では見られない。遺物の出土なし。

55—OO　（第130・135・136図、図版69）

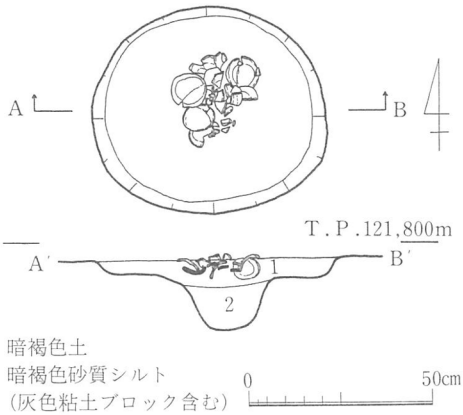
土壙55はG—20 OR、PR地区にまたがって検出した。土壙54の東南に位置し、径約0.65m、深さ0.17m内外を測る不整な円形土壙である。出土遺物としては、土師器、瓦器片を多量に出土した。土師器、瓦器共に小細片が多く、図化できるものは少数であった（第131図1～6）。

（1～4）は土師皿で復元口径8.0cm、8.7cm、8.6cm、8.9cm、器高1.1cm、1.4cm、1.3cm、1.4cm。(5)は高台付きの土師皿で、口径9.3cm、器高2.7cm、高台は口径5.3cm、高さ0.6cm。(6)は瓦器碗で、摩滅が著しいが、外面に指圧痕が微かに残る。内面調整は不明。復元口径14.0cmである。

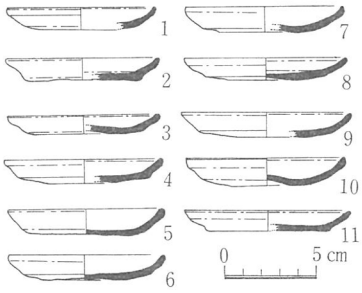
63—OO　（第132・135・136図、図版70）

土壙63はH—16 JB地区において検出した。土壙5の北東に位置し、径約0.83m、深さ0.17m内外の円形土壙である。出土遺物としては土師皿が11点出土した（第133図1～11）。

（1～11）は土師皿で、いずれも小片で出土したが、復元口径8.0～9.3cm。器高1.0～2.0cmである。



第132図　土壙63平面、断面図



第133図　土壙63出土遺物（¼）

64—OO　（第135・136図）

土壙64はG—20 LY、H—16 LA地区にまたがって検出した。土壙13の東側に位置し、約½はトレンチによって切られる。径約0.57m、深さ0.16m内外の円形土壙と推定される。遺物の出土なし。

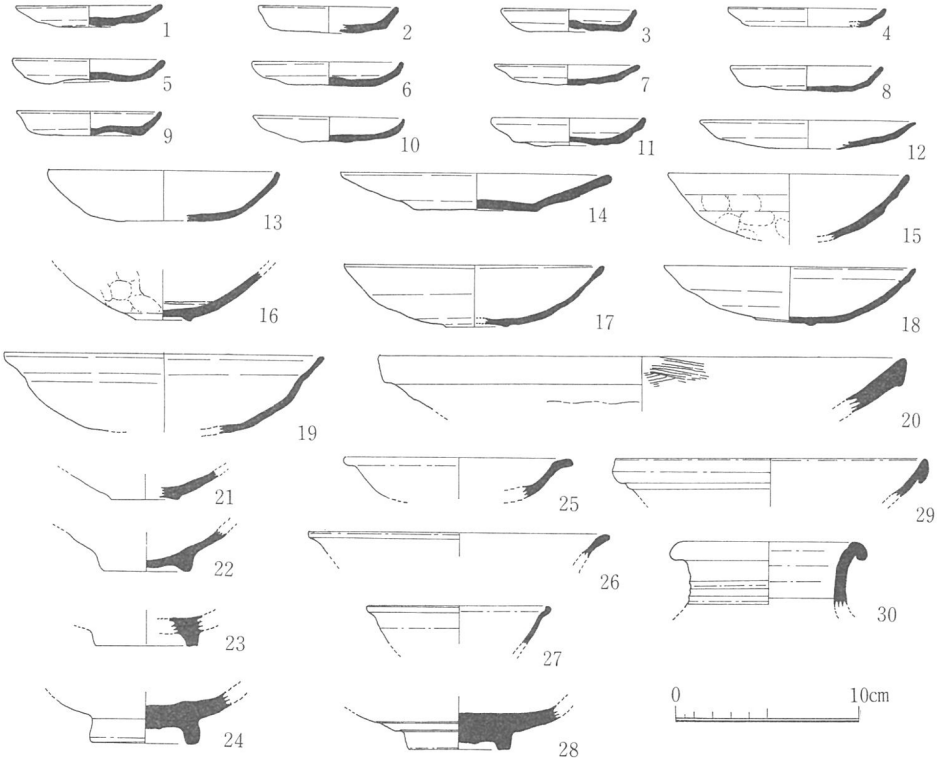
包含層出土遺物（旧耕土出土遺物）　（第134図、図版70・71）

遺物包含層は、中世遺構面上層で、調査区全域において見られた。遺物包含層は旧地形の畑地によって、西方から東方に向かって3段の段差がある。出土遺物としては、11C～14C

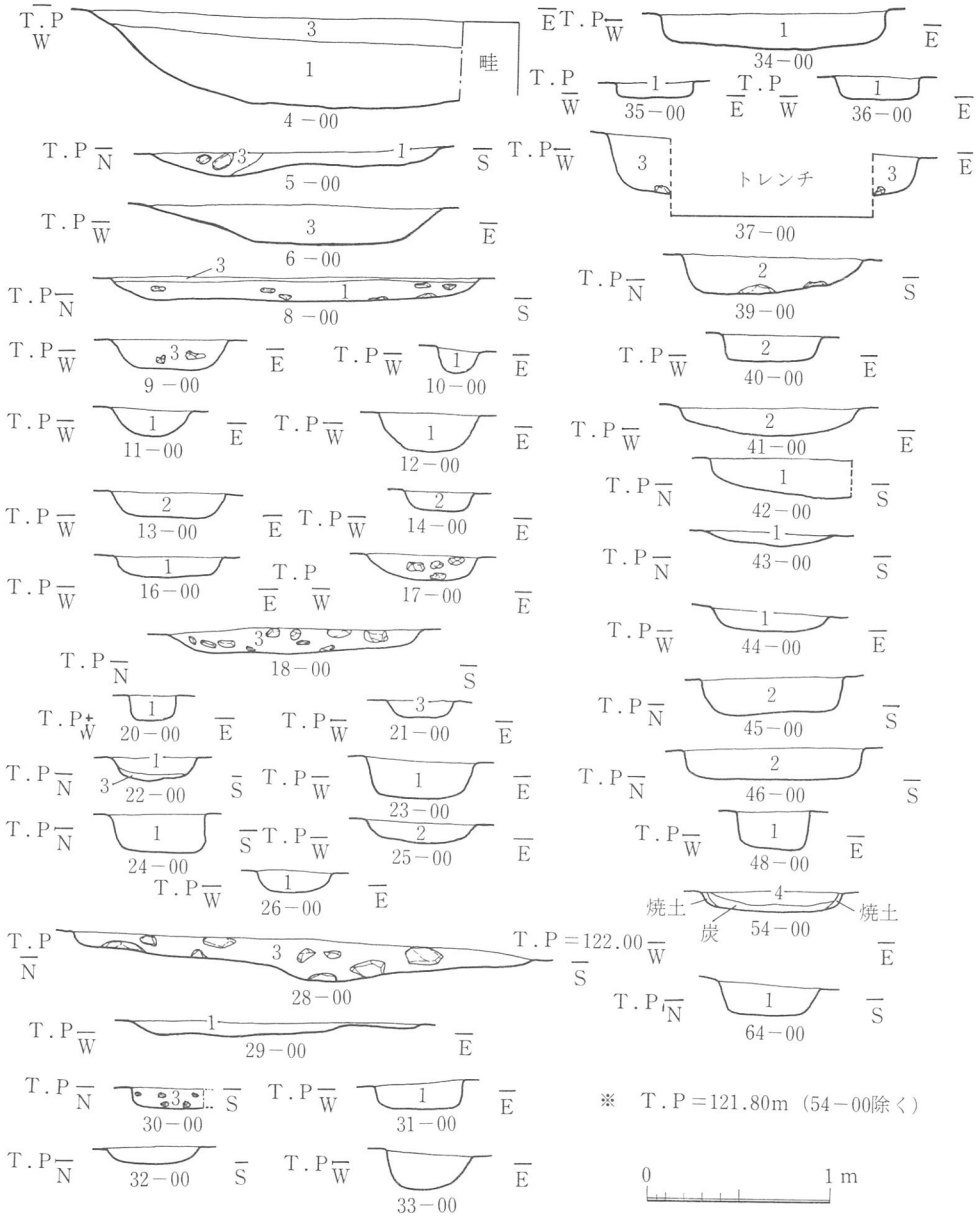
代の黒色土器碗類、B類、土師器、瓦器、青磁、白磁等が出土した。出土遺物はいずれも小片であるが、以下図示しえた遺物について述べる。

（1～11）は土師小皿で、口径7.2～8.4cm、器高1.0～1.6cm。（12～14）は土師皿で、復元口径11.8cm、12.4cm、14.8cm、器高1.6cm、2.6cm、2.0cm。（15～19）は瓦器碗である。15は復元口径6.6cmで、高台部分を欠損する。外面に指圧痕が残る。16は口縁部を欠損する。17、18は復元口径14.2cm、13.8cm、器高3.4cm、2.1cm。摩滅が著しく内面調整は不明。断面三角形の高台が貼付けられている。19は復元口径17.4cmで高台部分を欠損する。⑳は瓦質鉢で、復元口径28.6cm。（21～24）は青磁の高台で、口縁部を欠損する。21は全面に釉薬がかかる。22は底径4.7cm、高台高1.0cmで、全面に釉薬がかかる。

23は底径5.5cm、高台高0.6cmで、内面に釉薬がかかる。24は底径5.7cm、高台高1.2cm、高台以外に釉薬がかかる。（25～26）は青磁の口縁で、復元口径は12.3cm、16.2cmを測る。（27～30）は白磁である。27は復元口径9.8cm。28は底径5.5cm、高台高0.8cm。29は復元口径16.8cm。30は復元口径9.5cmである。（田中）

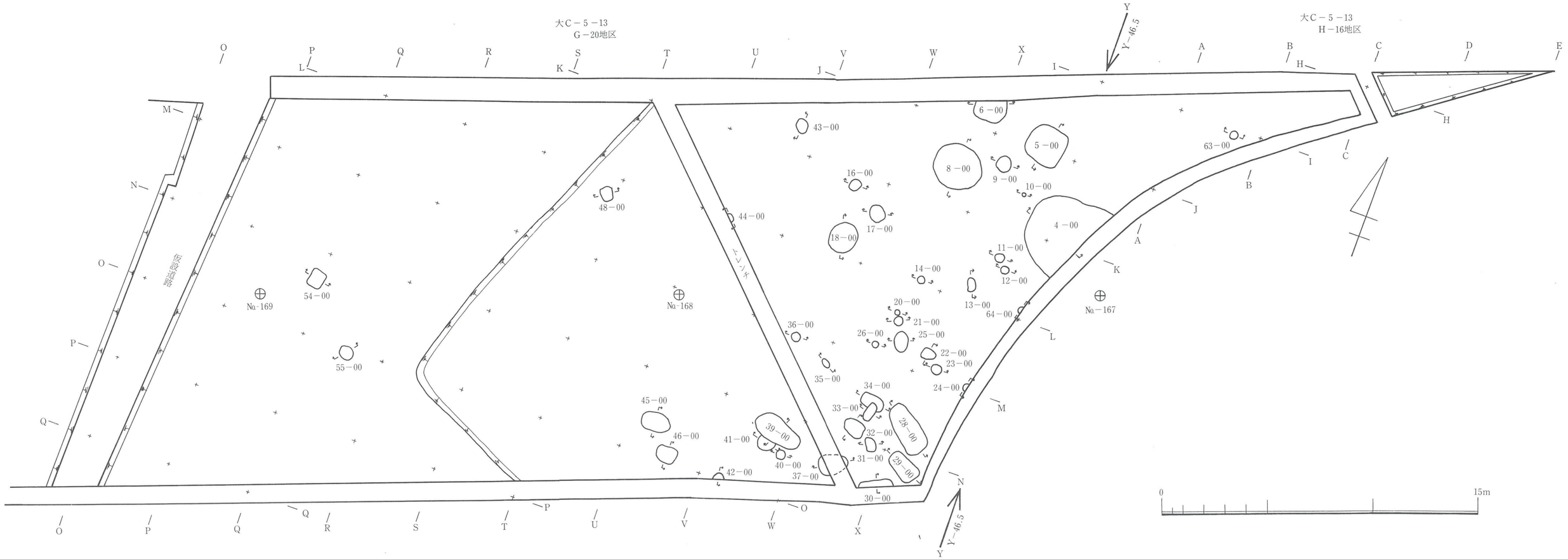


第134図　包含層出土遺物（1/4）



1．褐色土　2．黒褐色土　3．暗褐色土　4．灰褐色土

第135図　中世土壙断面図



第136図　調査地区東部遺構（中世遺構）配置概略図

第4章　ま　　と　　め

第1節　仏並遺跡の縄文土器

仏並遺跡の調査によって得られた土器資料は、縄文時代早期に遡るものから晩期に至るまでのものがあるが、早期から晩期まで連綿とつづくのではなく、土器が存在しない時期もある。しかし、出土した土器資料の中には大阪府下で初出の資料や、少数例しか存在しなかった土器群を増加させたり、また、他地域との併行関係を裏付けする等、大阪府下のみならず、近畿地方における縄文土器研究に対し寄与するところは多大であろう。にもかかわらず、今回は時間的制約があり、全ての出土土器を網羅することができていない。71―OD や包含層から出土している土器は、その大半を図化しておらず、接合しえなかった土器もまた図示せずにある。それらの土器資料は次の機会に紹介することとして、今回図示したものに限って、若干の整理をおこないたい。

この報告の中で図示したものは、遺構内出土の土器を主としている。遺構には住居址と推定されるものや土壙、土器棺墓等があるが、それぞれに含まれる土器資料に疎密が認められ、遺構出土一括資料として不安定なものも存在する。しかしそのような資料を除去した上でも、仏並遺跡の遺構より出土した資料は重要と考える。これまで近畿地方で遺構に伴って出土した土器群は少なく、包含層より出土したものが多いのが現状であった。そのため、単一時期の土器組成を求めるには、それを同一時期の各遺跡出土土器を集成し、不安な資料は除去するという手段をとらざるを得なかった。仏並遺跡出土の土器は、一つの遺構にほぼ同時期に埋ったものと判断することで、その時期の他地域との併行関係をより確実に把握できよう。

出土土器で最も遡るものとして、早期後半の繊維土器の一群がある。これには文様を施すものと施さないものが存在し、有文土器も文様の違いによって分けることができる。

a．隆帯によって文様を構成し、押引き刺突文を配するもの。

b．沈線によって文様を構成し、押引き刺突文を配するもの。

c．斜行縄文と押引き刺突文によって文様を構成するもの。

d．斜行縄文と沈線による文様を構成するもの。

e．押引き刺突文が施されるだけのもの。

f．斜行縄文を施すもの。

g．斜行縄文を羽状に施すもの。

と７種に細分できる。これら以外に内外面をナデ調整するだけの無文土器が存在している。

これらの土器の特徴として、色調が暗赤褐色を呈し、繊維を含んでいることである。また胎土内に角閃石を含むものが多い。また有文土器も器面をナデ調整している。この細分したものの中でａ類とｂ類は描かれている文様から、関東地方の早期後半の土器形式でいう、鵜ケ島台式土器に近似する。ただ鵜ケ島台式土器は内外面とも条痕調整を施すもので、条痕文土器群の中に位置づけられている。この点が鵜ケ島台式土器とは異なるところである。近畿地方での出土例としては兵庫県神鍋遺跡[1]、滋賀県磯山城遺跡[2]にみられる。他のｃ～ｇ類および無文土器は繊維土器であるという点でａ・ｂ類に併行もしくは近い時期の土器と考える。ｆ・ｇ類とした斜行縄文を施した土器は滋賀県石山貝塚の出土例に存在している[3]。82号遺構出土の繊維土器はｆ類に属する土器群で、口縁部上端には刻みを施している。器形も屈曲のないものになろう。ａ・ｂ類および無文土器は胎土内に角閃石を含まず、ｃ～ｇ類が角閃石を含む。

前期の早い時期に属する土器と考えられる土器片として、84―OO 出土土器①がある。この土器は84―OO 内に混入していたものであるが、器壁が薄く、内外面とも条痕調整を施し、横方向に押引き刺突文を数段重ねて描いている。同様の土器は滋賀県粟津遺跡[4]や福井県鳥浜貝塚[5]で出土している。仏並遺跡ではこの土器以外に125―OO から出土したものがある。その土器片には文様はないが、内外面とも条痕調整を施している。

この時期以降、中期末葉までの土器は出土しておらず、仏並遺跡では早期後半から前期初頭にかけて人々が定着し、その後、中期末葉までの間は他へ移動していたと考えられる。

中期末葉の土器は包含層からも多く出土しているが、土器棺・住居址・土壙等からも出土している。その中で最も古い土器として、393―OU で土器棺として使われていた土器であろう（巻頭図版３）。その土器は口縁部文様帯と胴部文様帯との区別が明瞭で、口縁部の区画文内の矢羽状短沈線や胴部の区画内に縄文を充填する点など、京都府北白川追分町遺跡出土の北白川Ｃ式の２期もしくは３期の土器に類似する[6]。この他、包含層内より出土した土器に同時期と考えられるものがある。

この土器よりやや退化した土器群を出土する遺構として、354―OO がある。この遺構出土の土器には口縁部文様帯と胴部文様帯の区別が明瞭なものとそうでないものが存在する。区別が明瞭なものでも393―OU 出土の土器棺に使用されていたものと比較すると、段が小

さくなっている。また胴部文様も、縦の区画にしばられることなく、面的に広がり縄文だけのもの、沈線の区画に規制されず、縄文を施すもの、上開きの連弧文を数段重ね、その上から縄文を施すものなど、縦割りの区画を無視するようになる。また、共併遺物の中に後期的な磨消し縄文をもつ土器も散見される。このようにこの遺構から出土した土器は中期的な色彩を強く残しながら、文様が拡散しはじめており、393—OU 出土の土器棺よりは後出の土器群と考える。これらは個々の文様を観察すると中期的な特徴をもつが、それよりもさらに退化した文様をもつ土器群も存在する。405・195・196・247—OO より出土した土器群である。

口縁部文様帯と胴部文様帯との区別は未だ残存しているが、その境界は小さな段であったり突帯状になっていたり、それらもなく文様がそれぞれ独立するだけのものである。

405—OO 出土の有文土器は口縁部に同心円文や多重化した区画文をもったり、段で胴部と区切ったりするが、胴部文様は幅の狭い縄文帯を縦位に施すものが多くなる。354—OD 出土の土器と近似する文様も存在しつつ縄文を帯状施文する土器が多くなるという点から 354—OD 出土の土器群より後出の土器群と判断した。195・196—OO 出土の土器は段や突帯等による境界はなく、沈線文による口縁部文様帯、垂下する胴部文様帯が描かれるものである。口縁部文様帯は一条の沈線で区切り、中には沈線による区画文や円形文が描かれる。縄文は施さず、簡略されているのが看取できる。胴部文様帯も、口縁部の文様が集約する部分にのみ描かれるもので、他の文様が省略されている。247—OO 出土の土器群は口縁部と胴部を段や突帯によって区切るが、口縁部文様帯は405—OO 出土土器のそれよりさらに間延びし、区画文内の文様は省略され、わずかに円形の刺突文があるものがみられる程度である。胴部文様帯は195・196—OO 出土にみられた垂下する文様帯が横にひろがり、面的な構成をもちはじめている。また247—OO 出土土器の中には、後期初頭の磨消し縄文手法をもつ中津式土器が含まれている。この土器をもって他の土器を後期の中津式土器の範疇に含むことも可能であるが、口縁部上端面に縄文を施すものが存在することや、磨消し縄文手法が未だ完全に成立しえていないという点から、中期最終末の一時期で、後期への過渡的な段階にあると判断した。これらと同様の文様構成をもつ土器として、京都府平遺跡出土の平式土器[7]や愛知県林ノ峰遺跡G層出土の林ノ峰2式[8]がある。

このように中期に属する土器は各遺構ごとに時期差が認められ、393—OU 出土土器→354—OD 出土土器→405—OO 出土土器→195・196・247—OO 出土土器という文様変化が追える。

後期に属する土器としては前半のものが多く、後半のものは少ない。遺構から出土する土器も前半のものがほとんどである。しかし後期初頭に位置づけられる中津式土器の古相と考えられる土器は遺構内よりまとまって出土しておらず、包含層内より少数出土するのみである。中津式の新相と考えられる土器は120—OO内より出土している。それらは二段に分かれた磨消し縄文帯をもつ深鉢や口縁部が外方に屈曲し、球形の胴部をもつ鉢・口縁部が内傾する浅鉢などである。いずれも磨消し縄文帯の幅が狭くなり、同一文様を左右に連続させて器面を埋めるものである。この遺構内出土土器において、中津式土器の器形の中に口縁部が外方に開き、頸部が屈曲し、胴部が丸くなるという器形が出現している。このような器形は中津式土器の中においては珍らしく、後出する要素が認められる。またこれらの土器と共伴した、頸部に橋状突起をもつ土器も、120—OO出土の中津式土器の併行関係を推定する資料になりうる。橋状突起をもつことで関東地方の堀之内Ⅰ式土器に近いものとも考えられるが、粘土紐による渦状の隆帯文は堀之内Ⅰ式土器より遡りうる文様とも考えられる。他の類例を待ちたい。120—OO出土土器の次に来る土器群として84・87—OO出土土器がある。これらから出土した土器は口頸部が外反し、胴部が球形の深鉢で、口縁部上端面を拡張させ、そこに文様を描く。胴部には3条単位の幅の狭い沈線文帯の上に縄文を施すもので、堺市四ツ池遺跡出土の四ツ池型土器の内容に近似する。これらの遺構の中からは瀬戸内地方の福田KⅡ式土器に類似するものも含まれ、これらの土器が、中津式土器より新しく、また北白川上層式1期の土器に先行する土器群として把握しうるものであると考える。これと併行すると考える土器は包含層内よりも多く出土している。口縁部上端面に太い沈線をめぐらし、その外側に刻みを施すものがそうである。

84・87—ＯＯ出土土器の次に編年しうる土器群として71—OD出土の土器群がある。この遺構から出土する土器は多量で、全てを図示していない。深鉢の文様構成も豊富で、磨消し縄文、多条沈線と縄文・沈線文・条線文・縄文・無文と多岐にわたる。この中には84・87—OO出土土器に類似するものも含まれるが、主として北白川上層式1期の土器群の内容に近い[(9)]。その中に他地域との併行関係を推測しうるものが含まれている。関東地方の堀之内Ⅰ式土器に近い文様をもつものや瀬戸内地方の福田KⅡ式土器に類似するものなどがある。これらの他に図示していないが九州地方の鐘ケ崎式土器に似るものも出土している。これらのことから71—OD出土の土器群は関東地方の堀之内Ⅰ式土器、瀬戸内地方の福田KⅡ式土器・九州地方の鐘ケ崎式土器・近畿地方では北白川上層式1期の土器が混りあった状況にあり、やや時期幅をもってはいるが、北白川上層式1期の中に含

むことはできると判断した。この時期の遺構は多く検出され、遺物の量も多く、他に374—OD出土土器や土壙出土の土器が多い。包含層からも多く出土しており、この時期の土器の資料は豊富である。この次の土器型式を出土する遺構として193—ODがある。この遺構から出土した土器は北白川上層式2期の土器群である。文様は71—OD出土土器よりも少なくなり、文様帯の幅も狭くなる。また、関東地方の堀之内II式土器の影響とみられる突帯文や東大阪市縄手遺跡出土の後期3類[10]に類似する渦状縄文と三角形状縄文が入り組んだものなどがある。この時期になると遺構の数も少なくなり、遺物の量も少なくなる。これらの土器の次にくるものとしては、まとまった遺物はなく、包含層内より少類出土する程度である。しかし、縄文帯が幅狭くなり、横位に描かれるものや、沈線を数条重ね、「8」字状沈線でつなぐものや沈線内に刺突をするものなど北白川上層式3期の特徴をもつものが存在しており、仏並遺跡でもこの時期までは生活が営まれていたのであろう。この後、縄文土器の出土は途断え、後期後半の元住吉山II式もしくは宮滝式と思われる土器片が1片出土するだけである。晩期では最終末の突帯文土器が数片出土しているにすぎない。仏並遺跡ではその集落の営なみは縄文時代中期末から後期前半にかけてが全盛期であったと考えられる。

以上早期から後期前半にかけての土器群を表にすると下記のようになる。遺構より出土しなかったものは包含層出土の遺物を対応させた。

これをまとめるにあたって多くの先輩諸氏に御教示を得た。末筆ながら感謝の意を表します。色々の助言を得たにもかかわらず、そのような言葉を生かせなかったこと反省しています。

---

(1) 奈良大学助教授、泉拓良氏の御教示による。泉氏は仏並遺跡出土の縄文土器に関して多大な御教示・御助言を下さった。記して深謝する次第である。

(2) 『磯山城遺跡』米原町教育委員会　1986

(3) 『石山貝塚』平安学園考古学クラブ　1956

(4) 泉拓良　「西日本縄文文化研究会　1984年　9月定例会発表主旨」1984

(5) 網谷克彦「近畿地方の土器——福井県鳥浜貝塚の資料——」第2回縄文研究会松江大会発表資料　1985

(6) 泉拓良・家根祥多「北白川追分町遺跡出土の縄文土器」『京都大学埋蔵文化財調査報告III——北白川追分町縄文遺跡の調査——』　1985

(7) 堅田直『平遺跡』帝塚山大学考古学研究室　1966

(8) 山下勝年『林ノ峰貝塚I』西知多町教育委員会　1983

(9) 泉拓良「近畿地方の土器」『縄文文化の研究4』雄山閣　1981

(10) 原田修『縄手遺跡1』縄手遺跡調査会　1971

仏並遺跡出土の土器型式

時　期	類　別	特　　徴	出土遺構
縄文早期末～前期初	1　類	隆帯や沈線によって文様を構成し、押引き刺突文を配すもの（鵜ヶ島台式土器）	包含層
	2　類	斜行縄文と押引き刺突文の土器	包含層
	3　類	斜行縄文と沈線文の土器	包含層
	4　類	斜行縄文の土器	82—OO
縄文前期	1　類	条痕文の上に「D」字押引き文をもつ土器	
縄文中期	1　類	口縁部と胴部を段によって区別し、口縁部文様帯には方形区画と矢羽状短沈線文を描き、胴部には垂下沈線と垂下縄文で文様を構成する。	393—OO
	2　類	口縁部と胴部の区画が沈線や小さな段になり、口縁部の文様も縄文や沈線で描く。胴部文様は沈線文帯と縄文帯の縦区画がなくなり、面的に広がる。	354—OD
	3　類	口縁部と胴部の境界は未だ残るが、2類より小さくなる。口縁部文様帯は同心円文や多重化した区画文をつくる。胴部文様帯に垂下する幅の狭い縄文帯をつくるものが多い。	405—OO
	4　類	口縁部文様帯と胴部文様帯は未だ区別されるが、それぞれが簡略化し、口縁部文様帯は区画だけになり、胴部文様帯は沈線文による構成で、口縁部文様の集約部下に描かれるだけになり、それが面的なひろがりをもつ。	195—OO 196—OO 247—OO

時　期	類　別	特　　徴	出土遺構
縄文後期	1　類	磨消し縄文で器面を飾る土器群(中津式土器)	包 含 層
	2　類	磨消し縄文帯が帯状化し、単一文様のくりかえしによる文様構式になる、器形も多様化する。	120—OO
	3　類	口頸部が外反し、球形の胴部をもつ。口縁部上端は拡張し、そこに沈線をめぐらす。胴部には三条単位の沈線文の上から縄文を施す。福田KII式土器が共伴する。	84—OO 87—OO
	4　類	北白川上層式1期の土器が主体であるが、関東地方の堀之内I式土器、瀬戸内地方の福田KII式土器などの影響を受けたものもみられる。	71—OD
	5　類	北白川上層式2期の土器を主体とする。関東地方の堀之内II式土器の影響を受けたものもみられる。	193—OD
	6　類	北白川上層式3期の土器を主体とする。関東地方の加曽利BI式土器の影響を受けたものもみられる。	包 含 層
	7　類	凹線状の太い沈線を平行させるもの。(元住吉山II式又は宮滝式土器)	包 含 層
縄文晩期	1　類	口縁部と肩部とに刻み目突帯をめぐらす。(船橋式又は長原式土器)	包 含 層

第2節　お　わ　り　に

今回の調査により縄文時代中期末～後期前半の集落の一部を検出し、多量の遺物が出土した。遺構は明確でないが縄文時代早期末～前期初頭の遺物もある。また上層では中世の土壙群があり、墳墓と考えられた。同時期の集落が付近に存在することが予想されるが今回は検出できなかった。包含層からは弥生時代の土器・石器も出土した。

縄文時代早期末～前期初頭の土器が若干出土した。82―ＯＯはこの時期の遺構である可能性がある。繊維混入の胎土をもつ条痕文土器が20数点出土している。しかし１点の後期とみられる土器があり、遺構の時期は後期とみるべきかもしれない。また84―ＯＯからは後期の土器に混じって早期末～前期初頭とみられる土器片が１点出土した。その後中期末まで人間活動の痕跡はとだえる。

中期末～後期前半には集落が営まれる。この時期の遺構面にはゆるい起伏があり、３個所の微高地がある。そのうち最初に居住がはじまるのは中央微高地である。中期末の遺構は中央微高地及びその周辺に限られ、竪穴住居跡１棟（354―OD)、土器棺墓１基（393―OU)、その他数基の土壙がある。

後期初頭～中津式の時期になると、東・西の微高地にも遺構が出現する。この時期の竪穴住居跡は検出していない。西微高地には土器棺墓（450―OU）がある。次の福田ＫＩＩ式も同様であるが遺構の数は少ない。

北白川上層式１期は遺構の数が最も多い。中央微高地には竪穴住居跡(374―OD)、土器棺墓（393―OU）その他の土壙がある。この微高地の中央部は中期末以来墓域であったようであるが、この時期から居住域になっている。東微高地でも竪穴住居跡（71―OD）があり、10数基の土壙がある。西微高地でも数個の土壙が検出された。

北白川上層式２～３期になると東・西微高地の遺構はなくなり、再び中央微高地のみに遺構がみられるようになる。竪穴住居跡（193―OD）は北白川上層式２期の土器が出土する。他に北白川上層式３期の土壙２基がある。

この他土器が出土せず時期がはっきりしない土壙が多数ある。むしろ土器が出土したものの方が少ないのであるが大勢に変わりはあるまい。いずれにしても、北白川上層式１期の時期に集落の最盛期があり、以後縮小傾向をたどり、北白川上層式３期を最後に集落は廃絶する。

中期末の竪穴住居跡（354―OD）は隅丸長方形で４本の主柱穴をもち、長軸上に２個の

炉跡を持つ。北白川上層式1期の2棟の竪穴（71—OD、374—OD）は平面形は隅丸長方形で、柱穴は明確ではないが多数化しているようである。ともに住居跡内に埋甕を持つ。374—ODには保存状態良好な炉跡があった。北白川上層式2期の竪穴住居跡（193—OD）になると、平面形は楕円形になり柱穴は周壁沿いに多数みられるようになる。規模も若干小形化している。以上のような住居跡形態の変化は、かつて指摘されていることであるが、改めて確認されたことになる。

縄文時代の集落の発掘例としては、大阪府下では東大阪市縄手遺跡[1]や岬町淡輪遺跡[2]などがあるが、集落形態が十分明らかにされたとは言い難い。近畿地方全域で考えても同様である。その点、今回の調査でも集落の全域を調査したわけではないが、今後の集落研究に重要な資料となることは疑いない。この報告では時間の都合により包含層出土遺物のほとんどは割愛せざるを得なかったし、遺構・遺物の十分な検討も行なうことができず、事実報告を行なうのみで終らざるを得なかった。今後に期したい。

弥生時代については、前期末から後期に至る各時期の土器と打製石器数点が出土した。今回の調査では遺構は検出されなかったが、付近に弥生時代の集落が存在していた可能性は高い。その性格は平野部の集落とは異るものであろうことが当然予想できるが、現状では不明である。また縄文時代晩期終末の突帯文土器が出土したが、それが今回出土したⅠ様式新段階の土器に伴うのか、あるいは前期のもっと古い土器が存在するのかについても、今回の調査の資料のみでは判断することは困難である。

中世の土壙群は調査区の東端に集中している。合計43基あって、その形態は円形・楕円形・方形等があり、その個々の性格を明らかにすることはできないが、トレンチ東南端付近で検出された楕円形ないし隅丸長方形のものは土壙墓の可能性が考えられる。これらの土壙は13世紀を中心とする時期のものと考えられる。中世において横山谷一帯は槇尾寺領の荘園となり、横山荘と呼ばれていた。槇尾寺が横山荘一円を不輸権を持つ荘園として領有するのは、鎌倉時代の暦仁元年（1238）であり、その後13世紀末から14世紀初頭頃までは槇尾寺の全盛期であった。南北朝の動乱から室町・戦国期にかけて槇尾寺は没落への途をたどる。この時期の文献史料としては槇尾寺関係のものや南北朝動乱の合戦記事が主なものであり、横山谷の集落の実態は不明のままである。[3]その点、今回の調査では建物跡の検出にまでは至らなかったが、槇尾寺の全盛期とかさなる時期の遺構が検出されたのは興味深いことであり、今後の調査の進展が期待される。

(1)　『縄手遺跡１』縄手遺跡調査会　1971『縄手遺跡２』東大阪市遺跡保護調査会　1976

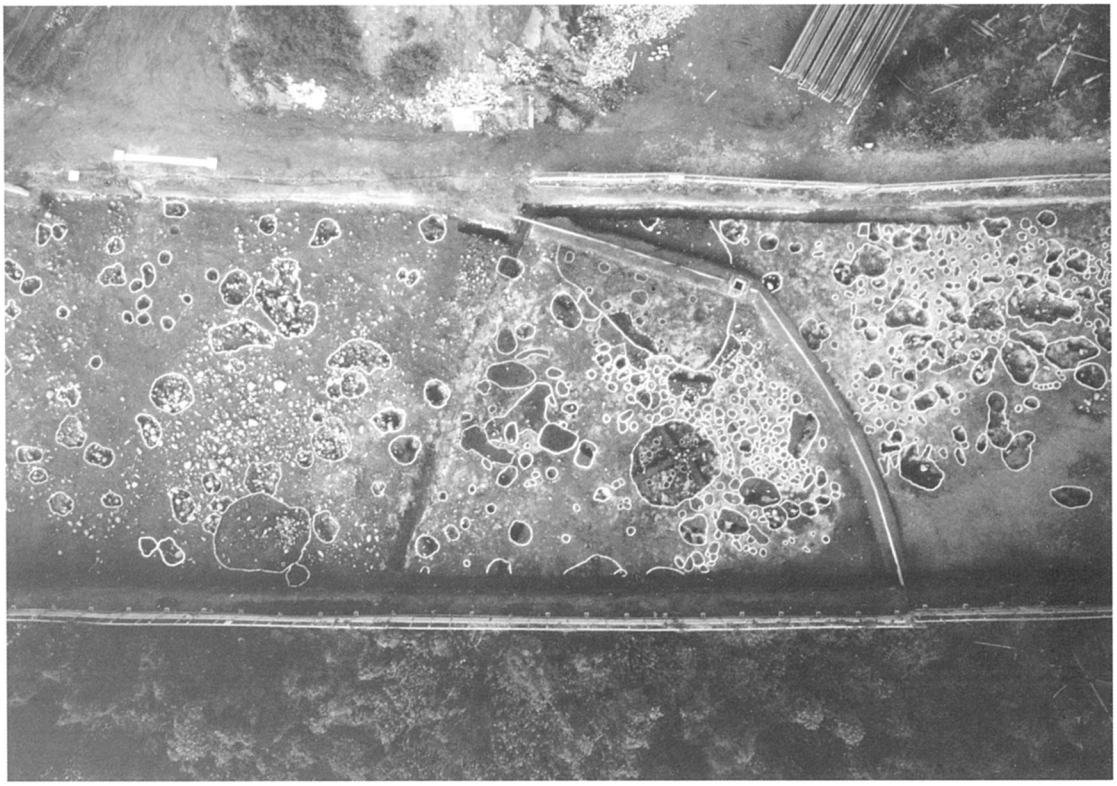
(2)　『淡輪遺跡発掘調査概要III』大阪府教育委員会　1981

(3)　『和泉横山谷の民俗・１』大阪府教育委員会　1971

仏並遺跡周辺空中写真

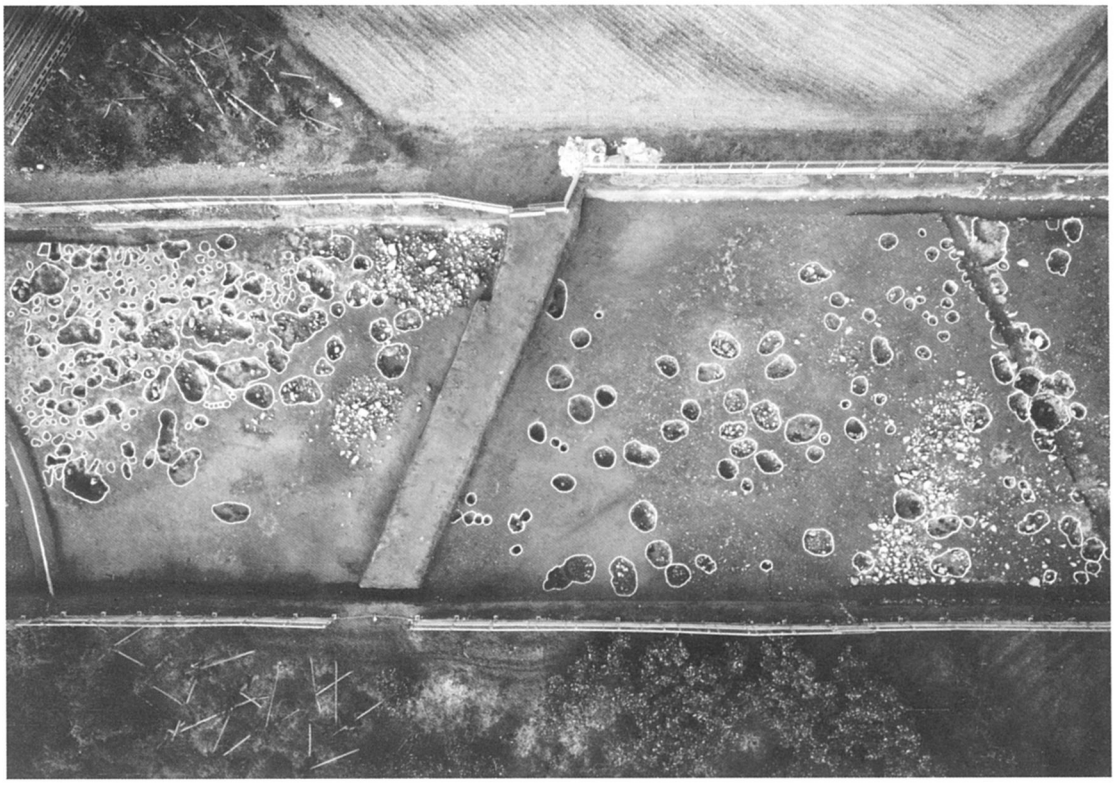
図版二

西微高地周辺空中写真

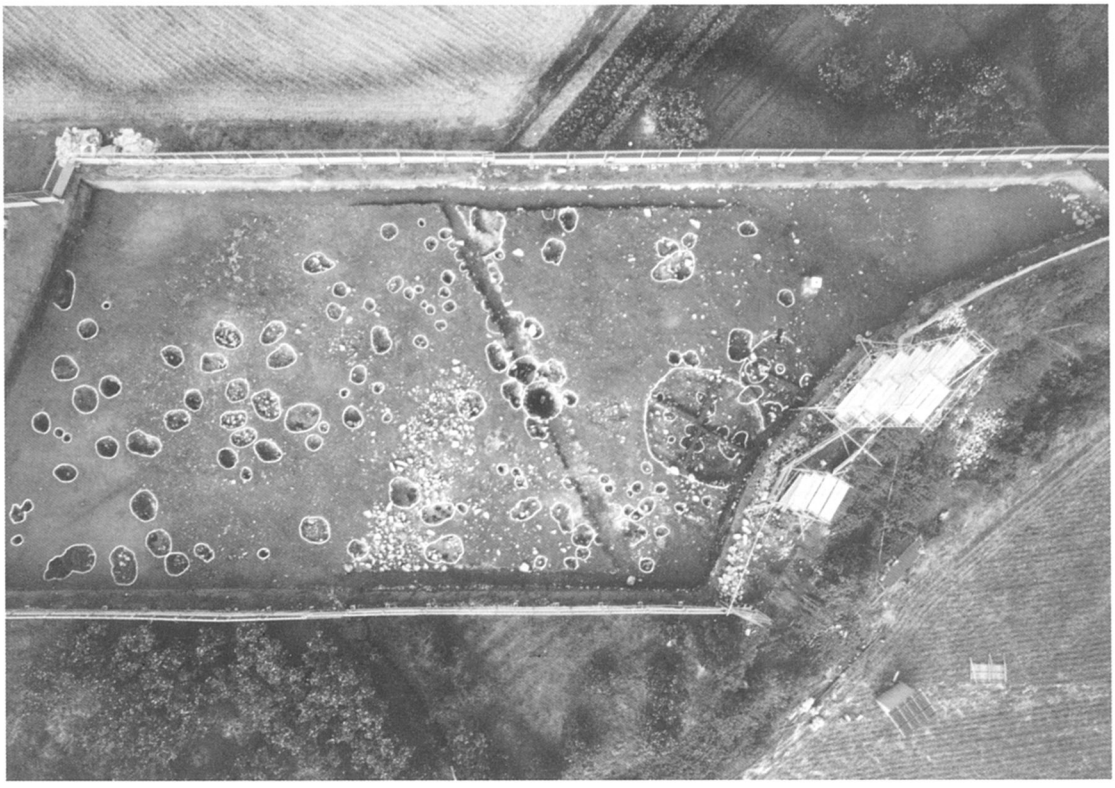


中央微高地周辺空中写真

図版三

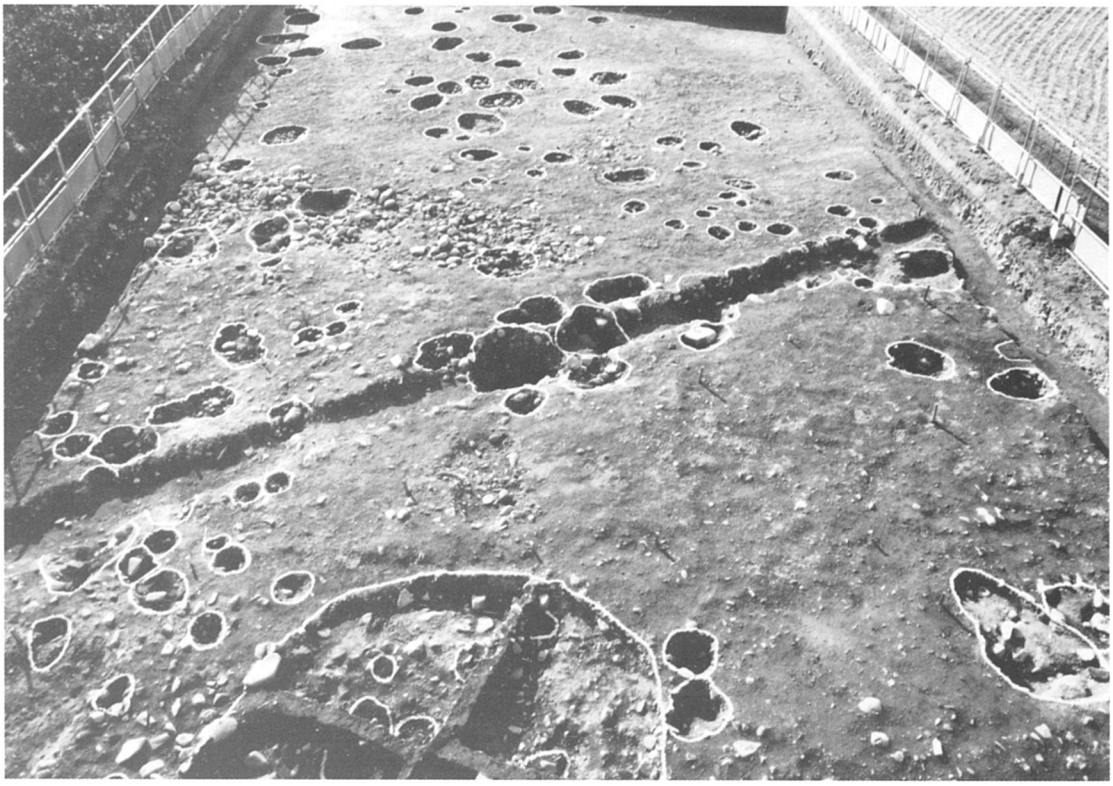


中央微高地周辺空中写真

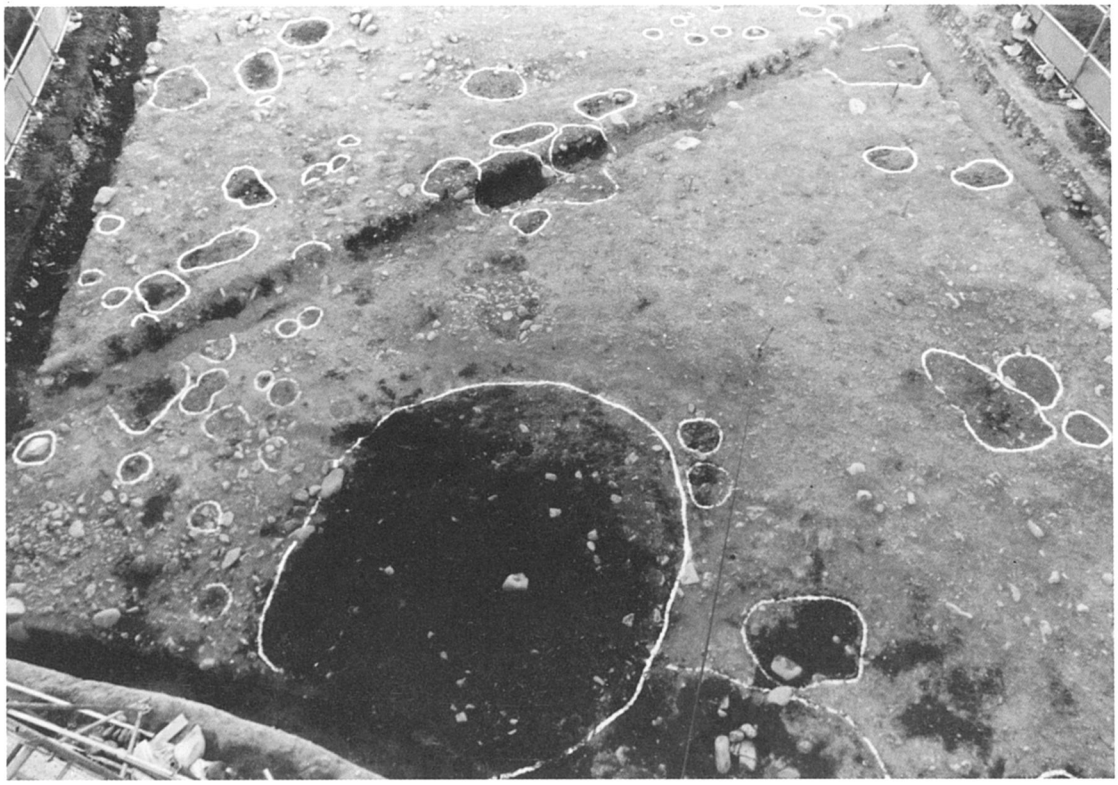


東微高地周辺空中写真

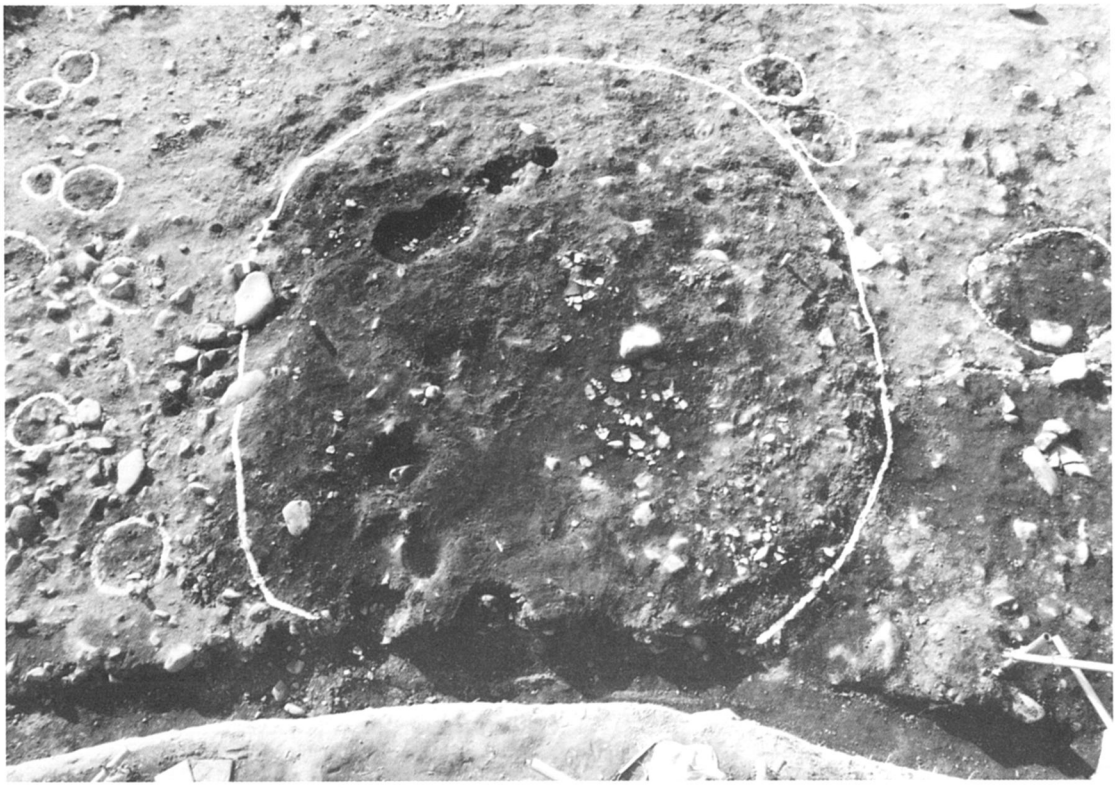
調査区全景(東より)



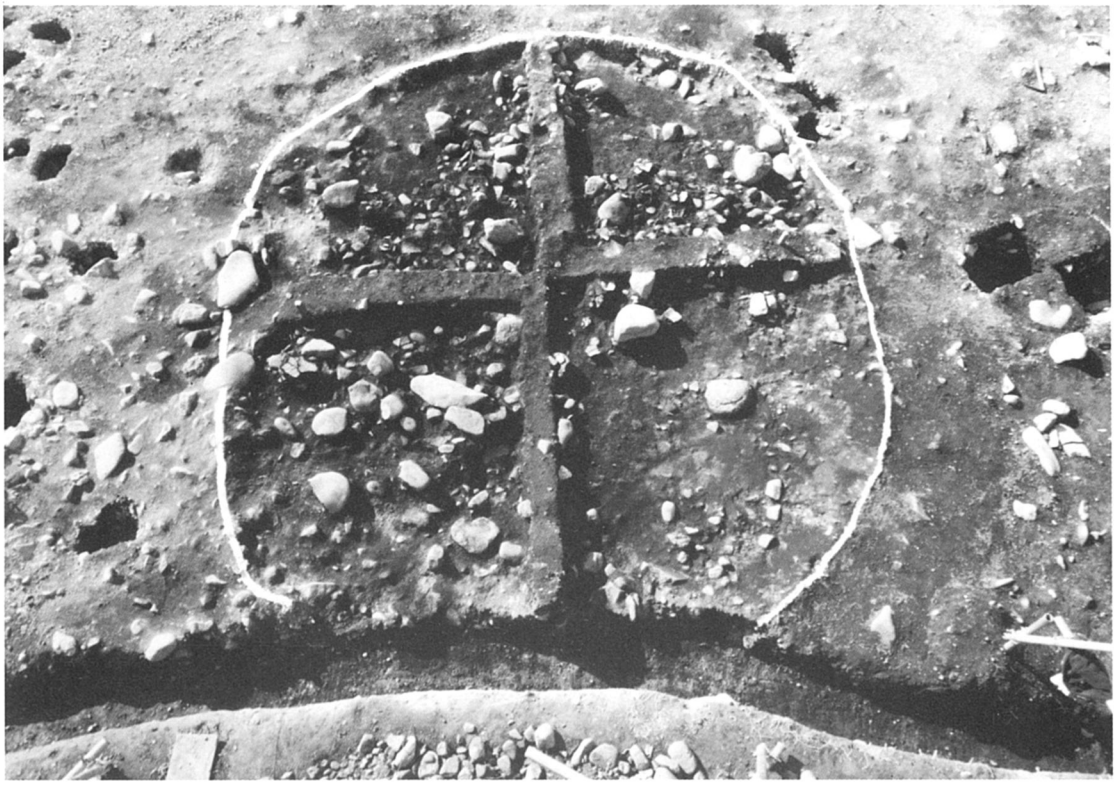
東微高地周辺(東より)



東微高地遺構検出状況



71－ＯＤ検出状況

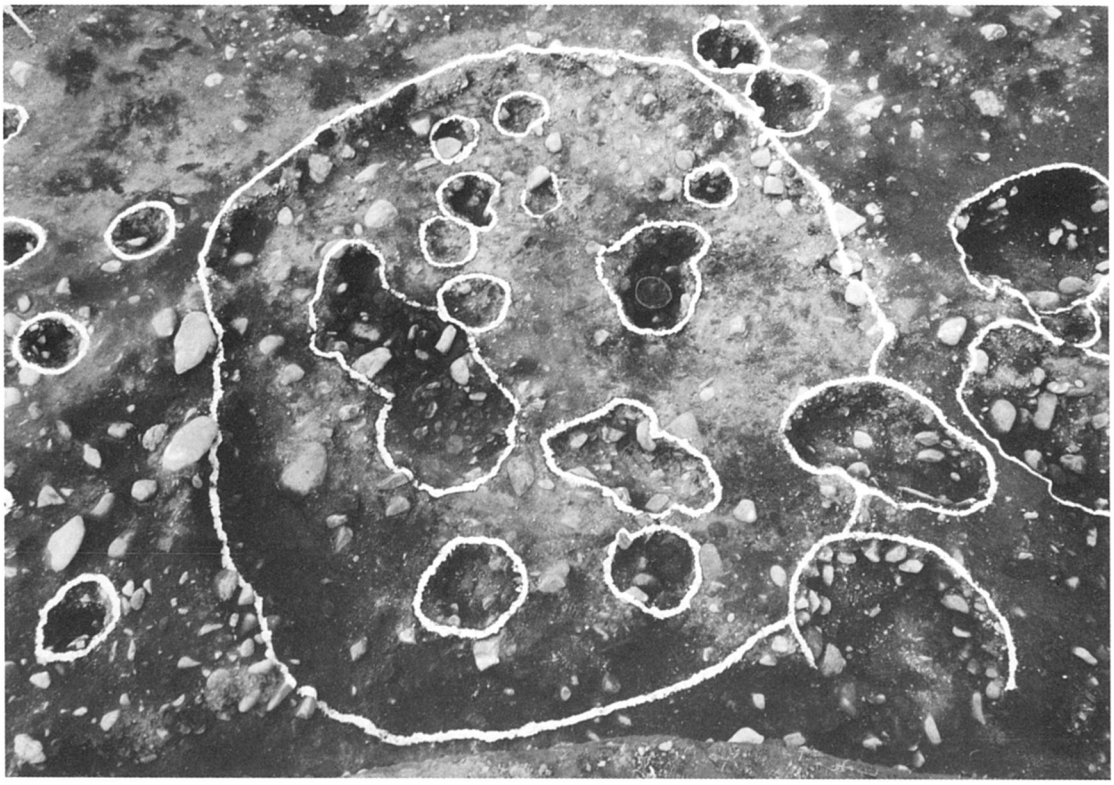


71－ＯＤ遺物出土状況

71－ＯＤ遺物出土状況（細部）

71－ＯＤ遺物出土状況（細部）

71－ＯＤ遺物出土状況（細部）



71－ＯＤ完掘状況

71－ＯＤ内埋甕検出状況